



Title	世界の中のポルトガル語：「世界におけるポルトガル語の現状に関する学術会議」1983年、リスボンより
Author(s)	河野, 彰
Citation	大阪外国語大学学術研究双書. 1993, 9, p. 1-175
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80054
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

世界の中のポルトガル語

(「世界におけるポルトガル語の現状に
関する学術会議」1983年、リスボンより)

河 野 彰 監 訳

1 9 9 3

世界の中のポルトガル語

(「世界におけるポルトガル語の現状に
関する学術会議」1983年、リスボンより)

河 野 彰 監 訳

1 9 9 3

Publications of Osaka University of Foreign Studies, No.9 1993

THE PORTUGUESE LANGUAGE IN THE WORLD

—Selected articles from the Proceedings of THE CONGRESS
ON THE PRESENT SITUATION OF THE PORTUGUESE
LANGUAGE IN THE WORLD, 1983—

Translated from Portuguese by Akira Kono, Hiroshi Arimizu,
Akihiko Azuma, Teruhiro Bando and Etsuko Hirata

CONGRESSO SOBRE A SITUAÇÃO ACTUAL DA
LÍNGUA PORTUGUESA NO MUNDO LISBOA-1983
ACTAS

volume I, Lisboa 1985 volume II, Lisboa 1987

Instituto de Cultura e Língua Portuguesa

This book is published in Japan with the permission of the
Instituto de Cultura e Língua Portuguesa.

目 次

訳者解説（河野 彰）	1
I. ブラジルにおけるポルトガル語	
1. 「ブラジルとポルトガル語」	
シルヴィオ・エリア（河野 彰訳）	13
II. アフリカにおけるポルトガル語	
1. 「アフリカにおけるポルトガル語の将来—社会文化的観点から—」	
マヌエル・フェレイラ（東 明彦訳）	41
2. 「アンゴラにおける言語問題についての考察」	
イレネ・ゲーラ・マルケス（有水 博訳）	75
3. 「モサンビックにおけるポルトガル語の現状」	
ペルペトゥア・ゴンサルヴェス（有水 博訳）	95
4. 「ギニア・ビサウにおけるポルトガル語の現状と展望」	
マリア・アウグスタ・エンリケス（坂東照啓訳）	107
5. 「ポルトガル語—ギニア・ビサウのクレオール 文法構造におけるその存在」	
ベンジャミン・ピント＝ブル（坂東照啓訳）	119
6. 「カーボ・ヴェルデにおけるポルトガル語の現状」	
ベルミーロ・ラーモス（坂東照啓訳）	135
7. 「サントメ・エ・プリンシペの島々におけるポルトガル語の現状」	
カルロス・エスピリト・サント（坂東照啓訳）	145
III. アジアにおけるポルトガル語	
1. 「東アジアにおけるポルトガル語及び ポルトガル語起源のクレオールの現状と見通し」	
グラシエッタ・バターリャ（有水 博訳）	159
2. 「ゴア、ダマン、ディウにおけるポルトガル語の衰退 —その普及のためのいくつかの提案—」	
カルロス・シャヴィエル（平田恵津子訳）	167

収録論文原題

Sílvio Elia, *O Brasil e a língua portuguesa*

Manuel Ferreira, *Numa perspectiva sociocultural. Que futuro para a língua portuguesa em África?*

Irene Guerra Marques, *Algumas considerações sobre a problemática linguística em Angola*

Perpétua Gonçalves, *Situação actual da Língua Portuguesa em Moçambique*

Maria Augusta Henriques, *Situação e perspectivas do Português na Guiné-Bissau*

Benjamin Pinto-Bull, *O português, presente nas estruturas gramaticais do crioulo da Guiné-Bissau*

Belmiro Ramos, *Situação actual da Língua Portuguesa em Cabo Verde*

Carlos Espírito Santo, *Situação actual da Língua Portuguesa nas ilhas de S.Tomé e Príncipe*

Graciete Batalha, *Situação e perspectiva do Português e dos crioulos de origem portuguesa na Ásia Oriental*

Carlos Xavier, *O declínio da Língua Portuguesa em Goa, Damão e Diu (Algumas sugestões para a sua divulgação)*

訳 者 解 説

訳者代表 河 野 彰

1.

本訳書は、1983年6月28日より7月3日にかけてポルトガルのリスボン大学において開催された Congresso sobre a Situação Actual da Língua Portuguesa no Mundo (世界におけるポルトガル語の現状に関する学術会議)の議事録(第1巻1985年、第2巻1987年)所収の論文から10編を選んで訳出したものである。当初の予定では、もう少し多くの論文を訳出するはずであったが、諸般の事情で結局本訳書に収めたような10編のみとなってしまった。本訳書刊行の目的は、従来我が国で、つとに情報の不足しているポルトガル、ブラジル以外のポルトガル語圏の国々におけるポルトガル語の現状を日本人読者に伝えるというものであった。わずか10編では十分とはいえないが、とにかく我々には、ポルトガル、ブラジル以外で用いられるポルトガル語に関する情報がほぼ皆無であったので(註1)、多少なりとも我が国のポルトガル語研究に寄与できるのではないかと、考えたからである。

ところで、本訳書刊行の提案をされ、翻訳権の交渉に当たられたのは有水博教授であった。有水教授はアンゴラやモザンビークに滞在した経験をお持ちになる我が国のポルトガル・ブラジル研究者のなかでも異色の存在であり、ただ単にポルトガル、ブラジルに偏ることなく、ポルトガル語圏全体に渡る広い視野の持ち主である。日頃の授業でも、ポルトガル、ブラジル以外のポルトガル語圏に関する知識を学生たちに与えておられるが、これも他大学のポルトガル語関係の学科に比べて、本学の特色と言えるかもしれないと、私などは日頃、密かに自負しているのである。

さて、上述の「世界におけるポルトガル語の現状に関する学術会議」について、少し触れておこう。1980年はポルトガルの生んだ最大の詩人ルイス・

2 訳者解説

デ・カモンイス (Luís de Camões) の没後400年に当たり、リスボン大学文学部のジャシント・ド・プラード・コエリョ (Jacinto do Prado Coelho) 教授の提案で、ポルトガル語に関する学術会議が企画された。ポルトガル政府および他の関係機関の援助をうけ、さらにユネスコの援助もあって、本会議は開催の運びとなった。この会議にはポルトガル語を母国語あるいは公用語とするポルトガル、ブラジルおよび後述のアフリカの5か国の代表がすべて出席した。このことは特筆に値しよう。また、その他のポルトガル語圏 (マカオ、東チモールなど) から現地に長期滞在している (していた) ポルトガル人研究者が参加して、それぞれの地域におけるポルトガル語の現状についての発表をおこなった。発表者を含むこの会議への参加国は26か国におよび、米国、英国、フランスなどを始め、外国人のポルトガル語研究者も多数参加した。我が国からは東京外国語大学の池上岑夫・金七紀男両教授の名が参加者名簿に見られる。

本会議は大きく3つのセッションに分かれた。1) 世界各地におけるポルトガル語の現状に関する全体会議、2) 世界におけるポルトガル語の現状、保持、普及についての討論会、3) 現代ポルトガル語の諸相をテーマにした各研究者による自由な研究発表。本訳書に収録した論文は一部を除き、ほとんどが1) のセッションでなされた報告である。

以下、本訳書の背景となる「世界におけるポルトガル語の現状」について簡単な解説を施そう。

2.

ヨーロッパ西端の地理的には小さなポルトガルという国の言語が5大陸にまたがる広がりを持つのは、当然のことながら、いわゆる「大航海時代」の所産のひとつである。世界の各地にその足跡を残したポルトガル人は、我が国が最初に接したヨーロッパ人であり、またポルトガル語は最初に接したヨーロッパの言語であった。我が国語学界に特異な地位を占める「キリシタン語学」も、このようなポルトガルの15、16世紀における地理的発展の文脈において読みとるべきものであろう。(註2)

ポルトガル語は、ポルトガルの言語であるだけでなく、ブラジルの言語であることは、最近ようやく我が国でも一般的に認知されるようになってきた。ポルトガルの植民地であったブラジルは1822年という早い時期にポルトガルから独立したが、本訳書所収の論文でシルヴィオ・エリアが述べているように、独立以前からすでにポルトガル語がブラジルの国語となる体制が整っていたのである。ただ、ポルトガルのポルトガル語とブラジルのポルトガル語の間に相違があることは事実であり、また、ブラジルのナショナリスティックな気運も手伝って、一時は（とくに言語学者以外から）「ブラジル語」という概念が盛んに提唱されたこともあったが、今日では、やはりシルヴィオ・エリアが述べるように、この問題は決着がついている。ブラジルで用いられている言語はポルトガル語なのである。したがってポルトガル語こそが、ポルトガルとブラジルを文化的に結びつけている絆と言っても過言ではないだろう。ちなみに、ブラジルはポルトガル語圏の中で、最大のポルトガル語話者を有する国であることも我々は忘れてはならない。

3.

次にアフリカに目を転じてみよう。「ポルトガルは最初で最後の植民地帝国」といわれるように、長い間（約5世紀にわたり）アフリカにいくつかの植民地を保持していた。これら植民地での解放戦線との戦いの疲弊が、1974年4月25日のいわゆる「4月革命」の原因のひとつと考えられる。これを契機に、アフリカのポルトガル植民地は次々と独立を果たしていき、あらたに次の5つの共和国がアフリカに誕生した。すなわちカーボ・ヴェルデ、ギネア・ビサウ、サントメ・エ・プリンシペ、アンゴラ、モザンビークである。だが問題は独立後の言語政策であった。本訳書所収の諸論文で述べられているように、それぞれの国にそれぞれの事情があり、決して一様ではない。たとえば、クレオールが発達した地域と多くの（部族語を含む）競合する言語を持つ地域では、国民の間にポルトガル語の普及度その他に異同があるのは当然である。たとえば、カーボ・ヴェルデ、ギネア・ビサウ、サントメ・エ・プリンシペの3国ではポルトガル語を基盤としたクレオールが発達しており、

これらポルトガル語系クレオールとポルトガル語の関係が問題となる。一方、アンゴラやモザンビークではアフリカ諸語とポルトガル語の関係が問題となる。たとえば、アンゴラではバントゥー系のキンブンドゥ語 (Kimbundu) との関係、また、モザンビークでは現地の部族語との関係の他に、スワヒリ語の影響も見逃せない。また英語との競合関係も無視できない。

しかし、あらたにポルトガルから独立したアフリカの5か国がとった政策はポルトガル語を捨てない、否、むしろ積極的にポルトガル語を活用しているという点で一致を見た。これら5か国は *África lusófona* (ポルトガル語圏アフリカ) として、再生したのである。あれほど、ポルトガル植民地主義と熾烈な戦いをしたこれら5か国がなぜ旧宗主国の言語を積極的に「公用語」として採用したのであろうか。その背景には複雑なアフリカの言語事情が介在しているわけで、私のようなアフリカに疎い者には詳しく論じる用意はないが、ただひとつ言えることは、ポルトガル語を、独立後の国の技術面、教育面での発展に、また国際政治の舞台に積極的に発信するための手段として、また、これはきわめて重要なことであるが、国内統一のための手段としてポルトガル語を積極的に採用したということである。つまり植民地主義の残滓としてのポルトガル語ではなく、自らの手でつかんだポルトガル語へと変化したわけである。本訳書所収のそれぞれの論文の中で述べられているように、ポルトガル語圏アフリカの作家たちは、自分たちのポルトガル語で積極的に作品を発表しており、それぞれ独自の色彩を帯びたポルトガル語の文学作品の登場は、ポルトガル語をますます豊かな言語へと発展させて行くであろう。(註3)

アフリカの旧ポルトガル植民地のうち、二大国のアンゴラとモザンビークは内戦が続き、国力が疲弊している。これらの政治問題が解決すれば、そして上述のようなポルトガル語を通じての文化活動が継続して行われれば、私は、ポルトガル語という言語の未来は、ちょうど、世界に広まり、各地域の独自性をその中に織り込みながら、ますます「言語的勢力」を増しつつある英語のような言語になるのではないかと思う。現在、社会言語学の分野では

English に変わる Englishes という概念が提唱されているが、ポルトガル語も Portuguese ではなく、Portugueses になる日もそう遠くないのではないかと楽観的な希望を抱いている。まさに、アフリカのポルトガル語は社会言語学の観点からも、多くの興味深い問題を内包していると言えよう。それにつけても、本訳書中にも述べられているように、各地のポルトガル語の実態調査がもっと促進される必要があるだろう。今後の研究成果に期待したい。

4.

アジアにおけるポルトガル語の状況は、アフリカやブラジルの場合とは異なり、衰退の一途をたどっていると言っても過言ではないであろう。

かつて、ポルトガル語はアジアにおいて、一種のリングァ・フランカの役割を果たすほどであったが、1961年にポルトガル領インド（ゴア、ダマン、ディウ）は、インド軍によって、“解放”され、また東チモールは1975年にインドネシアに武力併合され、現在にいたっている。また、マカオも中国に返還の予定である。今世紀初頭までは、インド亜大陸やセイロン（現スリランカ）、ジャワ、マラッカなどアジア各地でポルトガル語系クレオールが用いられていたようであるが、その大部分は衰退した。とくに、インドにおいては、外国語としてのポルトガル語の地位も英語に取って代わられた。東チモールではインドネシアの文化政策により、インドネシア語化が進行中で、ポルトガル語はやはり衰退の危機的状況にある。マカオに関しても、圧倒的に中国語（広東語）が優勢である。

また日本語に関して言えば、キリシタン伝来当時は、宗教関係の語彙を中心に多くのポルトガル語起源の借用語が用いられたが、現在では、パン、ボタンなど、わずかに数語が定着しただけで、あとはほとんど消失したと言っても過言ではない。（註4）

このように、アフリカにおける状況とは異なり、アジアにおけるポルトガル語の状況は危機的である。今後は、「外国語としてのポルトガル語 (Portuguese as a Foreign Language)」として、その普及を計る以外にポルトガル語の生き延びる道はないのではないかとと思われる。

5.

ポルトガル、ブラジル、ポルトガル語圏アフリカをつなぐと、一種のポルトガル語圏といったものが描けるが、これに、米国北東部（マサチューセッツ州、ロードアイランド州など）を中心とするポルトガル移民のコミュニティーや現在ブラジル人が多く居住すると言われているニューヨークやフロリダを加えると、まさにポルトガル語は大西洋を中心とした言語と言えるのではないだろうか。（註5）

今年（1993年）は、種子島にポルトガル人が漂着してからちょうど450年目に当たる記念すべき年である。これを機会に、あらためてポルトガルが歴史に残した足跡を振り返る必要があるが、本訳書は言語の面からそれを見ようとした試みである。世界各地のポルトガル語は、一面では確かにポルトガル植民地主義の残滓かもしれないが、また同時に、アフリカの例に見られるごとく、きわめて現代的な問題でもある。このささやかな訳書を準備する段階で、我が国における数少ないポルトガル語およびポルトガル・ブラジル研究者として、我々はポルトガルやブラジルといった個にこだわらず、広くポルトガル語圏全体を包括するような視座を持ち続けねばならないと自戒した次第である。

註

1. 1983年のリスボンの学術会議議事録が出版されるまでは、ポルトガル語圏全体の情報を得ようとするには以下のような書物が便利であった。

Pilar Vázquez Cuesta & Maria Albertina Mendes da Luz: *Gramática Portuguesa*, 2 Vols, Editorial Gredos, Madrid, 1971 (ポルトガル語訳 *Gramática da Língua Portuguesa*, Edições 70, Lisboa, 1980) [特に本書の第1章]

Fernando Venâncio Peixoto de Fonseca : *O Português entre as Línguas do Mundo*, Livraria Almedina, Coimbra, 1985

Paul Teyssier : *Histoire de la langue portugaise*, Paris, Presses Universitaires de France (Que sais-je?), 1980 (ポルトガル語訳 *História*

da Língua Portuguesa Lisboa, Sá da Costa Editora, 1982)〔本書の第4章がブラジルのポルトガル語、第5章がアフリカとアジアにおけるポルトガル語を扱っている。簡潔だが有益な本〕

我が国で、ポルトガル、ブラジル以外のポルトガル語圏の言語問題を扱った業績としては一之瀬敦氏の以下のような論考がある。いずれも、ポルトガル語というよりはポルトガル語系クレオールを扱ったものである。

「ギニア・ビサウの言語状況について」ANALIS XXV, Associação Japonesa de Estudos Luso-Brasileiros, Tokyo 1991

「ギニア・ビサウのキリオル語の起源について」拓殖大学語学研究 68

「ギニア・ビサウのキリオル語」拓殖大学語学研究 70

「キリオル語のTMAシステムの変化について」拓殖大学語学研究 71

2. ジョアン・ロドリゲス『日本語小文典』(上、下)、岩波文庫、1993年の訳者解説で訳者の池上岑夫氏は次のように述べておられる。(下巻 p.p.258-259)

「しかしヨーロッパ人にとっては大発見の時代でもあった大航海時代は、ヨーロッパが非ヨーロッパ世界と出会った時代、そしてヨーロッパが眼前に登場した諸民族を客体化し、その自然と文化の総体を認識し、その成果を自己の知の世界へ組みこんで自己の視野を拡大すべく歩み始めた時代でもあった。このような歴史的文脈のなかに『小文典』を(そして『大文典』も)おいて考えれば、この文典がたんに当時の日本語の姿を伝える外国語資料として貴重な文献であるばかりでなく、いやそれ以上に、「直なることば」のヨーロッパが「曲なることば」である日本語をどのように認識しようとしたか、その認識活動の一つの到達点、一つの記録としてきわめて重要な意味をもつものであるとすることができようし、従来ややもすれば外国語による日本語資料として、国語学の視点のみ(傍点は原文)から論じられ、研究・論考の対象とされる傾きの強かったこれら大小の文典が、この視点からの読みなおしを待っているとも言うことができよう。」

3. ブラジルの出版社ÁticaがAutores Africanos (アフリカの作家達)というシリーズを刊行し、アンゴラのポルトガル語作家の作品を出版しているのも、旧宗

主国のポルトガルのみならず、ブラジルでもポルトガル語圏アフリカに多大な関心を示しているという何よりの証左であろう。まさに、ポルトガル語というひとつの言語が中核となったひとつの文化圏の登場を認識させるに十分である。

4. 日本語におけるポルトガル語からの借用語については、以下を参照。

矢崎源九郎：『日本の外来語』、岩波新書、1964年

榎垣 実：『日本外来語の研究』、研究社、1963年

松岡洸司：「外来語の歴史」（森岡健二他編『講座日本語学4 語彙史』、明治書院1982年所収）

Tai Whan Kim, *The Portuguese Element in Japanese, A critical survey with glossary*, Coimbra, Suplemento V da "REVISTA PORTUGUESA DE FILOLOGIA", 1976

一般の国語辞典や外来語辞典に掲載されているポルトガル語起源とされる借用語、たとえば、カルサン（<calção）、じゅばん（襦袢）（<gibão）、ビードロ（<vidro）などは、現代日本語のなかでますます死語化している（とくに若い世代において）事実注目する必要がある。

5. 米国の北東部（ニューイングランド）は伝統的にポルトガル（とくにアソーレス諸島）からの移民の多い地方である。ポルトガル人コミュニティではポルトガル語の新聞やラジオ放送がある。また、最近の現象として、ブラジル経済の不況から多くの日系ブラジル人が我が国に「出稼ぎ労働者」として流入しているが、これは日系人だけでなく、多くのブラジル人が経済的理由からヨーロッパや米国に流出している。（たとえばブラジルのニュース週刊誌VEJA誌1991年8月7日号はこの問題の特集している。この記事によると、1991年の時点で33万人が米国に滞在しているという。）

米国のポルトガル人移民の用いるポルトガル語の特徴については、すでにいくつかの研究がある。私の目に触れたものだけをあげると、次のようなものがある。

Leo Pap : *Portuguese-American Speech, An Outline of Speech Conditions among Portuguese Immigrants in New England and Elsewhere in the United States*, New York,

King's Crown Press, 1949 [先駆的研究]

Naír Odete da Câmara Borges: *Influência anglo-americana no falar da ilha de S. Miguel(Açores)*,
Coimbra, 1960

[米国からアソーレス諸島のサン・ミゲル島に帰国した元移民たちのポルトガル語に見られる(アメリカ)英語からの借用語に関する調査]

Clea Rameh: "The Portuguese-English Language Contact in the United States" in *The Third LACUS Forum*, Columbia, Hornbeam Press, 1976

—————"Aspectos da língua Portuguesa nos Estados Unidos da América do Norte" in *From Linguistics to Literature, Romance Studies Offered to Francis M. Rogers*, Amsterdam, John Benjamins B.V. 1981

[米国在住のポルトガル系移民たちのポルトガル語の英語との接触による変容]

Akira Kono: "A Língua Portuguesa nos Estados Unidos" in *ANAIS XI*, Associação Japonesa de Estudos Luso-Brasileiros, Tokyo, 1977
[上記の研究に基づいた簡単な紹介]

私見では、ポルトガル語圏全体のポルトガル語の現状を考える際には米国におけるポルトガル語の問題も見落とすべきではないと思う。現在、米国や我が国に労働力として滞在中のブラジル人が、米国北東部のポルトガル系移民のようなコミュニティを形成するかどうかは、今後の事態の推移によるであろうが、彼らのポルトガル語の変容(英語、日本語との接触による)や母語保持の問題も今後は検討されなければならないだろう。なお、日本語とポルトガル語の言語接触の問題を、16世紀のいわゆる「キリシタン時代」、今世紀初頭より開始された日本人のブラジル移民、現時点での15万人にのぼる日系ブラジル人の我が国への流入という3段階に分けて、それぞれの段階の特徴を簡単に検討したものに、次のものがある。

Akira Kono: "Três Etapas no Contato Lingüístico Português-

10 訳者解説

Japonês”, Paper read at XVI Symposium on Portuguese Tradition (Europe, America, Africa, Asia), University of California at Los Angeles, April, 1993.

I ブラジルにおけるポルトガル語

ブラジルとポルトガル語

シルヴィオ・エリア

1. ブラジルではポルトガル語が話され、また書かれている。

このような自明なことを言うと、常に繰り返し取り上げられるブラジルのポルトガル語をテーマとするこのような発表では奇妙な感じを持たれるかも知れない。しかしながら、このような自明な事柄はこれまで次のような二つの議論をもって反論されてきた。第一の反論はブラジル全土に拡大した言語はもはや本来の意味でのポルトガル語ではなく、ポルトガルのポルトガル語から枝分かれしたものであるという、有名な「ブラジル語」という概念を提示するものである。第二の反論はブラジルではポルトガル語のみが話されているわけではないとする議論である。

2. ポルトガル語から分かれた「ブラジル語」という概念はもはや時代遅れのものである。セラフィン・ダ・シルヴァ・ネットやグラッドストーン・シャージェス・デ・メーロらの研究がこの問題に関する議論を正しい方向へ導いていったのである。「ブラジルのポルトガル語」（むしろこのように称すべきである）はポルトガルのポルトガル語の変種であり、ラテン語から分化した他のロマンス諸語と並列に論じるべきものではないのである。事実、ポルトガルからブラジルにもたらされた言語を我々なりに発音していることはしているが、それは「ブラジル風の発音」とでも呼ぶべきものである。また、語彙に関してもポルトガルとの相違が指摘されている。しかしながら、いわゆる「ブラジル風の発音」の大部分は本来正当なポルトガルの発音であり、南米大陸のこの地により良く保存されているものである。いわゆる移植された言語というものは、すでに知られているように、保守的な性格を有するものである。同様に、多くのブラジル風の語彙というものも、すでに十分に証明されているように、正当にポルトガルから継承したものに過ぎないのである。

そうは言っても、トゥピー語やアフリカ起源の語彙を考慮に入れると、植民者によってもたらされた語彙に新しい語彙が加えられなかったということではない。それどころか、これらの語彙はブラジルのポルトガル語の中にかなりの割合を占めるのである。しかし、ブラジルのポルトガル語の本質的な部分、すなわち形態・統語面はゆるぎないものである。形態面では、ポルトガルのポルトガル語と異なる顕著な特色は見られないし、また統語面でしばしば指摘されてきたような事柄は文法上の問題というよりもむしろ文体的なものである。また、語彙に限ってみても、基礎語彙と言われるもの、例えば、親族名称、身体部位の名称、人間固有の行為を示す語彙、森羅万象を示す語彙や文法語などはすべてポルトガルのものである。pai, mãe, tio, avô, cunhado,...; pé, mão, cabeça, nariz, olho, cabelo, dedo, unha...; andar, correr, dormir, viver, morrer, subir, descer, cheirar, ver, ler, saber, fazer, chorar, rir,... さらに前置詞、副詞、接続詞など、実際無数にあるのである。このことからすれば、有名な「ブラジル語」という概念に何の意味があろうか。ポルトガル語のアメリカ大陸における変種に対する誠に残念な名称と言わざるを得ないのである。さらにまた、「ブラジル方言」という概念も、この表現が持つ軽蔑的な響きだけでなく、方言とは何かという概念の定義の難しさゆえ、もはや時代遅れの概念となっている。またしばしば用いられる「国語」(Idioma Nacional, Língua Nacional) という表現も「国歌」などと同じく尊重されるべきものではあるが、実際は不明確なものである。

故ソーザ・ダ・シルヴェイラ教授は、ブラジルの言語の公式名称に関する意見書の提出を求められた際、1946年10月15日付けの意見書の中で次のように述べた。

すでに表明された意見に基づき、本委員会は次の事実を確認し宣言するものである。すなわちブラジルの国家語はポルトガル語である。そして、このことからしてブラジルの国家語の名称は引き続きポル

ポルトガル語とすべきものの結論に至った。この名称は諸事実に合致するだけでなく、「ポルトガル」と「語」という二語でもって、我が国の起源と文明化した民としての我々が形成の基礎を想起させるという利点を持つからである。(原註1)

我が国言語学界の泰斗であり上記委員会の委員でもあるクロヴィス・モンテイロ教授は、自己の意見書の中で、次のような意見を表明した。

我が国において、ポルトガル語はその統一性が破られるといった不運に見舞われることがなかった。北東部ではゆったりと歌うように話され、また共和国の首都(*)ではより速く話されるが、常に同一の言語なのである。(原註2)

*ここでは明らかに、当時の首都であったリオデジャネイロを指している。

さらにまた、ブラジル国内外で著名なセルソ・クーニャ教授は、国立図書館長の要職にあった1957年に「カモンイスとポルトガル語の統一性」と題する講演をされたが、その中に次の一節がある。

近代文学語(*)の確立に際して支配的であった「統一の精神」は、聖なる十字架をその象徴として世界の四方八方へと拡がり、その十字架の慈悲深い影響下で海外のポルトガル帝国は文明化していったのである。そこから相互に親密さを有した言語的、文化的な奇跡的な統一性がポルトガルとブラジルの間に生じたのである。このことは、遠い昔の統一性をもはや理解することが不可能となった現代の分裂した世界においては驚異的なことなのである。

*ここで著者は特にポルトガルの南北間に存在する方言上の相違を捨象し、芸術的により高い次元へと高めたカモンイスの言語の統一的作用に言及している。(原註3)

ブラジルのポルトガル語の統一性はもはや共通意見となりつつあるので、最後に、このような問題に関して、欠くことのできないセラフィン・ダ・シルヴァ・ネットの言をここに引こう。

このように、語彙や統語面において、海外のポルトガル語の標準語は、共通の言語構造を持つことでポルトガルのポルトガル語と対照的な立場にたつ。これは一般的に、海外のポルトガル語の起源は16世紀のポルトガル語にあるからであり、植民者によって口頭でもたらされたり、当時の知識階級が読んでいた文学作品を通じてもたらされたものである。

しかしながら、ポルトガル語の本質は、このような海外のポルトガル語の共通性にあるというよりも、むしろそれらの基礎を築いている言語構造にあり、結局は皆すべてその変種に過ぎない。なにものもこの明白な点を打ち破るものはない。(原註4)

ここで、シルヴァ・ネットは「標準語」について述べているのだが、ブラジルの民衆階層のことばにおけるポルトガル的特色も否定され得ないものである。フランスの学者、故I.S.レヴァーは次のように述べている。

そうでないと証明されない限り、私はブラジル民衆階層のことばをポルトガル(強調は原文)語の方言のひとつとみなす。その証拠として、16、17世紀のポルトガル語を再建してみれば明らかになる。(原註5)

著名な言語学者エウジェニオ・コセリウの有名な「体系」「規範」「パロール」という区分は、新世界にもたらされたヨーロッパの諸言語の特色のような歴史的、言語的な問題にうまく適用できる。

「体系」とは構造上の可能性の開いた集合である。「規範」はこれらの可能性のうちのいくつかを集合的に実現するということである。また、「パロール」は「規範」の個人的な実行であり、間接的に「体系」とつながっている。

「パロール」とは、すなわち「個人語」をかたちづくる実現である。

ブラジルとポルトガルのポルトガル語の問題においては、コセリウにより提案されたこの区分に従えば、次のような結果になるろう。

A) 両国の言語の構造的「体系」は同一のものである。これは、ジョアン・リベイロが言うようにブラジルのポルトガル語は本質的にはポルトガルのもと同じということである。つまり我が国においてポルトガル語はロマンス諸語中の新しいひとつの言語になるほどには変容しなかったということである。

B) しかしながら、以下に例を示すように、「規範的」な実現においてはいくつかの相違があるということである。

a) 音声面：ポルトガルでは、強勢のない、短く発音される *e* が存在し（マルチネの言う中立母音）、この母音は「一開口音、一閉口音、一前舌、一後舌、一非円唇、一円唇」のようにマイナスの素性として定義される。恐らくは18世紀後半に生じたものである。ブラジルではこの変化の中途の段階で止まっている。つまり強勢のない *e* の発音は、特に語末においては *i* という発音を採用しているからである。例として、ポルトガルでは *tard'*, *pont'*, *viv'*, *p'lotão*, *qu'rer* であるが、ブラジルでは *tardi*, *ponti*, *vivi*, *pêlotão*, *quêrer* が普通である。また *minino*, *pirigo*, *ricibo* などのような発音もあるが、これはソーザ・ダ・シルヴェイラが指摘したようにある種の動詞における母音の同化による現象であろう。（原註6）

通時的には、*minino*, *milhor* のような発音はすでに16世紀から見られるものである。（原註7）

また、ブラジルではポルトガルで生じたような、例えば *beijo* > *bâijo*, *vintêm* > *vintâi* のような *ei* が *ai* に、また *êi* が *âi* となるような音声変化は生じなかった。同様に、ポルトガルでは口蓋音の前の強勢のある *e* が *a* に変化した。例えば、*vâjo*, *vânho*, *ispâlho*, *fâcho*（これは19世紀にリスボンで生じた変化である。：Teyssier 1980:81参照）

上述のようなポルトガルとブラジルの相違点は音声上のものであって、音韻

上のものでないことに注意されたい。

b) 形態面：形態面では語形変化と語形成の問題を扱うこととする。

語形変化においては、女性形や複数形の形成また動詞の活用などにおいてポルトガルとブラジルの間にはまったく相違がない。文法範疇は厳格に同一のものである。しかし形容詞の比較級においては、ポルトガルで用いられる分析的な *mais pequeno* に対してブラジルでは *menor* が普通である。

語形成に関しては、注目すべき相違点はごくわずかである。ブラジルでは縮小辞の *-inho* が好まれるが、ポルトガルでは *-ito* が広く用いられている。(例えば、ポルトガルの *morenito* に対してブラジルの *moreninho* を見よ) さらにまたいくつかの語形成において両国には相違点がある。*patinagem* (ポ)、*patinação* (ブ)、*monárquico* (ポ)、*monarquista* (ブ)、*banheiro* (ポ)、*banhista* (ブ) これらは明らかに「規範」における相違であり、「体系」に関するものではない。

c) 統語面：ここでもまた取り上げるべき項目はほとんどない。まず、一時盛んに議論された弱形人称代名詞の位置の問題を見よう。この問題は、サイド・アリーも指摘したように、部分的には統語上の問題というよりも音声学上の問題である。弱形人称代名詞は、ポルトガルでは強勢を受けないが、ブラジルでは半強勢的な扱いを受ける。両国で、文の韻律が異なるので、当然のことながらこのような単音節語の位置が異なることになる。あるいはまた、すでに先人により指摘されたように、「我々が代名詞の位置を決めるのではなく、代名詞の方が自ずとその位置を決めるのである。」しかしながら、書きことばにおいては、ブラジルにおける弱形代名詞の位置もポルトガルの標準に近いものとなる。

その他のよく取り上げられる問題としては、直接目的語として用いられる主語形の *ele, ela* がある。これは民衆的語法であったが、ブラジルではすでに口語的な用法へと格上げされている。ポルトガル語のいわゆる定向変化 (*drift*) がこのような変化を促進させていることに留意すべきである。なぜなら代名詞の語形変化はロマンス諸語に残存する数少ないラテン語の総合

的特徴の残滓だからである。しかしながら、vi eleのような構文は口語法では避け難いものではあるが、形式ばった正式のスタイルでは避けるべきものである。

また、ポルトガルでは前置詞の a を用いるところに、ブラジルでは em が用いられる。例えば、estar na janela (ブ)、estar à janela (ポ)、ir no colégio (ブ)、ir ao colégio (ポ)、ir em casa (ブ)、ir a casa (ポ)、trazer a faca na cinta (ブ)、trazer a faca à cinta (ポ) である。

ブラジルの大部分の地域では親称代名詞は você であるが、ポルトガルでは tu が好まれる。ブラジルでさらに興味深いのは対称詞の混用である。主語形としては圧倒的に você が用いられるが、これがしばしば tu の目的格の形式と組になって用いられる。ブラジルでは次のような文はごく普通のものである。Eu te pedi o livro, mas você não trouxe.

両国間の語彙の相違に関しては、ここでは例示するのをやめておこう。ポルトガルとブラジルのそれぞれのポルトガル語の語彙の対照を体系的に行うのがここでの目的ではないからである。この問題については、A. ナセンテスの O Idioma Nacional, vol.IV やソーザ・ダ・シルヴェイラの Lições de Português といった書物を参照されたい。また、より最近の著作としては、ポール・テシエの Histoire de la langue portugaise, 特にその第4章を参照されたい。

3. 上述の第二の反論、すなわちブラジルではポルトガル語のみが話されているわけではない、つまり我が国は多言語国家であり、単一言語国家ではないという問題はより複雑で微妙な問題である。

4. ブラジルのポルトガル語の歴史は、ブラジル史上の大区分に対応して、やはり「植民地時代」と「独立後」に二分される。

植民地時代のブラジルでは、先住民の諸言語という固有の言語集団と移植された言語群すなわちポルトガル語とアフリカ諸語の存在を強調せねばならない。

黒人奴隷とともにブラジルにもたらされたアフリカ諸語は決して高い社会

的評価を受けるには至らなかった。パライーバ連邦大学の後援、リオデジャネイロ言語学サークルとの協賛で、ペルナンブーコ州ジョアン・ペソア市で1978年7月31日から8月5日に渡り開催された第一回ブラジル社会・民族言語学会での重要な研究発表で、イエーダ・ペソア・デ・カストロ教授はブラジルにおける「アフリカ諸方言」を次の4つに大別した。

a)「センザーラ（奴隷小屋）方言」：これはバントゥー語に由来するもので、民族的出自を異にする奴隷間でのコミュニケーションに用いられた。（16-18世紀）

b)「地方方言」：これはセンザーラ方言が東西に拡大したもので、プランテーションにおける労働の現場で奴隷間のみならず奴隷と主人の間の直接的かつより長期に渡る接触場面で用いられた。c)「鉾山方言」：ジェジェ(gege)語に由来したもので、主人たちのヨーロッパ語とより直接的な接触を持った。d)「都市方言」：恐らくはナゴー(nag ô)語に由来したもので、サルヴァドールやペルナンブーコなどの都市で用いられた。イエーダ・ペソア・デ・カストロ教授は19世紀のものと位置付けされているが、著者の見解ではそれ以前にさかのぼるであろう。

これらの種々のアフリカ黒人たちの諸方言（ただしポルトガル語を基盤にしたものである）は、とくに最後の二方言は徐々にポルトガル語諸方言と混雑していった。

このことは、つまりこれら諸方言はますますアフリカ色を薄め、ポルトガル語色を増していったということである。この問題の先駆的研究者はセラフィン・ダ・シルヴァ・ネットで、とりわけその著書Introdução ao estudo da língua portuguesaの「植民地時代ブラジルにおける言語接触と相互作用」と題した章でこの問題を扱っている。この箇所ではシルヴァ・ネットは「初期のポルトガル語の習得のより完成された段階として」の「セミ・クレオール」という概念を提示している。（原註8）

しかしながら、これら初期のアフリカ起源の諸方言はほとんど残っていない。1943年のO negro e o garimpo em Minas Gerais（第2版1964年）

と題した著書の中で、アイレス・ダ・マッタ・マシャード・フィーリョ教授は、かつて鉱山の作業現場で耳にすることのできた歌謡である「ヴィスongo」を通じて、サン・ジョアン・ダ・シャパーダのバントゥー族の黒人たちのクレオール方言が認められるとしたが、最近の著作（原註9）でセルソ・クーニャ教授は「サン・ジョアン・ダ・シャパーダのクレオールは消失した」と述べている。

その同じ箇所、セルソ・クーニャ教授はレシフェで1978年に開催された第11回ブラジル人類学会で発表されたカルロス・ヴォギト、マウリツィオ・ニェール両教授の「サンパウロ州におけるバントゥー語を基盤としたクレオール」に関する研究発表に言及している。さらに、「ミナス・ジェライス言語地図大要」（第一巻1977年）の主要な協力者のひとりであるマリオ・ロベルト・ロブリオ・ザガーリ教授は前述の第一回ブラジル社会・民族言語学会で「ミナス・ジェライスにおけるバントゥー系の二方言」という発表を行なった。しかしこれは（同教授の個人談話）わずか十数人のバイリンガルの人々が、一種の男性用の秘密コードとして（女性たちはこの言語に無知）バントゥー語の残滓を用いているに過ぎないようである。また、1969年ALFAL（ラテンアメリカ言語学・文献学会）での汎アメリカ会議での研究発表でカルロッタ・ダ・シルヴェイラ・フェレイラ教授の扱ったバイーア州南部のカラヴェーラス郡のエルヴェシアにおける（ほとんど消失しかけている）クレオールを付け加える必要があると、前掲書でセルソ・クーニャ教授は述べている。

これらはまさに、サン・ジョアン・ダ・シャパーダのクレオールと同様の消失する運命にある、もはや拡大する力も失った残滓に過ぎないのである。

5. ブラジル固有の言語であるにもかかわらず、先住民の言語もまた衰退した。

我が国の先住民は種々の理由で決して完全にヨーロッパ起源のブラジル文化共同体の中に完全に組み込まれることはなかった。ブラジル発見当時には恐らく150万人いたと思われる先住民のうち、現在では専用居住地として割り当てられたかあるいはこれから割り当てられる地域に約15万人が居住して

いるに過ぎない。しかし人種混合により先住民はブラジルの民族性を構成する要素としては大きなものがある。

アフリカ人の場合とは異なり、ブラジルではポルトガル語を基盤とするトゥピー語のセミクレオールは形成されなかった。先住民の言語は、植民地時代のある一定の期間、二つの道を通してある程度の活力を持ったのである。ひとつは、イエズス会士たちによって作られた、いわば「教養語」としての道であり、いわゆるリングァ・ジェラルがここから生まれた。これはラテン語をモデルとして文法が整備された、マトーゾ・カマラ教授が言うところの「イエズス会士のトゥピー語」である。この言語の研究に従事したジョゼ・デ・アンシエタ神父は有名な *Arte de gramática da língua mais usada na costa do Brasil* (コインブラ、1595年) を著したのである。故マトーゾ・カマラ教授は、この取り組みの積極的な面を取り上げて、次のように述べる。

アンシエタ神父はこれによって一定の成果をあげたのである。これは大変に興味深い事柄であり、より注意深く検討するに価する問題である。同神父は、部分的にはその目的を達成したのである。つまりトゥピー語を、ある種の理想、一般文法についての（根底ではラテン文法であったが）予見をもって整備し解釈する仕事をしたのであった。このように整備された言語を教理問答に用いたのであった。先住民たちは宗教的な面で同化するにつれて、言語的にも同化していったのであった。(原註10)

このようにしてトゥピー語で書かれたテキストが出現した。(我が国の先住民は文字を持たなかった点に注意) しかし、これはマトーゾ・カマラも指摘するように非母語者によって書かれたものである。周知のごとくアンシエタ神父自身も先住民教化のために多くの詩を書いた。

このリングァ・ジェラルは *abanheenga* と *nheengatu* の二つの方向へ分岐した。(これはそれぞれ「民衆の言語」「良き言語」の意) アマゾンのリオ・

ネグロ地域に移植された *nheengatu* は、マトーゾ・カマラが指摘するように、口頭の日常語となってしまったが、一方 *abanheenga* は、いわばより「純粹」な形で保持された。

この点に関して、マトーゾ・カマラは次のように述べる。

abanheenga と *nheengatu* についてのその後の研究は二手に分かれた。前者の研究では、本質的に宣教師たちの宗教文学についてのテキストの解釈がなされ、いわばトゥピー文献学とでも呼び得るものが誕生した。一方、後者については *abanheenga* に対して *nheengatu* がどの程度「くずれた」かを調査することが主要な関心事となり、その言語の機能を科学的に研究したものとはとうてい言えないものであった。(引用書：105－106)

トゥピー語のもう一方の経緯は歴史・社会的なものであった。セラフィン・ダ・シルヴァ・ネットが述べたように、植民地時代のブラジルにおける接触と相互作用である。

先住民はイエズス会士によって、村落に集められるか、最初は彼らを奴隷にしようと考えていた植民者に捕らえられた。しかし、先住民は狩猟採集民であり好戦的であったので、ポルトガル人の主要な目的であった耕作地での定住労働には向かなかった。したがってアフリカからの労働力に頼るしかなかったのである。すると、先住民は敵対的な要素とみなされるようになり、植民者による奥地探検隊により殺されたり、奥地へと追われ始めたのである。しかし、マヌエル・ディエゲス・ジュニオールが強調するように、先住民との混血はかなり早くから始まっていた。

ポルトガル人と先住民との接触からブラジルで最初の混血が誕生した。マメルッコである。これらの混血は正式な婚姻によって誕生したものではなかった。イエズス会士たちが努力したにもかかわらず、

婚姻よりも先住民とポルトガル人の同居が多く見られたのであった。
(原註11)

しかし、これら混血のマメルッコはその母語を植民者にもたらしたのである。そこで、デオドーロ・サンパイオは次のように述べる。「奥地探検隊の人々はほとんどすべてトゥピー語しか話さなかった。」(原註12)そしてよく知られているように、次のように言った。「18世紀初頭まで植民地で話されていたトゥピー語とポルトガル語の比率はだいたい3対1で、トゥピー語が優勢であった。」(P.48)しかしこの点に関して、セラフィン・ダ・シルヴァ・ネットはこのように考察する。「彼(サンパイオ)は非常に複雑な事柄を18世紀までについては一般化し過ぎている。(ブラジル内の)各地方を区別していないし、沿岸地方と内陸部の相違点にも注目しておらず、資料の出典も示していない。」(原註13)

サンパウロの場合、実際に混血の影響はブラジルの他の地域よりも強いものであった。セラフィン・ダ・シルヴァ・ネットも述べるように、「先住民の活動は彼らにとって有利な方向へと向けられた。すなわち奥地への浸透であった。」(前出P.55)この立場をセルジオ・ブアルケ・デ・オランダもっている。

多くの資料が民衆の最も低い階層(それは当然もっとも数の多いものである。)に言及しているのも当然である。そのような階層では数多くの先住民と混血したり共住しているので、先住民の言語を使用するのはほぼ当然のような状態であった。(原註14)

しかしながら、歴史家セルジオ・ブアルケ・デ・オランダはトゥピー語の使用を下層階級のみ限定しているわけではない。前述の引用箇所ですぐ後で、次のように付け加えている。

他のカピタニア〔植民地時代の行政組織〕の人々に較べて、教育のある階層や富裕階級のサンパウロの人々もまた先住民のリンギェ・ジェラルに通じていたことは、彼らの生活実態を考慮に入れば、至極当然のことであった。

しかし、このような状況はブラジル全土に拡がっていたわけでもなく、また長期間続いたわけでもなかった。都市部ではポルトガル語が支配的であった。また、内陸部では、行政がより多くの地域をその支配下に置き、学校を通じて、西欧分化を移植するにつれて、社会的威信のある、またより高度な知的財産の伝達手段である植民者の言語の前に、先住民の諸言語はその地位を明け渡すこととなった。サンパウロのように、先住民の影響のより強かった地域に関して、セルジオ・ブアルケ・デ・オランダは次のように述べる。

したがって、サンパウロの人々のポルトガル語への実質的な同化のプロセスは、恐らくは18世紀前半に始まったと言えるだろう。（前掲書：93）

したがって、1758年にポンバル侯爵がブラジルにおけるポルトガル語の使用を義務的なものとした、つまり公用語とした時、それは単に現状を追認したに過ぎない。

6. このように、植民地時代には固有の言語である先住民の言語と移植されたアフリカ諸語やポルトガル語が接触と相互作用の関係にあったのである。このうち、すでに述べた種々の要因により、18世紀も終わる頃にはわずかにポルトガル語のみが国土全域に支配的な言語として拡大していった。

しかしながら、独立前夜の時期になると、移民とともにブラジルへ他のヨーロッパ諸語が移植され始めるのである。（原註15）例えば、エリオ・ヴィアナは次のように述べている。

1808年にポルトガルの宮廷がリオデジャネイロに移されるまで、移民とはみなせないポルトガル人の場合を除いて、外国からブラジルへの移民はまったくなかったのである。(P.173)

1818年にリオデジャネイロ政府はカンタガーロのフルミネンセ地区にフリブルグ県出身のカトリック系のスイス人移民の入植地を作った。これがブラジルに定住したポルトガル人以外の最初の移民入植地であった。

「オーストリア生まれのレオポルディーナ皇后の影響が、ブラジルへのドイツ移民の増加にかなり寄与したものである。」(P.175) 1824年には、リオ・グランデ・ド・スルのリオ・ドス・シーノス河畔にサンレオポルド入植地が作られた。「第一帝制期に開始されたブラジルへのドイツ移民は、ペトロポリス、ブルメナウやジョインヴィールなどの入植の中心地の設立や発展で、その絶頂期を迎えた。」(P.178)「サンタ・カタリーナにおけるドイツ移民が増加する一方、リオ・グランデ・ド・スルにおいてもドイツ移民の流入は続き、サンレオポルド周辺にはノーヴァ・ハンプルグやさらにリオ・グァイバやジャクイーにも入植地が形成された。」(P.179)

いまだ帝制期にすでに入植したスイス人やドイツ人に続き、ブラジルの共和制の樹立とともにイタリア移民の流入が始まった。またポルトガル人の流入も中断することなく続いていた。「19世紀の最後の10年間はとりわはイタリア移民の時代であったが、それに次ぐのが大量のポルトガル移民の流入であった。もっとも彼らの活動領域は農業ではなく、もっぱら都市部での商業活動にあった。1891年がイタリア移民の絶頂期で、132,326人のイタリア人がブラジルに定住した。」(P.275-276)

日本移民に関しては、ブラジル史上の通常「新共和体制」として知られる時期に増加した。1933年には、最大の24,494人の日本移民が到来し、「当時ブラジルに移民していたポルトガル人、ドイツ人、イタリア人その他の外国人を数においてはるかに凌駕した。」(P.280)

これら移民たちのブラジル文化への同化傾向は我が国の社会形成上、特筆

に価値するものである。しかしながら、局地的な抵抗があったことも否定し得ない。すなわち、これら移民たちの大部分はフィッシュマンが言うところの言語上の「大いなる伝統」を自覚していたからである。故に、それを自分の子孫に伝えようとしたし、また彼らは文化程度の高い人々であったから、それに成功したのであった。いくつかの外国人の集団、とくにドイツ人集団にはそれが顕著であった。しかしこのような態度はブラジルに根付くことはなかった。エリオ・ヴィアナが言うように、「サンレオポルドの狂心的な mukers のような事例は異例中の異例である。」(P.179)

7. ここではブラジル社会における二言語使用(バイリンガリズム)と二言語変種使い分け(ダイグロシア)の問題を扱うことにしよう。

二言語使用という用語は多義的である。言い換えれば、種々の形態の二言語使用があるということである。

例えば、ウィリアム・F・マッケイ(原註16)は「個人的二言語使用」と「公的ないしは制度的二言語使用」を区別している。(P.14, P.69)さらにまた、「公的ないしは国家的二言語使用」は「国家主義的」(P.74)「伝統的」(P.75)あるいは「連邦的」(P.75)であり得る。また「個人的二言語使用」に関しては、一章全体(第14章)がこれに当てられており、二言語使用状況における程度、機能、変容、干渉といった問題が扱われている。

これに関連する問題としては、領土内に存在する(諸)言語に対する国家の態度の問題がある。

ロバート・T・ベル(原註17)は次のような「言語の地位」(Language status)を区別している。(その内、余り重要とは思われないので「昇格された言語」はここでは扱わないことにする) 1. 単一の公用語(フランスにおけるフランス語の場合) 2. 二つないしはそれ以上の公用語(スイスにおけるフランス語、ドイツ語、イタリア語の場合) 3. 国家的公用語に対する地域的公用語(ベルが挙げている例とは異なり、ここではスイスのグリゾン州でのみ公用語となっているロマンシュ語の場合を例として挙げておく) 4. 一般に移民社会で見られるような「黙認された言語」 5. 迫害される言語

(例としてベルは1745年以降のスコットランドにおけるゲール語を挙げている。)

さらに同様な重要性を持つ区分として「優先言語」「並列言語」「少数言語」がある。

標準語というものは、通常歴史上のいくつかの特定の要因から形成されることになる。国家のアイデンティティー、文化的な威信、人口密度、経済力や領土の拡大といったことが言語的規範の形成に重要な役割を果たす。このような言語上の規範の基礎となる言語が「優先言語」である。

上記の諸要因が国家の現実面で均衡している時、国家は一方の言語のみを優先することが不可能となり、両者を同等に扱うようになる。この範疇にはいるものとして、スイスにおけるフランス語、ドイツ語イタリア語やチェコスロヴァキアにおけるチェコ語とスロヴァキア語などの例が考えられよう。これが「並列言語」ということになる。

国家の中のある種の共同体の母語が、その国家の公用語とは異なり、その共同体が国家の公用語を受け入れない場合は「少数言語」ということになる。この例はいくらでもある。スペインにおけるカタルーニャ語、フランスとスペインにおけるバスク語、英国におけるゲール語などがそうだ。

ソ連〔原著出版当時〕は社会主義共和国の集合体であるので、大変な多言語使用地域である。「そこにはおよそ100の民族語が用いられており、その内の70言語は公用語である。」「書籍出版のかなりの部分は100以上の言語でなされている。児童は学校で2ないし3言語を学ばなければならない。すなわちロシア語と自分達の地域語および自治共和国の言語である。」(原註18)

さて、ブラジルの場合であるが、その歴史形成の面からも植民地時代からすでにポルトガル語が「優先言語」つまりは国家語であり公用語となっていたのである。アフリカ諸語は決して安定した状態には到達せず、結局はポルトガル語の広範な構図の中で色褪せてしまった。先住民の諸言語もまた、イエズス会士のおかげでリングァ・ジェラルに変容されたのであったが、先住民諸言語中には存在しなかった技術的、行政的、政治的な表現手段を有して

いるポルトガル語の文化的重みに抵抗することはできなかった。このようにして先住民の諸言語は部族内でのみ通用する言語にその規模を縮小していった。先住民とその言語はブラジル社会に同化する運命にあり、先住民諸言語の保存ということは、先住民自ら発せられる要求というよりも、その道の専門家たちが主張していることに過ぎないのである。

移民達の諸言語に関してもまた、これらはブラジルのすぐれた言語的統一の裂け目となるような危険性は有していないのである。社会状況からしても、これら移民の諸言語がポルトガル語と対立状態になることはないであろう。ブラジル国内のあらゆる社会基盤へのポルトガル語の浸透と拡大はかなりなものなので、ポルトガル語を知らない、または使えないということはブラジル社会ではとてつもなく不利益な状態に置かれることになるのである。ポルトガル語をマスターすることなしには誰も政治、行政、学問、企業活動などを行なうことはできない。したがって、ブラジルでの国家の言語共同体への参入は自然になされると言っても過言ではないであろう。すでに、局所的な抵抗の事例について言及したが、エリオ・ヴィアナ自身も次のように述べている。

1914年から18年にかけての第一次大戦の際に人種的異分子の存在、この場合はサンタ・カタリーナやリオ・グランデ・ド・スル、パラナといった州にドイツ系の入植地が集中していることが問題になったことがあった。彼らのブラジル国家からの逸脱を回避するために、それら地域のドイツ人学校に連邦政府が介入する事例があった。

(原註19)

ブラジルでは、このようなわけで制度化した二言語使用は存在しない。ブラジルに存在するのは許容され、不安定な状態の多言語使用である。

ダイグロシア（二言語変種使い分け）はまた別問題である。

ファーガソン（1959）によって再定義されたこの用語は、精密にコード化

され形式ばったスタイルに用いられる標準変種が、日常の話しことばに適したスタイルである地域的変種の上に位置するような言語状況を差し示すのである。具体例として現代ギリシア語が挙げられよう。この言語には制度化された二つの言語上の変種である口頭および特に書きことば用の文化語の「純正語 (Katharevusa)」と日常の話しことばに使用される変種である「民衆語 (Dimotiki)」がある。ダイグロシアの状況は二つの点から特徴づけられる。1) 同一言語の二つの変種であること、2) それらの変種は機能面で異なること。

ファーガソンの説くところと異なり、この内、第二の特徴のみが恒常的である。そこでフィッシュマンが強調するように、パラグアイでは高位の変種であるスペイン語と低位の変種であるゲラニー語の関係は、まさに両言語の使用が社会的に区別されているので、ダイグロシアの例となるのである。これら両言語は系統的には無関係である。

ブラジルの場合もダイグロシアには当てはまらない。なぜなら、ダイグロシアの状況では、パラグアイの場合のように二つの別個の言語とでも言える程に両変種は異なっていなければならない。例えば、ファーガソンは4つの非常に特徴的な状況を、アラビア語、現代ギリシア語、スイスのドイツ語、ハイチのクレオールについて研究しようとした。これらの言語には高位変種(H)と低位変種(L)がそれぞれ存在する。すなわち古典アラビア語と口語アラビア語(エジプトのカイロの低位変種が選ばれた)、ギリシアの純正語(Katharevusa)と民衆語(Dimotiki)、標準ドイツ語(Schriftsprache)とスイス・ドイツ語(Schwyzerdütsch)、および標準フランス語とクレオールである。

異なる状況での社会的機能を有するこれらの変種問題には明らかに対立がある。ある人物が両方の変種に通じており、さらに適切な状況下でそれらを使い分けられる時にダイグロシアが存在すると言えるのである。したがってギリシアでは、レストランの飲み物リストには純正語で *inos* (ワイン) と書いてあるであろうが、客は民衆語を用いて *krasi* と言って注文するので

ある。

ファーガソンが他の例を求めて過去に目を向ければ、中世ヨーロッパにおける文化語としてのラテン語と日常のコミュニケーションのための、もはやすっかりロマンス化した日常語の例に出会うであろう。

さらにもう一つのダイグロシア状況の特徴は安定性である。ファーガソンによれば、

ダイグロシアは、より安定した言語状況に変容する傾向を持った非常に不安定な状況であると仮定できるかも知れない。しかしそうではない。ダイグロシアは、典型的には少なくとも数世紀前から続いているものであり、あるいくつかのケースでは千年以上も継続する証拠があるのである。(原註20)

さて、ブラジルの場合であるが、これはファーガソンの定義するダイグロシアの例には該当しないように思われる。ブラジルには、安定性と固有の機能を有した、互いに高度に異なるポルトガル語の2種の変種というものは存在しないのである。我が国の状況はよく知られる二重性が対立する一般的な構図の中に位置付けられるであろう。すなわち形式ばったスタイル対くだけたスタイルの対立である。後者は当然のことながら不安定である。なぜなら社会文化的影響力により少しずつそれが標準的なレベルへと高めることがあるからである。これはまさに現代世界の発達した社会にすべて起こっていることである。ファーガソン自身も、アメリカ英語の2つの変種の語彙的相違を扱った際に「形式ばった」と「くだけた」の対立に言及し（「ダイグロシア」とは言っていないことに注意！）、次のように述べている。

アメリカ英語においてもっとも近いペアは例えば、illumination : light, purchase : buy, children : kids などであるが、この場合、両者とも書きことばにもまた日常の話しことばにも使い得る。ダイ

グロシアにおけるペアよりもこの場合の両者の距離はせまいものである。(P.109)

ファーガソンによって概念づけられたダイグロシアの状況が当てはまると考えられるイタリア語に言及して、ヴァルヴァロはイタリア語についてのそのような仮説を否定する。彼の議論によれば、ダイグロシアの場合はいかなる話し手も高位の変種を日常会話では用いないし、また第一言語としてそれを持っているわけではない。しかし、そのような要因は現代のイタリア語には存在するのである。次のように述べている。

このことは何故今日のイタリアの言語状況はダイグロシアか、あるいは約100年前までそうであったかを言明することは不可能かということの説明する。1世紀前には、実際にトスカナとローマを除いて、イタリア半島の大部分ではダイグロシアの状況であったと言うことができよう。なぜならトスカナとローマ以外ではA変種（文学語としてのイタリア語）は第二言語であって、まれにしか、あるいは決して会話で使われることはなく、もっぱら書きことばとしてのみ用いられていた。トスカナやローマでは、状況は異なっていた。しかしながら今日ではダイグロシアの状況は例外的なものとなった。なぜならばほとんどイタリア全土で誰も母語として標準イタリア語を学ばず、しかもそれを日常会話で使わないような社会が存在することはまれである。いずれにしても、今日の状況は、ファーガソンによって提示されたダイグロシアとの距離に応じて、ケースバイケースで判断しなければならない。(原註21)

したがって、ダイグロシアの状況は2つの制度化した変種が互いに拮抗している歴史上の経緯から生じるものであることがわかる。このような場合と区別しなければならないのは、変種Bとなるべきはずのものが社会的区分を

示すような態度を取らずに、むしろその逆に学校が第一義的な要因となり（「誰もが標準イタリア語を母語とはみなさないような共同体を見い出すのはまれなことだ。」）社会的上昇を果たすという賢明な政策が将来、打ち壊していくような不満足な経済状況から生じる故に、歴史的首尾一貫性を持たないような状況である。

このような理由から、Revista de Letras 誌（原註22）に掲載されたパウロ・A・フローリッヒ教授の次のような結論はとうてい受け容れることはできない。

ブラジルの、とりわけ広大な国土を持ち、国家規模での真に活力のある標準語を国民に課す手段を持たないような現状では、相変わらずダイグロシアの状況が続くことになろう。

もちろん、我が国の国土が広大であることは否定できない事実である。しかしながら、航空機のような交通手段によって、またラジオやテレビあるいは直通電話のようなコミュニケーション手段によって、国土内の距離が短縮されたこともまた否定できない事実である。リオデジャネイロは、50余年前に比較してサンパウロよりもむしろレシフェに近くなった。学校教育制度の発展は、実際、残念ながらテレコミュニケーションが我が国で発展したのと同じような歩調では進まなかったが、それでもとりわけより発展した諸州に見られるようなわずかな進歩まで否定することはできない。「真に活力ある標準語」ということに関しては、筆者はこのような要求は誇張され過ぎていると考える。通常の標準語の状況は、たとえ単一言語国家においても決して「真に活力のある」といったものではない。故ヴィクトール・アンリの提唱した「伝来言語」と「獲得言語」という著名な対立概念は古いものである。いわゆる言語使用域（register）の相違は常に存在するものであり、ブラジルの場合はこれに当てはまるものと筆者は考える。フローリッヒ教授自身、次のように述べており、確かにその通りである。

しかし、次のようなことにも注目すべきである。言語的相違は普遍的なものであるが、ダイグロシアの状況は普遍的ではない。なぜなら、それは同一言語の2つの変種あるいはスタイル間の機能に関して標準化された区別の存在を前提とするからである。(P.168)

この点にこそまさにこの問題の中心点があるように筆者には思われる。つまり、ブラジルには機能に関して標準化された言語変種が存在するか否かという問題である。自己の提唱したダイグロシアの概念に当てはまるファーガソンが調査した言語状況を想起せられたい。ハイチのクレオールあるいは古典アラビア語と各地のアラビア語の変種について。ブラジルの場合は、いわゆる言語の社会的レベルである。すなわち形式ばった、普通の、そして民衆的なレベルのことである。もしも一方で同一の言語の社会的用法と他方で伝統的にまた制度的にそして機能的に明瞭に異なる2つの変種という区別をしなければ、歴史のある言語は決してダイグロシアの現象を呈することをやめないであろう。

8. ここまで来ると、冒頭での立場へ戻ることができよう。ブラジルで話され、書かれているのは、常にそして国内のどこでも、形式ばったスタイルでも民衆的スタイルにおいてもポルトガル語である。二言語使用でもダイグロシアでもない。アフリカ人の子孫である純粋なあるいは混血の我が国の有色人種もヨーロッパから植民して来た、あるいは移民として渡って来た白人と同じように巧みにポルトガル語を操るのである。彼らの内、誰もナゴーやヨルバ語に戻ろうとする者はいない。我々は等しく皆同じブラジル人であり、同一の歴史的、文化的財産の継承者なのである。

本来この土地の主人である先住民は国家共同体から孤立して生活しているので、部族語を用いるのは当然であろう。しかし、彼らがひとたびポルトガル語に精通するや、政治上の権能をも含むブラジル市民権を求めるのもまた至極当然である。そして、まさにそれ故にこそ我が共和国憲法は国語によって自己を表現できない者の選挙権を禁じているのである。(現行憲法第147条

a項およびb項) トゥピー・グァラニー語であれアルアケ語であれ何であれ、国語としてのステイタスを持たないのである。また、移民に関しては、彼らの文化が尊重されることを何者も妨げるものではないが、彼らのもはや後戻りできない運命は、たとえ自分たちのためではなく息子や孫たちのためだとしても、自らの選択した新しい祖国への斬新的な同化しかないのである。容認することのできないことはいわゆる人種的異分子を構成することであり、これはブラジルという家族においては決して受け入れられないものであり、移民のこれまでの経緯の特色にも合致しないものである。

ブラジルは16世紀に世襲制のカピタニアに分割され、17世紀にバイーアとマラニャンの2つの総督府にわけられ、18世紀に正式な発令なしに副王領になり、その中心地をリオデジャネイロとし(1763年)、地理的、人種的困難さを克服して、アメリカ大陸の姉妹国にはめずらしいほどの素晴らしい統一を達成させたのである。そしてこのような統一をなしとげた主要な力は疑いもなくポルトガル語であった。

まさにこれこそが、我々がポルトガル人植民者に負っている恩恵のひとつなのである。彼らはしばしば不当に非難されるし、また過ちを犯したことも事実であるが、それは近代世界の運営においては不可避免的なことでもあったのである。そしてこの点においてジョアン・デ・バーロスの予言に耳を傾けてみよう。

アフリカやアジア、さらには世界の三分割の外に存在する何千もの島々では武器やポルトガルの文化、また物品は時とともに消え失せていくであろう。しかしポルトガル人たちがそれらの土地に残すであろう教理や風習またことばといったものは決して消え去ることはないであろう。(原註23)

原註

1. Silveira, Sousa da. Denominação do idioma nacional do Brasil. *Lições de Português*, 7a.ed.melhorada.Rio de Janeiro, Livros de Portugal, 1964:293
2. Denominação da língua nacional.Separata da revista *Arquivos*, no.2 MES/Serviço de Documentação, 1948:22
3. Cunha, Celso. *Camões e a unidade da língua*. Rio de Janeiro, MEC/Biblioteca Nacional, 1957
4. Silva, Serafim da. *Introdução ao estudo da língua portuguesa no Brasil*.2a.ed. aumentada e revista pelo autor.Rio de Janeiro, MEC/INL, 1963:273
5. In *Actas do III Colóquio Internacional de Estudos Luso-Brasileiros*, Lisboa 1957, vol. I Lisboa 1959:278-279
6. Op.cit.:285
7. この点に関しては、Teyssier, Paul, *Histoire de la langue portugaise*. Paris, PUF, 1980:76参照。特に第3章、4章は重要である。
8. Op.cit.:108
9. Cunha, Celso. *Língua, nação e alienação*. Rio de Janeiro, Nova Fronteira, 1981:65 nota 22
10. Câmara Jr., J.Mattoso. *Introdução às línguas indígenas brasileiras*, 2a.ed. revista.Rio de Janeiro, Academia, 1965:102
11. Diegues Júnior, Manuel. *Etnias e culturas no Brasil*, 5a.ed..Rio de Janeiro, Civilização Brasileira, 1976:112
12. Sampaio, Teodoro. *O tupi na geografia nacional*.4a.ed. Câmara Municipal do Salvador.1955:49
13. Op.cit.:54
14. Holanda, Sérgio Buarque de. *Raízes do Brasil*.6a.ed. Rio de Janeiro, José Olympio, 1971:90

15. 以下の記述はVianna, Hélio. *História do Brasil*, vol. II, 8a.ed.São Paulo, Melhoramentos, 1970に負っている。
16. Mackey, William Francis. *Bilinguisme et contact des langues*. Paris, Kincksieck 1976
17. Bell, Roger T. *Sociolinguistics*. London, B.T.Batsford Ltd., 1976
18. Mackey, op.cit.:96
19. Op.cit.:II, 278
20. Ferguson, Charles A."Diaglossia", in *Sociolinguística*. Rio de Janeiro, Eldorado, 1974:107
21. Varvaro, Alberto. *La lingua e la società*. Napoles, Guida Editori, 1978:68-69
22. Froehlich, Paulo A."Língua Padrão ou Diglossia?" *Revista de Letras*, Faculdade de Filosofia, Ciência e Letras de Assis. vol.17, 1975:177
23. *Diálogo em louvor da nossa linguagem*. In Barros, João de. *Gramática da língua Portuguesa*. Editada por Maria Leonor Carvalhão Buescu, Lisboa, publicações da Faculdade de Letras da Universidade de Lisboa, 1971:405

[河野 彰訳]

Ⅱ アフリカにおけるポルトガル語

アフリカにおけるポルトガル語の将来 ——社会文化的観点から——

マヌエル・フェレイラ

4月25日〔1974年のポルトガルの革命〕の直後、植民地解放運動のさなか、故ジャシント・ド・プラド・コエリョは、旧ポルトガル植民地における文学の問題に詳しい6人の知識人に次のような質問を送った。それは、「文学の言語としてのポルトガル語の将来はどのようなものと考えられるか」というものであった。⁽¹⁾

回答は、すべてが一致したものではなかった。その理由のひとつは、上記の問題を言語もしくは文学的観点から考察した者もいれば、社会文化的な観点から考察した者もいたからであった。しかしながら、だれひとりとして、アフリカにおけるポルトガル語の将来に対して懐疑の念を抱く者はいなかった。実際、いくつかの条件を付してではあるが、アフリカのポルトガル語圏5カ国でポルトガル語が確固とした地位を築くことを可能とする状況が存在しているのを認めるのに躊躇する者はひとりもいなかった。おおむね彼らは現地での経験に基づき意見を述べていた。しかし、当時は、資料はけっして十分なものではなく、それゆえ、上記のようなきわめ複雑な問題に対して正確な予測を行うのは困難であった。そのような困難の最大の理由は、それらの国のうち2カ国（カボ・ヴェルデ、サン・トメ・エ・プリンシペ）が2言語併用国であり、他の3カ国（ギニア・ビサウ、アンゴラ、モザンビーク）が多言語併用国であるということにあった。そのような複雑な言語状況のもとで、ポルトガル語はいったいどのような現実的な地位を占めることになるのか。ポルトガル語は学校教育での言語として使用されるのか。その場合には、ポルトガル語が単独で使用されるのか、それとも各地の母語と併用されるのか。また、識字運動は、どの言語によって展開されるのか。ポルトガル語の普及を意図する決定は、例えば、どのような効果を生み出すのか。ある

いは、ポルトガル語は、単に放棄され、そして社会から独立した外国語としての運命を歩むことになるのか。このような限りなく多くの疑問が投げかけられたのであった。

そして、その原因は、ポルトガル語が、旧植民地の住民の大多数にとっては、植民者の言語であり、外国語であり、アフリカ人の思考を明瞭に表現するのに完全に適合した言語ではなかったところにあった。それゆえ、独立直後、各地の独立を主導した4政党--アンゴラ解放人民運動MPLA、モザンビーク解放戦線FRELIMO、ギニア・カボ・ヴェルデ独立アフリカ人党PAIGC、サン・トメ・エ・プリンシペ解放運動MLSTP--がポルトガル語を公用語とする決議をしたとき、それに対して、アフリカの外でさえ、多くの者が疑問を投げかけ、その決定は、驚きをもって迎えられた。例えば、ジュゼッペ・タヴァーニ教授の場合、彼はイタリア人評論家、社会言語学者であるが、ある重要な論文⁽²⁾で、ポルトガル語に特権的な地位を付与するためにひとつの決定がとられるとすれば、それが、科学的ないしは思想的に適切なものとなりうるかについて疑問を投げかけた。文化的、政治的、言語的観点からの理由のみを列挙すれば、タヴァーニ教授の言葉は、すべて至極もっともであると思われる。しかし、その問題を実用主義的な観点から考察し、それらの国々が置かれた社会文化的、そして言語的状况を現実的に考慮すると、タヴァーニ氏の十分洗練された論理にもいくつかの重大な疑問が生じることになる。そして、実際、すでに述べたように、独立の主導者たちはポルトガル語に特別に重要な地位を与えることを選んだのであり、それは、後に詳しく見るように、名声のあるイタリア人研究者タヴァーニ氏の予測を裏切ることになった。

その上、「植民地主義は役に立たないものだけをもたらしただけではない。』⁽³⁾ という、アミルカル・カブラルの立場はよく知られている。そして、彼が、1965年11月、党の責任者に対する文化に関する、魅惑的な、そして、有名な陳述の中で、文化の基本的な性格やその人間および社会にとっての重要性を念頭に置きながら、文化の否定的な側面も忘れることなく、次のよ

うに述べたのは、示唆的であった。すなわち、「それゆえ、われわれは植民地文化を打破することができなければならないが、一方では、ポルトガル人がわれわれの土地にもたらし、われわれの頭の中にも入ってしまっているであろう人間文化、科学文化のあの側面をも、われわれの頭の中に残しておくことができなければならないのである。」⁽⁴⁾「われわれは、われわれの文化について現実的な感覚をもたなければならない。ポルトガル語は、ポルトガル人がわれわれに残したもののの中で最良のもののひとつである。なぜならば、言語は、人間が互いに関係を結ぶための道具、すなわち、人生や世界の現実を話し、表現するための手段、道具以外のなにものでもないからである。」⁽⁵⁾と主張したのであった。

理論の上ではタヴァーニ氏の意見と同一の意見をもつアフリカ人の数は決して少数ではないように思われる。(ある者は、民族・文化上の理由からであり、他の者は、純粹に民族主義あるいは明らかな土着主義からであり、さらに、ある者は元来の価値観を肯定し、自分たちの言語・文化の自然な発展を阻害した植民地主義者の勢力の行動から逃れる必要性という旧来からの理由からである。)その理由は、実はその問題がいま始まった問題ではなく、何世紀来、何千年来の問題であるということにあるが、当面の理解にとっては、フランス・ファノンが試みに「植民地解放の世紀」と分類した今世紀に起こった最近の典型的な事例を挙げれば十分であろう。すなわち、1948年におけるインドの事例--近代植民地時代以後の言語上の偉大な挑戦、すなわち多言語併用のかの半大陸における英語の事例--や1950年以降、独立を達成したフランス領あるいはイギリス領のアフリカ植民地の事例がそれに当たる。それらの植民地はすべて、多言語併用地域であり、その中のいくつかの地域は、イスラム文明をはじめとする、文字をもった古くからの文明の諸言語を使用していたが、これらの国々の運命を決定した責任者たちは、独立時には、フランス語あるいは英語に公用語の役割を与えたのであった。その時以降、政治家、社会言語学者、社会学者は、さまざまな機会に、アフリカにおいての国語の防衛の問題を討議するようになり、全面的な解放の要素として、同

時に基本的な必要として、学校教育への国語の導入という考えがますます支持されるようになっていた。それは、すべての人々にとって、おそらくイギリス人を例外として、植民者たちが組織的にアフリカの言語を圧迫してきたことが明らかだったからであった。

しかし、興味深いのは、言語、そしてより具体的には、(多言語併用とは言わないまでも) アフリカにおける2言語併用が、パリにおいて1956年9月19日-22日に開催された黒人作家・芸術家第1回国際会議において、アフリカ人作家が取り上げる問題とはならなかったことである。そして、さらに、その問題はローマにおいて1959年3月26日-4月1日に実施された第2回黒人作家・芸術家会議においても主要議題にはならなかったように見受けられる。しかし、その問題が表面に出ないにしろ存在していたことは、「思想の伝達手段」⁽⁶⁾ に関する20行ほどの文章に含まれる次のような見解によって知ることができる。すなわち、その文章の筆者、アンティール諸島のレオナル・サンヴィルは、「小説において、黒人が住む国々での2言語併用の問題は、将来の解決を待たなければならない問題であるように思われる。」⁽⁷⁾ と述べたのである。そしてついに、1961年のユネスコの会議では、教育における母語の役割の問題が取り上げられ、子供がその母語において学校教育を受けることの長所が主張された。そして、そのとき以降、一連の運動が展開され、1962年ガーナでの第1回「人民代表者会議」、1966年バマコの集会、1968年ナイロビ会議、1971年ダル・エス・サラム会議、1972年ユネスコ総会などがこのような動きの画期となった。

結局、いずれにしても、ポルトガル語圏5カ国の社会言語状況は、今日、政府の選択を反映したものとなっている。すなわち、ポルトガル語は公用語と考えられ、母語はアフリカ文化の元来の表現手段であり、人々の基本的な伝達手段であると考えられている。そして、読みを学ぶ道具、あるいは他の高度な知識の伝達手段として母語を使用するための行動を具体化するには、物質的な条件が整うのを待つ必要があると考えられている。

このような立場が取られたのには、歴史的に見て大きな理由があったと考

えるのが適切であろう。その上、そのような決定は植民地解放の戦争のさなかにすでに下されていた事実をも知る必要があるだろう。実際、政治宣伝の大部分、運動を理解し、自覚化するための数多くの文書、ラジオ番組、軍隊・行政・教会内部の用語、解放地区においての学校教育、それらすべてにポルトガル語が使用された。国の解放の時点では、そのような実践を実行に移し、拡大する必要があったのみであった。いく人かの者は、当時、次のような問をすでに自らに問いかけていたし、現在においても問いかけは続いている。自国文化の存在にその存在意義を見い出す戦いにおいて、独立が達成された後、どのようにして、植民者の言語に特別の地位を与え、自分たち自身の言語を背後に押しやるという決定をとることができたのであろうか、と。しかしながら、見事に構築された理論的体系と、状況に応じて、前後関係を考慮して行動する必要性とは別個のものである。そして、そのような状況や前後関係は、多様であり、複雑であった。実際、2言語併用、あるいは多言語併用のポルトガル語圏5カ国では、ポルトガル語がどこでも共通の言語として存在し、また、ポルトガル語はそれらの国々で学校教育に使われた唯一の言語であり、さらに、少なくともアンゴラやモザンビークにおいては、異なる民族に属する人々がそれを使用して理解し合える唯一の言語であった。さらに、それは、外交に使用する言語として、5カ国間で使用されるだけでなく、それぞれの国とポルトガルないしはブラジル（1億2000万の話者をもつ）との間で使用されるのである。結局、話は、政治的、文化的、思想的、外交的理由により、実用主義的色彩の濃い決定が下されたということであった。

国内的にも、数多くの考慮すべき事柄があった。例えば、ポルトガル語に代わる言語として、ひとつではなく、二つ以上の言語が存在したという事実である。すなわち、二つ以上あるならば、どのようにして選択すべきなのか、という問題である。アンゴラでは、キンブンド語かウンブンド語かキンコンゴ語か、どの言語を選ぶのか。モザンビークでは、ロンガ語かマクア語か。ギニア・ビサウでは、バランタ語かマンディンガ語か。実際、それらの国々の当局者にとって、状況はきわめて微妙であり、終わりのない「言語戦争」

が勃発する恐れがあったし、そのような言語戦争は、宗教戦争と同じく、言い表せないほどの憎しみと暴力を生み出すことになったであろう。モンドラネ大学学長フェルナンド・ガニャン自身が次のように述べている。「1975年6月25日（モザンビークの独立の日）に、モザンビークのいくつかの言語のひとつを国語に選ぶのは、不可能だっただろう。というのは、そのような選択がもたらす争いが統一国家の存在を危うくしたであろうことは間違いないからである。そのような争いは、モザンビーク解放戦線 FRELIMO の内部にわれわれが作りだした統一を不可能にしたであろうし、社会主義社会建設のための物質的、思想的基礎の構築においてわれわれがすでに成し遂げていた勝利を阻害することになったであろう。」⁽⁸⁾

カボ・ヴェルデの場合、そして、サン・トメ・エ・プリンシペの場合は、状況が少し異なっていた。これら二つの島国は、ポルトガル語を共通に使用し、その使用は、大陸部の他の3国よりもいっそう広範囲であり、深く浸透していた。そのことは、当然ポルトガル語を公用語とする際に有利な条件となった。

われわれが考慮すべきもうひとつの問題は、長期にわたる激しい解放戦争の後に経済的に疲弊した国家が、国語教育へ向けての適切な構造を創造するためには、どのようなスタートをきるべきであったか、ということである。というのは、当時、すべてが不足していたからである。一般的に植民者は、500年におよぶ植民地統治期に、母語での教育の実施に考慮を払いはしなかったし、むしろそれを不可能にしようとさえしたからである。その例外といえるのは、間接統治の制度化を植民地統治の基本としたイギリス人くらいである。それゆえ、すべてが不足していた。教科書、参考書、文法書、辞書、教材、基礎語彙に関する音韻表記の原則、適切な学校、教師、結局、国の活力を動員してスタートきるのを保証しうる最小限の前提条件が欠けていたのである。経済混乱に陥り、食糧、通信、輸送、社会の安定などの切迫した、そしてきわめて重要な問題に直面した国家が、いかにして学校教育の戦略を転換させるために、膨大な予算を振り向けることができたであろうか。もうひ

とつの大きな理由、それは政治的指導や教育・文化の責任者がよく指摘するのだが、それは、国土の全土に広がるポルトガル語が国家統一の重要な要因に成りうるということである。なぜなら、「統一国家の存在の、決定的ではないにしても、基本的な要素は、共通の言語である。」⁽⁹⁾ からである。

これは、好奇心をそそる指摘である。すなわち、植民者の言語が伝達手段としての機能を果たすほかに、それぞれの国家に好都合な政治秩序をもたらす機能をも果たし、植民地時代とはその立場が逆転した言語になったのである。植民地時代には、植民者の言語は、敵性語と考えられ、それは優勢な（ベルトに言わせれば、全体主義的な）言語となっていたのである。

大陸部ポルトガル語圏の国々がポルトガル語を学校教育に使用するのに傾けた努力は、1975年、あるいはその後数年において考えられた予想を越えるものであった。教育の実践は、偶然やその場の状況に頼って行われるものではけっしてない。そのような国々のそれぞれにおいて、綿密に計画が立てられ、到達すべき目標が設定された。十分な数の学校の設立や教師の養成、手引書や効率的な教材の作成、教育の技術や方法の導入などが必要であった。不足は確かに数多く、深刻であった。困難は数え切れないほどあった。これらの国々の政府は、その公用語が最良のやり方で、最も効率よく教育されるようにあらゆる努力を傾けた。ある時期、これら大陸部ポルトガル語圏3カ国は、協力してくれるポルトガル人教師を契約するため、繰り返しポルトガルに助力を求めたが、歴代のポルトガル政府は、民主的な社会主義者にせよ、社会民主主義者にせよ、常に奇妙なことに、犯罪的とさえ言いうるが、これらの国々の絶え間ない要請に対して、尊大な態度で耳を傾けようとはしなかった。キューバ軍の派兵により、アンゴラでポルトガル語が危機に瀕しているとして、右翼、極右の新聞が（あたかも良心の叫びであるかのように）書きたてていたまさにそのときにも、アンゴラ政府はポルトガル政府にアンゴラへの教師の派遣を要請したが、むだであった。教師は到着しなかった。1976年、第4回アジア・アフリカ作家会議のおり、筆者がルアンダに滞在したとき、アゴスティニョ・ネット自らポルトガル代表团⁽¹⁰⁾ に対して、次のような

発言をした。すなわち、不幸なことに、ポルトガル政府は依然としてアンゴラ政府の要請に耳をかさず、それゆえアンゴラ政府には、もうひとつの扉、すなわちブラジルという扉をノックするしか道が残されていない、と述べたのであった。

これらの国々が非識字者撲滅運動において傾けた努力のおかげで、その結果はまったく驚くべきものと見なしうるほどである。非識字者の割合が約97%であったアフリカ大陸部の3カ国で、その割合が10年間で約70%へと低下したという事実を挙げれば十分であろう。さらに、上記の国々で国家独立の日にポルトガル語を話す人々の割合が25%以上であったという考えを受け入れるには、楽観論に与する必要がある。ところが、今日においては、入手した情報によると、その割合は60%を越えているのである。

非識字者撲滅運動の支柱となる原則は、すべての子供に学校と教師を、というものである。このような原則は、早期にいくつかの国では、現実のものとなったし、今日では、そのような目標は、教師の知識・能力が不十分であるにせよ、一般的に5カ国では達成されているといえる。

確かに、ある種の誇りをもたらすこのような資料や事実にもかかわらず、これらポルトガル語圏5カ国の教育の責任者は、ある種の不成功に言及し、到達された目標はもっと進んだものとなりえたであろうと告白している。カボ・ヴェルデに関して、1978年、ドゥルセ・デ・アルマダは、次のように述べた。「われわれの子供の圧倒的多数はポルトガル語が話せないので、ポルトガル語が学校教育の失敗の第一の原因となっている。」⁽¹¹⁾ ドゥルセ・デ・アルマダは、クレオール語が（それが可能になったとき）学校教育に使用されるべき言語となるだろうとの観点から、その問題を取り上げたように思われる。しかし、カボ・ヴェルデにおいて学校教育に使用されている言語は、現実にはクレオール語ではなく、ポルトガル語である。それゆえ、カボ・ヴェルデの具体例についていえば、学校教育に失敗があったとしても、その責任をクレオール語の問題に求めるのは正当ではないと、筆者は考える。それについては、アミルカル・ガブラルの意見も筆者と同じであるように思われる。と

いうのは、次のように述べているからである。「われわれの学校でわれわれの生徒にクレオール語がどのようにしてポルトガル語とアフリカの言語から生まれたかを教えれば、どの生徒もずっと早くポルトガル語を習得するだろう。クレオール語がポルトガル語を学ぶ者の障害となるのは、(強調は、筆者) ポルトガル語とクレオール語との間にある結び付きがどのようなものであるかを知らないからである。もしも両者の結び付きを知れば、それはポルトガル語の習得を容易にするだろう。」⁽¹²⁾

さらに最近、学校教育の成果がカボ・ヴェルデにおいて期待された予測水準に達しなかったことに関して、カボ・ヴェルデが依然として直面している困難は、「教師、とりわけ初等教育の教師の知識が低い水準に留まっている結果」⁽¹³⁾ であると考えられなければならない、との結論が出されている。すなわち、「初等教育に従事する約1500人の教師のうち、20%足らずがそれにふさわしい資格をもつにすぎず、大多数は6年の学校教育をうけただけである。」⁽¹⁴⁾ という状態なのである。その上、ジョゼフ・プロトのような世界的な専門家は、「革新的な計画の実施における失敗や遅れの明らかな原因としては、つねに第一に初等教育に携わる教師の知識不足と教育上の研究の不十分さが挙げられる。」⁽¹⁵⁾ と述べている。

たとえ上記のような問題はあるにせよ、「非識字者の減少は現実であり、近い将来におけるその根絶へ向けて進んでいる。」⁽¹⁶⁾ のである。その事実とは、「70年代の初頭、15歳以上の住民100人につき約61人が非識字者であったが、今日では、その割合は40%へと低下している。」⁽¹⁷⁾ ことから窺える。アフリカ全体の状況と比較すると、このような数字は、大きな意味をもつ数字である。

教育政策の実施には、各国の教育局や経済・財政の主要機関の多くの部局の広範囲な協力が不可欠であるが、そのような協力を得るについては多くの困難があった。しかし、それにもかかわらず、発展や変革を目指す社会主義的計画の中で優先的に進められた教育政策の成果をすべての人々が実感し、享受できるように、さまざまな手段がとられ、多くの予算が費やされてきた。

これらポルトガル語圏5カ国がその言語政策の分野で、ポルトガル語普及のために天文学的な予算を費やしてきたのは疑いがないが、その事実を、ポルトガル語使用の拡大に関心をもつ者はしっかり注視すべきである。

このような記念碑的な努力は、ポルトガル語が、すでに述べたように、行政、経理、軍隊、教会の言語であり、公的な演説の言語であり、宗教・討議の厳粛な言葉を伝える言語であり、そして、学校の言葉であったという事実と一っしょになって、人々のポルトガル語に対する態度に根本的な変化をもたらすのに貢献したといえる。

ポルトガル語が得たそのような名声は、新聞報道がほとんどもっぱらポルトガル語でなされ、一般的には、テレビ、さらにはラジオの番組もポルトガル語でなされているという状況によりいっそう高められている。テレビやラジオの番組においては、母語の進出にもかかわらず、ポルトガル語は依然として優位を保っているのである。その点を踏まえて、カボ・ヴェルデの言語学者マヌエル・ヴェイガは、多くのカボ・ヴェルデ人がクレオール語を過小評価する傾向があることを告発した。彼は言う。「クレオール語が多くの人々にとって依然として権威のない言語であると言われても、われわれは奇妙に感じないだろう。」⁽¹⁸⁾「クレオール語が文学の言語として、あるいは通信伝達の言語として、支配的なものになるだろうか、ということについて、疑問が投げかけられたり、問いかけられたりしても、われわれは驚いたりはしないだろう。」⁽¹⁹⁾

これは、カボ・ヴェルデのクレオール語に関してであるが、他の国々での母語とポルトガル語との関係に関しては、どのようなであろうか。例えば、モザンビークでは、1975年11月、まさに独立の年に、マコミアで開催されたモザンビーク解放戦線情報・広報局全国総会において、ラジオに関して次の二つの基本原則が示された。

a)「モザンビークの人々の大多数は、ポルトガル語を理解しない。」⁽²⁰⁾

b)「人々のポルトガル語の習得を促す緊急の必要性がある。」⁽²¹⁾

そこから、総会はそれに必要不可欠な三つの事柄を決定した。

- 1)「広範な人々にわれわれの活動を効果的に伝える代替不可能な手段として、ラジオでモザンビークの諸言語や諸方言を使用すること。」⁽²²⁾
- 2)「植民地時代、従属・搾取を容易にするため、モザンビーク人民の分裂を画策して、ラジオはモザンビークの諸言語や諸方言を使用していたが、その際、それがもっていた地方的、部族的内容の痕跡を一掃すること。」⁽²³⁾
- 3)「モザンビークの諸言語や諸方言による番組は、ポルトガル語の習得を促し、特に全国規模で現在行われている識字運動を支援することに関心をもつこと。」

ただし、総会が明記したように、「ポルトガル語の習得を促すことは、決してモザンビークの諸言語を排除することを目的にしていると解釈されてはならない。」ことに注意を向ける必要がある。⁽²⁴⁾

政治に関する演説、当局の意向の伝達、公式な情報の伝達において、とくにポルトガル語が体系的に重視されたことを考慮すれば、ポルトガル語が広範囲に受け入れられても、それはなんら不思議ではなかった。

実際、ポルトガル語は日ごとに、強制された言語・他者の言語・植民化の言語から自分自身の言語、しばしば、ある状況のもとでは、自らの意思を伝達する国語として使用されるようになったり、そのように見なされるようになった。モザンビークのいくつかの新聞（例えば、『テンポ』や『ドミンゴ』）には、ときにはにこやかに、ときには皮肉たっぷりと、ある程度の教育を必要とする地位に就いているが、間違いが多いポルトガル語で文書をしたためたり、命令や勧告などを行ったりする「市民」を批判する編集部宛の投書が掲載されている。それらの新聞の読者の多くは、2言語併用のモザンビーク人であると思われるが、彼らはこのような責任者を非難し、しかもその非難の仕方はポルトガル語があたかもアフリカ起源の言語で、彼らはそれについて監視する必要があると考えているかのようであった。

これまでに得られた結果からすれば、5カ国は独立後の10年間に、ポルトガルが500年の間に行ったよりも多くのことをポルトガル語に対して行ってきたと言って、なんら差し支えないだろう。このように、ポルトガル語は、

克服すべき数多くの困難にもかかわらず、アフリカにおいて全速で広がっている。そして、新たな経済的・政治的・社会的・人類学的等の現実適合するためになされたそのような努力によって、ポルトガル語は変化している。それは避けられないことである。ポルトガル語を使用するブラジル社会においてわれわれが見いだす言語の水準は、多様である。その文学、とくに創作文学を一瞥し、ついできわめて明白な対照的な例として、テレビ小説を一瞥すれば、そのような現象の広がり容易に気づくだろう。

アンゴラ、あるいはサン・トメ・エ・プリンシペ、モザンビーク、カボ・ヴェルデ、ギニア・ビサウでわれわれが見いだす現象は、いまだにそのような変化の段階には達していない。しかし、変化や変容の兆しは明らかである。ときおり、ポルトガルにおいて、性急なジャーナリストが、これらの国々のどこかの国の首都に十数日滞在したのち、一般に、アフリカ諸言語の影響--異なった社会的場面での2言語使用(ダイグロシア)をもたらす--の強い圧力によって起こる、ポルトガル語のいわゆる「腐敗」について、信じられないほどの危機感を覚えさせる不適切で、十分考えもしない記事に署名することがある。しかし、そのような現象は、けっして異常なことではない。日常生活において同じ文脈のなかで頻繁に使われる他の言語が引き起こす影響を被るもうひとつの言語がもつ宿命である。自らの不幸を声高に叫ぶ者は、自らの苦悩の中に閉じ籠もり、うちひしがれて衰弱することになってしまう。5カ国の観点からは、外国語である言語の方がそのような適応をする必要があるということになる。そのような現象は、その言語が、話者の考えを表現する道具として、さらに、回りを取り巻く社会の現実を記録するものとして、選択される必要から起こる現象である。結局のところ、そのような現象は創造的な現象であるといえる。それによって、ポルトガル語には、新たな領域が開かれ、ポルトガル語の意思伝達能力が広がり、形態統語論上の構造に変化が生まれ、その構造が強化されるのである。そして、われわれはひとつの規範の代わりにいくつもの規範をもつことになる。すなわち、上記の各国にそれぞれひとつの規範を、そしてガリシアと東チモールとを含めると、少

なくとも九つの規範をもつことになるのである。

このようなさまざまな面でポルトガル語が被っている変化は、異なった社会的場面での2言語使用（ダイグロシア）の状況を作り出しているが、それはむしろ書き言葉、とりわけ文学作品において多く現れる。これらの国々の文学は明らかにポルトガル語でない他の言語の影響を被っているし、新たな人的、地理的、社会的領域から生じた新たな語彙を加えている。それはその文学に独創性を与えている。このような文学がポルトガルだけでなく世界の他の国々で引き起こしてきた関心は、大部分、それがいままでとは異なる表現法で新たな世界を明らかにしてきたことによっている。そのような新しい表現法の代表的人物としては、年代順に挙げると、ノエミア・デ・ソウザ、バルタザル・ロペス、フランシスコ・ジョゼ・テンレイロ、ジョゼ・クラヴェイリニャ、ルアンディノ・ヴィエイラらを挙げるができる。

このような状況のもとでは、母語の立場はどのようなになるのか。母語にはどのような重要性が与えられるのか、具体的には、母語は政府から何を期待しうるのか。それについては、政府の責任者、とりわけ国家の思想上の統制に関わる者は、母語が国民の文化の第一の部分であり、それゆえ特別な扱いを受けるに値するとの撤回不能の原則から出発している。

1975年12月10日、ちょうど独立宣言の1カ月後、アゴスティニョ・ネットはアンゴラ作家連盟総会での演説で、「公用語であるからといって、われわれの文学の使用言語として、もっぱらポルトガル語を使用するのは、われわれの問題を解決するのに寄与しない。」と述べた。そして、「作家連盟がポルトガル語で表現できない文学的価値を積極的にその文学に取り入れる」⁽²⁵⁾ 努力を行うことを必要なものとして擁護した。そして、さらに「初等教育においても、おそらくは中等教育においても、われわれの諸言語を使用する必要があるだろう。」⁽²⁶⁾ と述べた。アゴスティニョ・ネットは、20年来の会議で採択されたこの白熱した問題に関する決議やユネスコがこの問題に関して行ってきた努力を知っていた。いずれにせよ、彼はすでに、1976年にアフリカ統一機構の精神・条文となるべきものを先取りしていた。すなわち、1976年7月

2日－5日、モーリシャス諸島ポート・ルイスで開催されたアフリカ統一機構第13回通常総会において、参加国の元首、政府が採択したアフリカ文化憲章の第5章第18条には、「アフリカ諸国はアフリカ諸語の導入に必要な改革を準備し、実行に移さなければならない。」と、うたわれていたのである。⁽²⁷⁾

しかし、すでに述べた理由によって、そのような考えは、すぐには現実のものとはならなかった。なぜなら、意思伝達の体系におけるおおきな空白を埋めることが急務であり、そのためには、外国から来た言語ではあるが、個々の母語とは衝突せず、公用語、すなわち全土の言語となりうる条件を備えた言語に特別な地位を与え、優先的な扱いを行う必要があったからである。母語、それについてはアンゴラ作家連盟でのアゴスティニョ・ネットの上記の演説の5年後の1980年、アントニオ・ジャシントは、次のように述べる事ができた。「アンゴラ解放人民運動は、賢明かつ効率的に全面解放の闘争を主導した。そして、アンゴラ解放人民運動は最初から文化事象に深い関心をもっていたのである。物質文化、精神文化のきわめて多様な問題に取り組む中で、最初から国語やその研究・評価・使用について明らかな関心を示してきた。そして、識字運動を進めるとともに、前世紀末の偉大な民族主義者、例えばジョアン・デ・デウスの『初級教本』をキンブンドゥ語に翻訳したJ.D.コルデイロ・ダ・マタ、新聞にキンブンドゥ語でのコラムを掲載したアントニオ・デ・ピニョ、さらにアントニオ・アシス・ジュニオルらの足跡を辿ってきたし、さらには、ランブラク法によりポルトガル語、キンブンドゥ語、ウンブンドゥ語での識字化を提唱した50年代のあの青年たちの足跡をも辿ってきたのである。」さらに、彼は次の点を強調した。「戦争という状況のもとでは、当時はこのような昔からの夢を実現させることはできなかった。それは、夢というよりは、夢以上のものである。それは、はっきりとした確信であり、また決意である。」⁽²⁸⁾

アントニオ・ジャシントは、この言葉を1980年に『国語における字母の創造についての記録』の序文に書き記したが、その著作は、母語を評価し、アンゴラ文化の中で母語が占める地位を探るもっとも意義深い段階のひとつ

というものであった。それは、アンゴラ人民共和国で話される6バントゥ諸語、キコンゴ語、キンブンドゥ語、コクウェ語、ウンブンドゥ語、ムブンドゥ語、クワンヤナ語の音韻の記述であり、それぞれの項目は二つの部分、記述的な部分と音韻の読みの部分とから成り立っていた。⁽²⁹⁾

そのときからアンゴラではアフリカ諸語を通じての識字化の初期の試みが行われた。それは、おそらくはすぐには人目を引く成果を上げることはないにしろ、経験と時間が着実な成果を生み出すことが期待された。

言語問題解決のためのモザンビークの努力は、エドゥアルド・モンドラネ大学を中心として行われ、アンゴラの追及した道とは異なるものであったにせよ、アンゴラに劣るものではなかった。モザンビークではポルトガル語による識字化が選択され、それが学校教育で使用する唯一の言語となった。1976年「専門家」が「成人を外国語、あるいはたとえそれがアフリカの言語であっても未知の言語で識字化するのはきわめて困難である」⁽³⁰⁾と指摘し、モザンビーク当局者はその問題を認識していたにもかかわらず、そのような選択を行ったのであった。

モザンビークがポルトガル語による識字化を選択した理由は定かではない。おそらく、それぞれの国は、その利害に最も適切な解決策を見いだすものであろう。しかし、一方でそれが真実であっても、アフリカ諸国の会議で決められた一般的な措置がポルトガル語圏5カ国には最も適切なものとは言えないかもしれないのも、また真実である。効果的な識字化には、識字化後の後退を避けるために必要な条件がその国に存在することが必要である。そのためには、学び続ける興味を喚起し、その必要性を思い起こさせるように、識字者が文字で書かれたものを入手できることが必要であり、それには、教科書、辞書、文法書、新聞、さらに多様な書物などが不可欠なのである。その面では、--それは、5カ国の言語上の特殊性の面であるが、--われわれが特有の言語政策と呼びうるものがなお存在している。そのような政策は、ポルトガル語に特別な地位（それは、国の多くの部門で特権的な扱いを受けている状況から生じている）を与えることにより、ポルトガル語がますます国全

体を覆う方向に作用しているのである。

しかし、だからといって、言語政策の責任者に母語の状況に関して潜在的な関心がないわけではない。フェルナンド・ガニャン--いま一度われわれは彼が執筆した文書を利用することにしよう。その文書には、モザンビーク共和国の言語戦略の前提となる考えが述べられている。--は、2言語併用は必要であり、不可避であることがすぐに確認されたとし、同時に、「ポルトガル語が公用語に選択されたからといって、母語についての必要な研究は決して阻害されてはならない。というのは、母語は、われわれの文化のなくてはならない要素であるからである。」⁽³¹⁾とも述べている。

明らかに、ギニア・ビサウには、別の問題があった。ギニア・ビサウは、第2の言語としてフランス語が移植された国々に囲まれ、当然、隣接の国々からの影響を受けたし、そのほか、ギニア・ビサウ共和国へのフランス言語・文化の浸透を促進し、保護するためにフランス政府が取った政策にも影響された。ギニア・ビサウには、いくつかの母語と公用語としてのポルトガル語のほかに、ポルトガル語を基礎とするクレオール語があり、クレオール語は現在ますます勢力を進展させており、すくなくとも中期的には全国単位での伝達手段としての働きをポルトガル語と争うかの勢いである。

カボ・ヴェルデにせよ、サン・トメ・エ・プリンシペにせよ、すでに言及したように、2言語併用国の状況にあるが、この問題は論ずるまでもないほど明らかである。サン・トメ・エ・プリンシペやカボ・ヴェルデのクレオール語は、植民地時代には束縛され、軽視され、侮られていたが、独立後予測できない勢いで爆発的にその勢力を伸張させ、その結果、いまでは、日常の口頭での意思伝達手段としては全面的に使用されるようになった。しかし、ポルトガル語は社会的な意思伝達の手段としては、特別に重要な地位を占め、二つの文学雑誌『ライゼス』と『ポント・エ・ヴィルグラ』を含め、ほとんどもっぱらポルトガル語が使用される事例が多い。前記の2雑誌において、クレオール語での記事は、きわめてわずかである。

1979年、カボ・ヴェルデのミンデロでクレオール語に関する第1回言語学セ

ミナーが開催された。そこでは、いくつかの動議や勧告が承認されたが、そのひとつは、語源的字母とは反対に、音韻体系（それぞれの音素に、その書記素を。）に従った字母の記載に関するものであった。これは、いくぶんは論争になる点であるが、すくなくとも現在では、おそらくけっして対立を生み出すような問題ではないだろう。もっとも、すでに指摘したように、アミルカル・カブラルは「ポルトガル語とクレオール語との結び付きが」どのようなものであるか知れば、「それは、ポルトガル語の習得を容易にするであろう。」⁽³²⁾と述べており、そのような考えは、おそらく、語源的字母を損なって音韻的字母を使用することとは対立する考えではあると思われるのは事実であるが。上記のセミナーでの目新しい点は、クレオール語が第1言語と宣言された一方で、ポルトガル語には第2言語のカテゴリーが与られたことであった。

ギニア・ビサウのクレオール語は、多くの面で、カボ・ヴェルデのクレオール語とは異なっている（ついでに言えば、ポルトガル語を基礎とした三つのアフリカのクレオール語は、互いに異なっている）が、カボ・ヴェルデのサンティアゴ島のクレオール語とより大きな類似性がある。ここで詳しく述べるのがふさわしい問題ではないが、簡単にせよ言及せずに済ますわけにはいかない問題がある。それは、ギニア・ビサウのクレオール語が自国で生まれたのか、あるいは、現在までどちらかといえばそうであろうと考えられてきたように、カボ・ヴェルデからギニア・ビサウへともたらされたのかという問題である。しかし、いずれにせよ、ギニア・ビサウのクレオール語が加速的に拡大し始めたのは、1956年以降、ギニア・カボ・ヴェルデ独立アフリカ人党が展開した武装闘争の時期である。そのとき以降、クレオール語は、めざましい勢いで国の内陸部へと浸透した。ギニア・ビサウの全土を効果的に覆うには、なお時間を要するであろうが、比較的近い将来にそのような事態が起こるであろうことは、もはや誰の目にも疑いがない。それは、新たな事態、すなわち国家の統一にポルトガル語が果たす役割をクレオール語がポルトガル語から奪い去るという事態を招くことになるだろう。何が起こるか正確に予見するには、なお

時期尚早である。しかし、どのような推論もつねに学校教育がポルトガル語を通して行われてきたという事実を考慮に入れなければならないであろう。そのような状況は、あらゆる点から考えると、長期にわたり継続すると思われる。

学校教育に話を戻すと、アミルカル・カブラルの次の言葉が思い浮かぶ。

「われわれは、文化においてさえ、日和見主義を打破しなければならない。例えば、われわれの土地で教えるためには、いまからクレオール語で教えるのが基本であるとする同志がいる。あるいは、フラ語、マンディンガ語、バランタ語で教えるほうがよいと考える者もいる。それは、とても耳に心地よい。バランタの人々はそれを聞くと、とても満足することであろうが、それは、いまは可能ではない。いま、われわれはバランタ語をどのように書き記すのか。だれがバランタ語の音声体系を知っているのか。いまだ知られてはいない。まず最初に必要なのはクレオール語を研究することである。一例を挙げると、私は“n'ca na bai”と表記するが、“n'ka na bai”と書く者もあるだろう。結果としては、同じことになる。しかし、そのように教えるわけにはいかない。書き言葉を教えるためには、それを表記するための正確な方法を定める必要がある。それは、すべての人が同じ方法で表記するためだ。もしそうでなければ、ひどい混乱に陥ってしまう。」⁽³³⁾

そして、それに続く段落では、次のように主張している。

「しかし、多くの同志は日和見主義的感覚でクレオール語を前面に押し立てて進もうとしている。われわれはそうすることができるが、それはクレオール語を十分研究したあとでのことである。いまは書き言葉としてのわれわれの言語は、ポルトガル語である。それゆえ、ここではポルトガル語を話すのも、クレオール語で話すのも共に価値のあることである。クレオール語を話せば、われわれはいっそうわれわれの土地に忠実な者となるというのは、真実ではない。われわれの土地にいっそう忠実な者というのは、われわれの人民によく奉仕するため、党の規約や党の命令を遂行する者である。バランタ語、あるいはマンディンガ語、パペル語、マンカニャ語を知らないからといって、だ

れも劣等感をもつべきではない。もしそれらの言語を知っていれば、それに越したことはない。しかし、もし知らなければ、身振り、手振りを使ってでも他の者に自分の言いたいことを理解させればいいのである。」⁽³⁴⁾

そして、容赦ない論理で、次のように質問した。

「そう言うのも、裏切り者のジョアキン・バティカンほどマンジャコ語を知っている者は他にいいのか。裏切り者のセネ・スナエほどフラ語を知っている者は他にいいのか。」(51頁)

そこから、アミルカル・カブラルのすでに引用した次の文章が導かれた。

「ポルトガル語は、ポルトガル人がわれわれに残したものの中で最良のもののひとつである。なぜならば、言語は、人間が互いに関係を結ぶための道具、すなわち人生や世界の現実を話し、表現するための手段、道具以外のなものでもないからである。」⁽³⁵⁾

そして、ここに新たな検討を通して、言語問題に対するわれわれの見方を修正する必要性が生まれる。すなわち、これら2カ国（カボ・ヴェルデ、サン・トメ・エ・プリンシペ）が2言語併用の国であるという事実は、いくつかの面では、われわれがすでに暗示したであろうこととは反対に、言語問題の解決を容易にはしないのである。むしろ、その反対である。2言語、すなわち母語と旧植民者の言語のみが対峙しており、それら諸島の人的・社会的すべての領域で母語が使用されていると、その言語政策は、気兼ねしながらにせよ、クレオール語に高い評価を与える方向へと進み、その結果、クレオール語を学校教育にふさわしいものにしようとするだけではなく、「それが文化言語になるまで」⁽³⁶⁾ 発展させようとすることになる。もっとも、「われわれの生産力の発展の水準に応じて、クレオール語の発展は、なお多くの分野で制限されており、現時点においては、クレオール語はなお教育においてさえ使用できない。」との認識が保持されているのも事実ではあるが。⁽³⁷⁾ 両者の立場の逆転が緊要であると考え人々は、そのためにはクレオール語が必要条件を満たし、いかなるときにも社会の要請に応えることができるようになることが必要であると考え、そうなったときには、ポルトガル語には単なる外国語

としての地位、第2言語としての地位が与えられると考えるのである。

ドゥルセ・デ・アルマダは言う。「われわれの2言語併用はときとともにわが国において話される言語のそれぞれの重要性を逆転する傾向にはあるが、われわれは2言語併用であることを余儀なくされている。現在まではポルトガル語が第1言語で、教育・行政などの分野で使用される言語であったが、すでに述べた理由により、クレオール語がある程度の発展段階に達したならば、ポルトガル語は第2言語となる必要がある。」⁽³⁸⁾

そして、彼は、クレオール語の将来においての使用の問題に関して、次のような「言語政策」⁽³⁹⁾の決定を提案した。それは、クレオール語を「教育の言語として使用するのみならず、情報や文化の伝達手段としても、その使用が段階を追って行いうるよう配慮した上で使用しよう」とするものであった。⁽⁴⁰⁾

そして、彼の理解では、「ポルトガル語は、疑いもなく、ある種の概念の正確な吸収には大きな障害であり、生徒がその考えを自由に表現するのに妨げとなっている。生徒がポルトガル語で考えることに慣れ親しんでいないからである。」⁽⁴¹⁾それゆえ、クレオール語の発展の必要性和同時に「クレオール語の基礎を教えられるだけでなく、中等教育レベルでクレオール語を教える能力を身につけた」教師の養成の必要性も主張されたのである。⁽⁴²⁾

しかしながら、ドゥルセ・デ・アルマダは、クレオール語を「われわれの言語」としたいという願望が「ポルトガル語の排除を望むことを意味しているわけではない」⁽⁴³⁾ことを認めていた。彼は、ポルトガル語が、多くの理由で、さらに「外国、とりわけアフリカの旧ポルトガル植民地との意思伝達的手段」としてという理由を含めて、必要不可欠な言語であると考えていた。⁽⁴⁴⁾

クレオール語ができるだけ早く学校教育の言語となる必要性については、(実際、そのような必要性を認めるのが公的な立場となってきているのであるが)、筆者がまったく予見しなかった二つの発言を聞くことになり、少々驚くことになった。最初のものは、国家の思想統制に関わる重要人物のもので、カボ・ヴェルデで筆者が参加した会議のあとで、次のように述べた。

「その通りだ。ところで、われわれにはクレオール語がある。いったいそれをどうすればいいというんだ。」もうひとつのものは、カボ・ヴェルデの最も優れた知識人のひとりで、その問題の権威者のものだが、はっきりと次のように述べた。「クレオール語を教える必要はない。われわれはみなクレオール語を話すことができる。論理的、科学的に知識を深めるのは、中等教育課程の後期の1年でいいだろう。これは、もちろん、公式の考えとは相反する立場だけれども。」いずれにせよ、クレオール語がいかにカボ・ヴェルデにおいての話し言葉を支配し、それがどれほどカボ・ヴェルデの人々の不可欠の構成要素となっているかを知れば、目下のところ、あらゆる状況は、公式な面でもクレオール語が短期・中期的に、それがすでに日常生活の場で征服したものを征服するのに、有利に作用しているとの結論に達するであろう。

クレオール語における教育という複雑な問題に関して、検討に値する重要な文書がある。それは、ケベック（カナダ）ラヴァール大学・2言語併用に関する国際研究所のジョージアヌ・ハーマースが執筆した『学習と教育計画における言語と文化の役割』という論文で、フランスの雑誌『教育研究と文化』第43号、1977年9月－10月、に掲載された。発行は、カボ・ヴェルデにおいてクレオール語に関するセミナーが開催されたのとちょうど同じ年である。

執筆者は、概念をうまく整理し、2言語併用の現象についての最近の研究に依拠して、日常的な生活の面にせよ、教育面にせよ、1960年代からその論文を執筆したときまでのその問題についての先端的な研究者、バーンスタイン、ラボヴ、モントリオールのモジール大学のワラス・ランベールのグループ、ロングとパディーラ、クレマン、ハーマース、カミンスを引用しながら、次のような一連の問題を多角的に検討した。

母語内部に2言語併用がもたらす「変化」、母語が教育での伝達手段として使用されていないとき、教育での伝達手段としての使用の可能性、2言語併用についての研究の発展、とくに興味深いのは、「付加的な」2言語併用と「削除的な」2言語併用に関する解説、文化的相互依存、第2言語の教育、そして最後にモントリオール市の英語使用の子供に実践されている、いわゆ

る没入プログラムと呼ばれるもの。このプログラムの経験と方法は、その類似性によりカボ・ヴェルデの場合にきわめて示唆に富むものである。というのは、そのプログラムに関して、いろいろな事柄と共に、次のような記述が見られるからである。すなわち、「早期の没入とは、学校教育の最初から、生徒の母語とは異なる言語で行われる学校の課程、ないし教育のことと理解される。このプログラムに加わる子供は、モントリオールの社会的・経済的に支配的なコミュニティーの一員である。彼らは、フランス語で教育を受けるが、フランス語は、彼らのコミュニティーでは、社会的・文化的に地位が劣った言語である。そこで得られる結果が示しているのは、生徒が、知能の発達の間でも母語（この場合は英語）の知識の間でも遅れを示すことなく、また人格の形成を阻害することなく、調和が取れた形で、成長していくということである。」⁽⁴⁵⁾ さらに続けて、「これらの子供と、比較の集団として検査された英語を母語とする2言語併用の一般の生徒の間に相違がある場合には、その結果は、没入プログラムに参加する生徒の方が優れていた。このプログラムを続ける生徒は、高度の言語能力を獲得し、彼らのかなりの割合の者が、大人になって、均衡の取れた2言語併用の状態に達した。」(グリコ、ランバート、タッカー)⁽⁴⁶⁾ 確かに、カボ・ヴェルデの教育者は、このような教育学の現代の成果を考慮に入れており、そのような成果のお陰で、教育者たちは、最も適切な字母の選択（語源的字母か、音韻的字母か）に関することを含めて、カボ・ヴェルデの2言語併用がもつさまざまな側面について最終的にどのような決定をするかについて結論を引き出すために、段階的な試行を行うことが可能となった。あらゆる点から見て、実験校においての具体的で多様な実験が、問題を完全に自覚した上で、結果を分析し、決定的な推理を引き出すためには必要であると思われる。

これらの問題はカボ・ヴェルデにおいてははっきりとした形で現れているけれども、同じことがサン・トメ・エ・プリンシペにおいても起こっているのかどうか断言するのに、われわれは十分な材料をもっていない。しかし、起こっているとは思われない。少なくとも、サン・トメ・エ・プリンシペに

おいては、クリオル語が第1言語、そして文化語となり、ポルトガル語が現在もつ働きの多くの面で、それに取って代わるということが、はっきりと決定されたり、あるいは期待されたりしてはいないように思われる。

いままで述べてきたことやこの問題についての公式な見解、あるいは作家からの情報、いくつかの研究や論評からの断片的な情報を総合して得られる結論は、可能な限り早期に徐々に母語を学校教育の言語として使用し始めるのがすべての政府の意図であるということである。⁽⁴⁷⁾ そして、母語の評価を高め、発展させるための条件は、初等教育が母語によっても（あるいは、母語だけで）行われるようになるちょうどそのときに生まれると考えられている。アフリカの思想や文化を表明する人々は、サハラ砂漠の南での文化の再生は、アフリカ諸語が全盛期を迎えないうちは、その目的を完全に果たさないであろうと述べている。この意見は、アフリカの教育者、民族学者の多数意見である。そして、それゆえ、ユネスコは、勧告、計画、提案などを通して、ずっと以前からこの問題に特別の注意を払ってきたのである。一例として、1972年からのアフリカ諸語の口承伝承研究およびアフリカ諸語の奨励のための10年計画の事例をみれば、いくつかの優先事項の中に次のような項目が見いだされる。音声表記体系をいまだもたない諸言語の音声表記体系の確立、同一言語のいくつかの音声表記規則の統一化、主要アフリカ諸語、とくに複数の国で使用されている言語の正書法の規則化、その他、書物、文法書・語彙集、翻訳書の出版、そして口承伝承の作品集の編集、著名な文学作品や手引書の普及、さらにラジオ・テレビ放送実施、新聞・雑誌の発行、文化に関する書物や出版物の刊行についての勧告などがあった。この計画で勧告された事項の多くはなお実現の対象とはならなかったが、いくつかの事項は政府当局の注意を引いたし、他の事項も可能なものからアフリカ文化、そして当然、母語の立場に立って実行に移されていくだろうと思われる。

母語が学校で使用されるようになると、母語での文学も発展することになるだろう。その上、すでにそれを予告するような事例がある。カボ・ヴェルデ、ギニア・ビサウ、サン・トメ・エ・プリンシペでのクレオル文学には触れな

いにせよ、それは、例えば、少なくともフィオテ語（カビンダ）やリトテ語（モザンビーク）でのテキストがすでに存在するという事実である。それらの国々では、すでに言及してきたクレオール語での文学のほかに、ポルトガル語文学、アフリカ諸語の文学が見られることになるのである。結局、いくつかのアフリカ諸語での文学が存在する旧イギリス、フランス植民地の他のアフリカ諸国に多くの点で類似した現象が見られることになるだろう。

その結果、ポルトガル語には母語より低い地位を占める運命が待ち受けているとも言えるかもしれない。

しかし、その問題を具体的に分析するには、旧ポルトガル植民地においては、植民者の言語、すなわちポルトガル語とそれら植民地との言語上の関係は、他のヨーロッパ諸語を使用するアフリカの旧植民地において展開したのとは同じではないという原則から出発しなければならない。すなわち、5カ国の言語哲学は、他のアフリカ諸国のそれとは異なっているのである。

その相違は、ポルトガル語圏5カ国がひとつのヨーロッパの言語（ポルトガル語）を公用語とする決定を下す際、なんら気兼ねすることなしにそうした決定を下したところに求められる。実際、他の国々では、その種の決定を下すに際しては、一種の罪悪感があった（多くの場合、いまでもある）ように思われるのである。5カ国では、状況は異なっている。それは、フェルナンド・ガニャンの次の言葉によっても確かめられる。「使用言語としてポルトガル語を選択する決定を下す根源的な理由として、多くのフランス、イギリス植民地の場合がそうであったようには、抑圧者の言語で高等教育を受けた指導者（彼らは、イギリス、フランスの学校で教育を受け、その価値観の多くを同化した）が課した文化決定論（強調は筆者）があったと、結論付けることはできない。反対に、この選択は、ポルトガル語以外の他の言語についての彼らの深い知識を犠牲にしてまで行われたのである。」^{〔48〕} 結局、「選択は、戦略的な決定（強調は筆者）であり、その決定が唯一正しいものであったかどうかは、将来になって初めて完全に確認されることになるだろう。」^{〔49〕} そして、モザンビークの青年、ロウレンソ・ロザリオがおよそ8年後、同じ内

容の考えを次の言葉で、いかなる劣等感ももたずに表明したのは、もはやわれわれは驚かされない。「アフリカ大陸の多くの国々とは異なり、モザンビークのポルトガル語の状況は、純粹にアフリカ的な言語が見いだされるまで暫定的な性格で受け継がれた厄介な遺産というものではない。むしろ、われわれが確信しているのは、ポルトガル語の公用語としての採用は、感情的な理由に基づいているのではなく、まったくその反対に、その採用は、容易でない征服を意味しているということである。というのは、その採用は、実際長く、野心的な計画、そして、会議の場で、自らの利害にのみ関心を抱く大国により地理的に分割されたアフリカにおいては、唯一現実的で、可能な計画を実行に移すための非常に効果的な手段だからである。」⁽⁵⁰⁾ そして、ロウレンソ・ロザリオは、ポルトガル語が「住民に国民としてのアイデンティティー、そして文化的な自覚」⁽⁵¹⁾ を与えるのに役立つことを認め、それに確信をもっているのである。

実際、ポルトガル語圏5カ国は、あるひとつの原則から出発した。その原則というのは、言語がひとつの文化的事実であり、そのような文化的事実は確かにそれらを生みだす者に浸透することから始まるが、そのとき以降、主人をもたなくなる、すなわちそのような文化的事実はそれらを使用したいと望む者、あるいはそれらを使用する必要性がある者すべてのものである、という原則である。5カ国は、ポルトガル語をそれがあたかも彼ら自身のものであるかのように自分のものとした。堂々と威厳をもち、そしてまったく自然に、ポルトガル語を受入れ、いまや全土で再導入を図っている。ポルトガル語の知識を深め、それを完全に自分のものとすると同時に、ポルトガル語に特に重要な地位を与え、その普及を図り、それに高い地位を与えている。それがまったく自分のものとなっているので、それを変化させ、変更し、各国・各地方の現実にならざることを避け、そして、話し言葉と書き言葉の両面で、それを変容させている。そのような変容は、未来において（現在においても、過去においてもそうであるように）カボ・ヴェルデ化、アンゴラ化、モザンビーク化、ギニア・ビサウ化、サン・トメ・エ・プリンシペ化をもたらすだ

ろう。それゆえ、ポルトガル語は、ポルトガルだけのものであることを止め、ブラジル、ガリシア、東チモールのほか、上記のすべての国々のもの、そしてポルトガル語が話者の数でも、社会的にも重要性をもつすべての地域のものとなるのである。ポルトガル語は一国のものであることをやめ、ポルトガル語圏のすべての国々のものとなった。それゆえ、ひとりの主人がいるわけではなく、全員が主人なのである。ポルトガル語というひとつの言語があっても、いくつかの規範があり、当然、いくつもの変異形（ヴァリエント）がある。すなわち、ギニア・ビサウの変異形、カボ・ヴェルデやサン・トメ・エ・プリンシペの変異形、アンゴラやモザンビーク、ブラジル、ゴア、東チモールの変異形、そしてポルトガルの変異形があるのである。

それゆえ、明らかに、ポルトガル語の将来に関しては最も明るい見通しをもちうる、とわれわれは考えている。それは、ポルトガル語が現在まで初等教育課程で教えられる唯一の言語であったし、今後何年かの間は依然としてそうであろうという事実裏付けられている。

そして、母語に学校での使用言語という使命が与えられるようになって、それだからといって、ポルトガル語がいままで占めていた教育に使用される言語としての地位が奪われてしまうことはないだろう。というのは、非識字者撲滅運動を優先事項としているのは、社会主義的計画をもつ国々であり、そこでは、識字化は急速な勢いで行われており、英語やフランス語の導入が行われる国々以上の速さでなされているからである。いつの日にか経済的条件が好転し、母語に対する決定的な投資が可能となったとしても、それだからといって、ポルトガル語がその重要性を失うことはないだろう。というのは、そのときにはすでにポルトガル語は各国にしっかりと根を下ろし、その社会的・政治的、そして文学的等の現実に適応しているであろうから、その有用性に疑問を挟むような理由はないからである。この点に関して、すでに引用したモザンビーク人ロウレンソ・ロザリオの次のような言葉に耳を傾けるのは興味深い。その言葉は、われわれがカボ・ヴェルデに関して以前に述べた主張を内に含んでいるからである。

「(...) ポルトガル語は、政治・行政の道具としての公用語の地位から、もっと深い意味をもつ立場への道、すなわちモザンビークというひとつの国家の思考と自己確信を伝える手段となる道を歩むことができるだろう。」⁽⁵²⁾

そして、このように考えれば、8ないし9カ国で使用される言語であるポルトガル語（およそ1億6千万の話者をもち、ユネスコによると世界で最も重要な、そして地球上で最も大きな広がりをもつ言語のひとつと考えられている）は、ますます大きな名声を享受し続けることであろう。そして、そのような名声は大部分、武装闘争が開始された歴史的な瞬間以降、ポルトガル語がもつ有効性を理由として、それを公用語として採用したアフリカの5カ国のお蔭である。⁽⁵³⁾

ポルトガル語は、実際、アフリカ5カ国の文学を伝える言語である。現在、アフリカ5カ国の文学のテキストの多くは、単行書として、さらに選集として、次のような各国語、すなわちスペイン語、イタリア語、英語、ドイツ語、フィンランド語、ポーランド語、スウェーデン語、ルーマニア語、ブルガリア語、ユーゴスラビア語、ノルウェー語、アラビア語、ヴェトナム語、オランダ語、ウクライナ語、ラトビア語などに翻訳され、その文学は、文学的な観点からだけでなく、文化的、人類学的等の観点からも重要なものと考えられている。そして、まさにそれゆえ、アフリカ5カ国の文学は、上記の言語を使用する国々でポルトガル語が獲得してきた名声や実用性とも大きな繋がりをもっているのだ。

そして、このような事実は、ポルトガル語が世界の国々、とくにアフリカ諸国で名声を持ち続けるのにも貢献することであろうことは間違いないのである。

(注)

- (1) "Qual, no seu entender, o futuro do português como língua literária?" In COLÓQUIO/Letras, no. 21. Lisboa, Setembro, 1974, p.5-16. 回答者は次の通り。Alfredo Margarido, António Aurélio Gonçalves, Eugénio Lisboa, Manuel Ferreira, Maria de Lourdes Cortez, Mário António, Rui Knopfli.
- (2) 筆者の意図とは別の事情で、ジュゼッペ・タヴァーニ教授のこの優れた研究の題名を明記することができなかった。
- (3) Amílcar Cabral: "Resistência cultural", in *Textos Políticos Amílcar Cabral*. Lisboa, Fundo de Apoio aos Organismos Jovens, Secretaria de Estado e Acção Social Escolar, MEIC, 1976, p.26.
- (4) *Id., ibid.*
- (5) *Id.*, p.51.
- (6) Leonard Sainville: "Le roman et ses responsabilités", in *Présence Africaine*, nos.27,28. Paris, Octobre-Novembre, 1959, p.46-47.
- (7) *Id., ibid.*
- (8) Fernando Ganhão: "O papel da língua portuguesa em Moçambique", Maputo, s.d.[1982?], p.2. モンドラネ大学文学部後援、NELMO モザンビーク諸言語研究センター主催により、マプートで開催された「ポルトガル語に関する第1回全国セミナー」の基調報告として提出されたタイプライター打ち原稿。
- (9) *Id., ibid.*
- (10) 代表団は次の通り。代表で出版者のジョアン・サ・ダ・コスタ、その夫人イダリナ・サ・ダ・コスタ、医師ジョゼ・パドゥア。ジョゼ・パドゥアは、アンゴラに居住していたが、ポルトガル軍から離れ、FNLAアンゴラ解放民族戦線に捕らえられた。
- (11) Dulce de Almada Duarte: "A Problemática da utilização das línguas nacionais: língua, nação, identidade cultural". In *Raízes*,

nos.5,6. Praia, Cabo Verde,1978, p.73.

(12) Amílcar Cabral: *ob.cit.*, p.54.

(13) "Ensino em Cabo Verde -- balanço e perspectivas". In *Emigração*, nos.11,12, Praia, Cabo Verde, Novembro-Dezembro, 1985,p.17.

(14) *Id.,ibid.*

(15) Joseph Proth: *Línguas nacionais e formação de professores em África*. Guia Metodológico para uso dos Institutos de Formação. Lisboa, Edições 70, 1979, p.2

(16) "Ensino em Cabo Verde -- Balanço e perspectivas", *cit.*, p.17.

(17) *Id.,ibid.*

(18) Manuel M. da Veiga:"Crioulo em foco--problemática duma escrita", in *África*, vol. II, ano II, no.6, Lisboa, Outubro-Dezembro, 1979, p.75.

(19) *Id.,ibid.*

(20) 1975年モザンビーク解放戦線情報・広報局全国総会に提出された文書〔タイプライター打ち〕。p.3.

(21) *Id.,p.3.*

(22) *Id.,ibid.*

(23) *Id.,ibid.*

(24) *Id.,ibid.*

(25) Agostinho Neto:"Palavras proferidas na sessão solene da proclamação da União dos Escritores Angolanos, em Luanda, a 10 de Dezembro de 1975", in...*Ainda o meu sonho...*, Lisboa, Edições 70, 1980,p.34.

(26) *Id.,ibid.*

(27) アフリカ文化憲章は、意図を表明するものとしてだけではなく、その実現へ向けてのプログラムを示す文書としても重要な価値がある。

(28) António Jacinto: *Introdução a Histórico sobre a criação dos*

alfabetos em línguas nacionais. Lisboa/Luanda, INALD-Instituto Nacional do Livro e do Disco, Edições 70, 1980, p.10.

- (29) この *Histórico sobre a criação dos alfabetos em línguas nacionais* の扉頁には、注として、次のような説明が記されている。

「この研究は、国立言語研究所応用科学研究局が行った。作業は2段階で行われた。第1段階は、『国内段階』と呼ばれ、アフリカ人言語学者マリア・セレス・ペレイラ・アバカイエ・カウンタを責任者として、もっぱらアンゴラ人のスタッフにより実施された。この段階は、ユネスコ派遣の最初の専門家が到着した1980年2月に終わった。」

- (30) "Réunion d'experts' sur la Constitution des langues africaines aux activités culturelles, et aux programmes d'alphabetisation". Youndé, 10-14 October 1970. In *Présence Africaine*, no.76. Paris, 4^e.Trimestre 1970, p.198.
- (31) FernandoGanhão: *doc.cit.*, p.5.
- (32) Amílcar Cabral: *ob.cit.*, p.54.
- (33) *Id.,ibid.*, p.50.
- (34) *Id.*,p.50-51.
- (35) *Id.*,p.51.
- (36) Dulce de Almada Duarte: *ob.cit.*,p.75.
- (37) *Id.*,p.77.
- (38) *Id.,ibid.*, p.79.
- (39) *Id.,ibid.*
- (40) *Id.,ibid.*
- (41) *Id.*,p.80.
- (42) *Id.,ibid.*
- (43) *Id.*,p.79.
- (44) *Id.*,p.77.
- (45) Josiane Hamers:"Le rôle du langage et de la culture dans le

processus d'apprentissage et dans la planification éducative", in *Recherche Pédagogique et Culture*, no.43. Paris, Septembre-Octobre 1977.

(46) *Id., ibid.*

(47) それ以外の方法でもなされうるのではないかと筆者は考えている。つまり、一国にいくつもの言語が存在するという問題の解決を図る方法を考える上で範例となるソ連は、次の二つの基本原則から出発したからである。その二つの基本原則とは、1) 全土にひとつの国語(ロシア語)をもち、2) 学校教育は各共和国の言語で行う、というものであった。そして、さらに一般的にはそのような共和国の言語的領域の内部に第3の言語を認めたのであった。すなわち、すべての言語に独自の地位を与え、いかなる差別的待遇をも避けようとしたのであった。

(48) Fernando Ganhão: *ob.cit.*, p.3.

(49) *Id.*, p.3.

(50) Lourenço Rosário: "Língua portuguesa e cultura maçambicana. De instrumento de consciência e unidade nacional a veículo e expressão de identidade cultural", in *Cadernos de Literatura*, no.12. Coimbra, Departamento de Literatura Portuguesa da Universidade de Coimbra/Instituto Nacional de Investigação Científica, 1982, p.65-66.

(51) *Id.*, p.66.

(52) *Id., ibid.*

(53) 「相違を克服し、統一をもたらす要素としてポルトガル語を取り入れることは、歴史的には、1962年のモザンビーク解放戦線の結成のときに、すでに始まっている。」

「融合し、モザンビーク解放戦線を結成した三つの運動の参加者の大多数は、ポルトガル語の運用能力が十分ではなく、意思伝達的手段としてポルトガル語を使わなかった。そのような運動は政治的・経済的亡命者が中心となって結成

されていたので、彼らの大多数は英語やスワヒリ語を使った。それらの言語が、政治・職業の面で彼らが教育を受けた言語だったからである。しかし、モザンビーク解放戦線結成後、何年か経過する間に、英語やスワヒリ語は、解放戦線内部の意思伝達手段としては次第に使われなくなっていた。解放戦線の最初の大会で言語についてはいかなる決議もなされなかったのは確かであるが、大会の文書の用語をポルトガル語にすることについては、全員一致の暗黙の了解があった。なぜなら、使用言語が相違する状況下において、各運動の参加者の中に共通して使用者があったのは、ポルトガル語だったからである。」

「ポルトガル語は総意により使用言語となったが、それは到達された統一を危険にさらす言語上の決定を避けることのほか、敵をより良く知ることを可能とする手段としての意味合いももっていた。敵と同じ意思伝達的手段を使用することにより、敵の内部に奥深く入り込むことがより容易になった。政治・軍事責任者はすべて、すぐにポルトガル語で話し、自らを表現するための努力を始めた。その教育・経歴からして英語のみを使用していたモンドラネ議長もその努力を率先して行った。もっとも解放戦線の政治組織上の用語としては、「チェアマン」や「ブランチ」などの言葉が、第2回大会での新組織により廃止されるまで存続したのは事実であるが。」

「使用言語としてポルトガル語を選択する決定を下す根源的な理由として、多くのフランス、イギリス植民地の場合がそうであったようには、抑圧者の言語で高等教育を受けた指導者（彼らは、イギリス、フランスの学校で教育を受け、その価値観の多くを同化した。）が課した文化決定論（強調は筆者）があったと、結論付けることはできない。反対に、この選択は、ポルトガル語以外の他の言語についての彼らの深い知識を犠牲にしてまで行われたのである。おそらくいまひとつ別の疑問を発することができるだろう。それは、ポルトガル語を選択した理由としては、モザンビークの民族諸語の質に関する価値判断があったのではないか、という疑問である。これに対しては、次のように言えるだろう。もしそうであったら、すでに指摘した理由から、おそらく英語が選ばれていただろうと。」

「選択は、戦略的な決定であり、その決定が唯一正しいものであったかどうかは、将来になって初めて完全に確認されることになる。」

（フェルナンド・ガニャン：「モザンビークにおけるポルトガル語の役割」、モンドラネ大学文学部教授、NELMOモザンビーク諸言語研究センター主催により、マプートで1982年？に開催された「ポルトガル語に関する第1回全国セミナー」での報告。

〔東 明彦訳〕

アンゴラにおける言語問題についての考察

イレネ・ゲーラ・マルケス

I はじめに

一般に知られている通り、アンゴラは何世紀にもわたって、ポルトガルの植民地支配のくびきのもとにあった。この間、支配された住民の文化は、侮蔑され、劣ったものとみなされて、住民の一部（外国人入植者との接触が多かった者）の中には、自分達の社会的・文化的価値を一種拒絶するような感情さえ生まれるに至った。

アンゴラにおける言語政策は、抑圧的な体制に奉仕していたので、自分達の言語を学校で使い、教えることは、ついに実施されたことはなかった。それらの言語は、抑圧者の言語、即ちポルトガル語によって、取って代られるように仕向けられた、即ち、我々の土地に植民地のイデオロギーを根付かせることに、より役立つためにである。

しかしながら、ポルトガル語を、全土にわたって根付かせることはできなかった、特に農村部においてはそうであるが、これはアンゴラ住民の抵抗によるだけではなく、アンゴラの一部でしか、ポルトガル語がつかわれなかったことによる。

学校では、ポルトガル語を教える際、生徒達の母語についての考慮は払われず、そのためポルトガル語の習得には、常に深刻な困難が伴った。アンゴラの独立に伴い、また、現代の言語研究に基づいて、我々の言語問題を分析し、ポルトガル語教育のためのより正しい方法論を探す試みが重要と思う、というのは、アンゴラではポルトガル語が現在、公用語兼共通語と定められ、「1978/80年間アンゴラ人民共和国経済・社会開発基本方針」の教育に関する章に記されているように「一定の地域の農民の識字に母語を使うよう、最短期間内に努力が払われなければならない、同時に、ポルトガル語を共通・

公用語として教えることを促進する」とあるように。

II－言語の現状分析の試み

A－わが国における問題を考えてみよう。一方では、その大部分が、バンツー諸語に属する諸母語があり、アンゴラ住民の大きな部分の母語となっている。

他方、ロマンス諸語に属するポルトガル語があり、一部のアンゴラ住民の母語となっているほか、最も多数の住民にとって、第二の言語となっているが、これは主としてアンゴラの住民の過半数が住んでいる農村部においてである。

我々は、明瞭に規定される特色を持った個別の社会から生ずる異なった言語システムの状況を目前にしている訳である。多くのケースにおいて、初めて学校に行く子供達は、ポルトガル語がうまく話せないか、殆ど判らない、母語となんらの結び付きもないからである。

この子供達は、母語では、外の世界、社会生活、自分自身についてその観方を、様々な状況の下で表現し、理解し合う言語能力を持っている。

B－母語で学校教育を受けることは、たとえ子供にとって生活の変化を意味するとしても、彼の中に深い断絶感をひき起こすことはない、というのは、学校は彼の発達のひとつの段階であり、同人にとって自然なコミュニケーションの道具、つまりその言語を通じて行なわれるからである。

同じことは、入学するに際して、新しい世界に直面し、そこではまた新しいコミュニケーションの道具で、彼にはほぼ完全に未知な母語とは違った言語を通じて入って行かなければならない子供の場合には当てはまらない。

アンゴラの場合、特に農村地帯では、既に述べた通り、第二の言語で学校教育を受け始める子供達は、家庭（そこでは母語で話す）と学校（ポルトガル語で話さなければならない）という二つの異なった世界に直面させられる。この事実により、学校は子供にとってひとつの暴力となり得るが、その度合

いは、彼の心理的・情感的・理性的な世界のすべてを、別の記号を通じて作りあげ、表現し、コミュニケーションしなければならない度合いに応じている。このことは、彼の中に抑制、混乱を引き起し、心理的発達 of 自然のリズムを困難にする可能性さえあり、幾つかのケースでは、学校を拒絶するに至る。このような状況の場合、最大の真剣さをもって、教育的かつ方法論をもって、この問題が扱われる必要がある。

現時点では、アンゴラにおける学校教育は、ポルトガル語だけで行なわれている、というのは、特定の農村地方では、文盲をより容易になくすため、成人の識字教育が短期間に母語で行なわれるよう研究がかなり進んでいるとはいえ、母語で教育を行うための必要条件が、まだ十分に作り出されていないからである。

音声の伝統について、全国的に行なわれたひとつの研究調査に基づいて国内の諸言語の科学的研究が行なわれ、次いでその調査素材を分析し、システム化した結果、Kikoongo語、Kimbundu語、Cokwe語、umbundu語、Mbunda語、Kwanyana語の音韻システムの概要が描かれ、アルファベットの案がつくられ、わが国で使われているポルトガル語で書かれた識字マニュアルを、これらの6つの言語に翻訳することが可能になった。

MPLA—労働党臨時第1回党大会が、教育の分野で設定した方針、その正規基礎教育に関する部分は、次の通りである：

“a) 初期の教育の質を強化し向上すること、特に次の点について、
—ポルトガル語の教育に、母語を関連づけて活用すること—これが生徒のコミュニケーションと学習を確かなものにする唯一の方法である。”

第一の段階は、アフリカ諸国の、またその他の母語で学校教育を行い、また実際的なカリキュラムの中に母語を取り入れている二言語使用の国々の経験を検討し、反省を加えることから始めることが重要であろう。わが国における言語状況と、生徒の母語について考慮がはられていない主として農村に於けるポルトガル語習得について学校で起きている困難さを考慮に入れて、すぐこれらのテーマについて討議を開始することが考えられる。

C—わが国に於ては、未だポルトガル語だけによる学校教育が続いているので、そこから、我々は生じて来る困難な点を克服し、教育のプロセスのより大きい効率化を達成するためのより適切な手段を、その中で見つけなければならないであろう。これは難しく、複雑な状況であることに違いない。

いくつかの面を見てみよう。

1°—子供は、若ければ若い程、外国語を習得し易いといわれる。現在、人口の爆発があり、入学前の教育機関の数や資格のある教員が不足していることから、わが国の子供の多くが、ポルトガル語に初めて触れることができるような機関に通っていない。このような方法ならば、ダイレクト・メソッドにより外国語をもっと自然な形で学ぶこともできるのだが。ところが、アンゴラの子供の多くが、最初にポルトガル語に触れるのは識字化のコース（1年）であり、これは一日4時間半を超えることは決してなく、時にはわずか2時間に短縮される。農村部の子供の生活の大部分が、このようにして母語による生活で占められることが判る。

2°—ポルトガル語は、アンゴラにおいては、住民の多くの部分にとって第二の言語となっている。ポルトガル語は外国語として、方法論を持ち、その習得の様々な段階に応じた教育技術の観点から扱われるべきであると思われる。

ポルトガル語の適切な教育法として、先生達は次のような区別に注目すべきであろう：

—第二の言語ではあるが、共通語として教えるということは、母語を教えることと同じではない。

母語を話せるようになるのは、基本的には言語獲得による、即ちこの言語を話す人達と一緒に住み、この言語が所属し、コミュニケーションの手段となっている文化・社会の現実を生きることを通ずる社会的で自然なプロセスによるものである。学校の役割は、母語に関していえば、その言語に熟達することをシステム化し、言語現象を説明することよりずっと大きいものである。外国語に熟達することは、自然なプロセスで行われるものではない。組

織化されたプロセスのひとつである習得によるものであり、ここでは、その言語に多かれ少なかれ熟達するためのメソッドが決定的な重要性を帯びる。

—ある外国語を習うということは、この言語の助けを借りてコミュニケーションができるよう、その言語を律する音韻、形態—統語論的法則に熟達することを習うことであり—母語で行われるようにメッセージを受け、発信することである。ある外国語を習うということは、この言語を通じて、心理的、情感的、理性的、イデオロギー的、技術的な性質を持つ内容を伝えられるよう、その言語の基本的構造と基礎的なボキャブラリーに熟達することである。

我々の国に於て、ポルトガル語でこれを実現するには、多言語が使用されている状況の中で、これを行なうことになる。

前記の観点に従えば、このことは、言語接触やそこから生ずるもの—例えば言語干渉—の現象を無視することも、放置することもできないことを意味する。この現象は、その重要性により、また、その教育的、方法論的適用の仕方に於いて考慮されねばならない。

3° —最後に、我々にとっては基本的と思われるひとつの問題を想起することが重要である、即ち、植民地時代にポルトガル語がはたした役割と、独立後の現在の役割である。

植民地時代、ポルトガル語は支配のための言語であり、劣っているとみなされた国の諸母語を妨げて強制された言語であった。

現在、ポルトガル語は公用語で、共通の、学校教育のための言語である。子供が、技術・科学的、また革命の世界に自ら入って行くのを助けるコミュニケーションの道具である。

特定のインフラストラクチャー上の問題（全国規模での幼稚園の創設とその教員の養成等）が、解決されない間は、第一段階に於てはポルトガル語を教えるための正しいメソッドを用いるということに我々は常に留意すべきである、次いで第二段階として、前記の条件が整備されれば直ちに、学校教育の最初の数年は、母語のみで行うか、または、ポルトガル語併用（今後採用される基準による）となるが、ポルトガル語が充分浸透していない農村部にお

いては主としてそうなる。農村部において、ポルトガル語教育は、その現実に基づいて行われることになるだろうが、文化的な根無し草にならずに、二つの言語を言語的規範と意味論の分野で徐々に近づけるような方法で行なわれるべきである。母語による学校教育は、学校での生活と学校の外での生活の間の断絶を防ぐと思われるし、子供の感受性に関し調和的な発達をもたらす、家庭教育への連続性を、そのようにして与えることになる。

この問題に関しては、同志アゴスティーニョ・ネット大統領が1977年11月24日、アンゴラ作家同盟で行った演説が明示的であるが、彼はその中で『ポルトガル語だけを、我々の文学の中で公用、共通かつ現在では利用価値のある言語として専ら使うことは、我々の問題を解決しない。初等教育においても、また、多分中等教育においても、我々の諸言語を使うことが必要となろう』と述べている。しかしながら『すべての言語問題の発展は、勿論植民地主義と経済開発から引き継いできたコンプレックスをかき消すことに、かゝっている』点を考慮に入れない訳ではない。

国立言語研究所が、文化庁の協力を得て作成した『国語の研究に関する考察』という文書も、これと同じ方向に向いており、その中で国語問題に言及するに当たって次のように述べている『これらの諸言語は、国立言語研究所が、短期的には成人の識字教育、並びに小学校入学前教育及び農村部の小学一年生の学校教育の知識獲得の手段として振興し、活用するために研究され、応用科学的調査の対象となるべきである』と。

—『1978/80年間・アンゴラ人民共和国、経済社会開発のための基本方針』は、『特定の地域での農民の識字教育に於て、国語が活用されるよう、最短期間内で努力が払われるべきであり、同時にポルトガル語が公用・共通語として教えられることを促進する』と述べている。

—『MPLA—労働党綱領及び計画』の中では、文化の分野に関する章で、MPLA—労働党の任務として次のように定めている『ポルトガル語を共通語として含めた上で、国語を発展させるよう奨励すること』。

1980年12月に開催されたMPLA—労働党第一回臨時党大会で、言語の問

題が、再度ひとつの関心事となり、教育に関する章の特に基礎正規教育に関する部分で、次のように述べているのが見られる『ポルトガル語教育と関連させて諸母語を活用すること』、文化の領域では『国語の科学的研究が、ひき続き行われると共に、教育面、並びにコミュニケーションの手段及び文化的表出として普及させ、使われる』必要性が勧告された。

D—わが国における言語問題面でのすべての仕事は、国内の多言語使用状況と個人における複数または二言語使用の状況から出発し、またこの状況との関連でその方針が決められねばならない。この現実の認識と適切な対処が、国語をすべての分野と（コミュニケーション）状況の中で使用し、促進するため、また、ポルトガル語を効果的に教えるための基盤となる。

現在、また当分の間はまだ国語を教育の中に組み込み、使うには、事前の作業（研究、記述、転記、強化・教材の作成）を必要としている。教員の養成、特にポルトガル語の教員の養成についていえば、新しい展望を持ち、新しい指針をもったひとつの作業を始めることが最大の関心事となろう、これはその他の利点のうち、教員自身が、それを乗り越えるひとつの方法となり得るような方法で、教員が言語学的な研究を始めるように導くのである。

目下のところ、諸母語について、またアンゴラのポルトガル語について、それ程多くの理論的要素を、我々には持っている訳ではないが、それを補う、二つの基本的なものを持っている、即ち

- a) すべての話し手（住民）が貯えている広範な言語素材、これが利用され、研究されねばならない。
- b) 生きている言語—母語及び外国語、の教育技術のためのメソッドに沿った素材。

これらの素材は、殆ど世界中で行なわれている研究、調査及び実験の結果であり、我々の国にも存在し、我々の現実にも最も良く適合するよう利用することができる。

特に、ポルトガル語教育のメソッドの方向転換に、これがより正しい方法

で使われることが可能である。

生きている言語の現代的な教育メソッドに基づき、また応用言語学に支えられた新しいメソッドと技術の適応には、我々が直接生徒と接触することを通じ我々の誰れもが近づくことのできる言語素材の観察と研究が伴わなければならない。

ポルトガル語の教育メソッドは、我々全員の真剣な考察の対象となる価値がある。公用及び共通語として、我々の党のメンバーによって、すべての地域に政治・イデオロギー的メッセージが届くよう使われており、各地で、直接、または間接＝この場合は翻訳を通じて＝にこれが理解されている。国家機構も、また、行政に於ても、国家が発する政治・イデオロギー的指針に於ても、ポルトガル語が使われている。ポルトガル語は、我々の国の統一のためのひとつの要素になっている、というのは、様々な母語を話す人々の間のコミュニケーションのための共通語の地位を決定付けられているからである。

E—方法論上の問題は、すぐにポルトガル語教育にとって、最も正しく、又は適切なメソッドはどれかという疑問を呈示する。まず何よりも先に、共通の言語とは、コミュニケーションの言語であるという基本的な面を忘れないことが重要である。そうすると、このコミュニケーションの効率に対する配慮が、ポルトガル語の先生の指針となるべきである。

ポルトガル語が学校教育の言葉でもあることから、(正規教育)の開始と成人の識字教育は、正しく適切なメソッドにより、子供及び文字を教わりつつある人達の言語構造とは非常に違った別の言語構造に急激に移ることを容易にするようなものとなるべきである。

アンゴラの住民の大きな部分にとって、ポルトガル語は、第二の言語であることから、ポルトガル語は、我々の国に於ては、本質的に外国語として教えられるべきであろうと思われる。外国語の教育法は、その様々な習得の段階に真剣に適合させたものとなるべきで、その言語のまったく初歩の段階から、確固とした駆使の段階、又はその言語での言語能力の仕上げの段階に応

じ変化させるよう、常々配慮すべきであろう。外国語の現代的な教育法を重視する様々な潮流の中で、我々の関心を引くものがひとつあるが、それは、対照又は比較言語学に基づくもので、一種の予防教育法をつくり上げることができるよう要素を提供するものである。

従って、外国語としてのポルトガル語教育の指針は、国内の様々な地域で支配的な母語の特定の構造を比較又は対照言語学的に研究することから始めるべきであると思われる。

対照的な分析を可能にするためには、次の諸点を考慮すべきである。

- 現存する言語システム間（母語と共通語）にある差異の認識。
- この差異から生ずるポルトガル語を学ぶ際の困難を認識し特定化すること。
- 言語接触の結果生ずる言語干渉がもたらす誤り（言語上の誤りの概念の再検討）の一覧表化。
- 教員達が、生徒達の具体的な現実に適したプログラムの内容を準備できるようにする『予防教育法』の作成、ここでは大きな困難とは即ち最大の言語干渉のケースに相当することを主張する。
- 対照言語分析は、生徒のレベルで明白に行なわれるのではなく、教員のレベルで行われる。より深い、また念入りの研究や分析は、時間をかけて国立言語研究所のような機関で行うことができるであろうし、より長期的には、アフリカの数ヶ国で行われている前例に従い、応用言語学センターを創設して行うことができよう。
- ポルトガル語の教員達は、この予防教育法的研究が行えるよう、バンツール諸語の、少なくとも主要な特色について若干は知っているべきである。

F 一別の問題が提起される、即ちアンゴラで話されているポルトガル語の研究の問題である。

この研究は、次のことを意味する。

- 基本的（より日常的）なポルトガル語の一斉調査で、アンゴラの地域住

民（地理上の地域による統計上の）が実際に使っている条件が判るようなものの、

- a) 理解力。
- b) 理解と口頭による表現力。
- c) 理解、口頭による表現力及び文章による表現力。

— アンゴラのポルトガル語の記述（音韻、形態—統語論的、意味論的）。

この記述的分析は、長期的には、次のことを画定することも可能にしよう。

a) 言語の自然な発展（ダイナミズム、生きている言語の発展）から生ずるアンゴラのポルトガル語の刻印。

b) 国語との接触（干渉等）から生ずるアンゴラのポルトガル語の刻印。

2つの調査が、適切に作成されれば、科学的・教育法の分野で、次の問題を提起するようになると思われる、

1. アンゴラに於ける標準ポルトガル語の確定、
2. アンゴラで、どのようなポルトガル語が教えられるべきかの定義、
3. 言語規範の諸問題の再検討（記述・規範文法の見直しと構成）、
4. 諸語の公式綴字法の基準の確立、
5. ポルトガル語（外国語）及び国語（複数の母語）教育法の適切なメソッドの作成、
6. 教育の目的、プログラムの内容及び教育のメソッド・技術の実現を可能にするような教材の作成。

G. —短期的には、基本的な教育の支えとなるこれらの科学的な要素を、我々は持つことができないので、現在持っている手段でだけでも、ポルトガル語教育の新しい方針を刻みつけることを、すぐ始めることが必要であろう。

そこで、次の点を考慮することが非常に重要であると考ええる。

1. ポルトガル語の教員を、常に移動させ、彼等に第二の言語を教えるためのより良い準備を与える（言語的及び教育心理的養成）。
2. 教員達が、言語的研究を始められるよう訓練する。これは、できれば、

生徒の言語的産出に見られる主要な特色と困難な点のリストを彼等がつくり、その原因を探究できるようなものとする（付属参照）。このことは、教員達が働く地域に於ける生徒達の母語自体を知らなくても、少なくともその基本的特色を知るようにすることを前提としている。

この作業方針の中で、教員は、

- a) 全国的関心のある研究に参加すること。
- b) ポルトガル語教育に於て、日々出会う多くの困難な点に直面し、これを解決さえできるよう、良く訓練されること。

この素材は、教育省に送付され、そこで研究され、プログラムの再編成及び改善が考慮されるべきである。

3. 生徒達のポルトガル語での言語能力に対し、教員側が深くまじめで開放的な態度をとること、ポルトガル語は、多くの者にとって、母語とはなっていないため。

4. 共通語の機能、目的は、全国の社会の中で、すべての話し手の間にコミュニケーションを成立させることにあるという点を教員側が常に見失わないこと。

最後に、わが国に於ける二言語使用の状況を再考すべきであろう。

アンゴラは、二言語使用の国である（全国的状況）。住民の一定の割合の者が、二言語を使用している（個人的状況）。この個人レベルでの二言語使用の現実は広がりつつあり（ポルトガル語での教育普及）、この事実は、科学的見地からも、教育上の観点からも大きな富を意味すると考える。

実際、促進され、うまく方向付けられた二言語使用状況のみが、次のことを可能にしよう、

- すべての領域及び状況において国語を振興し、使用すること、
- ポルトガル語のより確固とした獲得と、その共通語及び国際コミュニケーションの言語としての使用。

付属

以下の教育用の小さなサンプルにおいては、生徒達の母語が、ポルトガル語の言語構造にいかに干渉するかを一例として示すために、Kikoongo語、Umbundu語、kimbundu語の幾つかの特色だけを出発点としてあげてみた、これにより生徒達がおかす誤りを決定づける原因について我々が考え、それを知るように導くであろう。ここでは、上記の言語の音韻、形態—統語論的側面が考察されている。

1. 音韻的側面

a) S (Z) の発声。

Kikoongo語、Umbundu語、Kimbundu語を母語とする生徒達は、往々にしてポルトガル語の単語の母音間のS (Z) を無声子音で発声する、というのは、バンツー諸語では、Sの音素は圧倒的に(S)の音価を持つからである。

例

Kikoongo語	bwisa	(落とす)	buissaと読まれる。
Umbundu語	usenge	(森)	ussengueと読まれる。
Kimbundu語	kutundisa	(落とす)	kutundissaと読まれる。

このように、アンゴラの話者は、例えば、^{カーザ} casa の代わりに ^{カッサ} cassa、^{メーザ} mesa の代わりに ^{メッサ} massa 等と発音する者がいる。

この事実は、多分母語の干渉で説明できるある種の“誤り”となる。このような場合、教員がこれは正常な現象であるということを理解し、生徒がポルトガル語の母音間のSをZとして正しく発声できるよう繰り返し繰り返し、練習を続けさせる責任がある。

b) e と i の前の G [ʒ] の発声

e や i の前にある g が、けっして j と同じに発声されないこと。

例

Kikoongo語	n'longl	(先生)	n'longuiと読まれる。
Umbundu語	ongeti	(けち)	ongueti と読まれる。

Kimbundu語 pange (兄弟) panguéと読まれる。

子音Sで指摘された発音上の誤りが、Gについても起こり得る、というのはポルトガル語では、Gの次にe又はiが続くと、GがJと同じ音になるからである。a)で示唆した注意と気配りが、b)の場合にも当てはまる。

註：詳細については述べないが、バンツー諸語は、様々な気声音によって特色付けられている。その具体例やその他の発音に関する現象(様々な音の発声)から始めるのが興味深いであろう。

2 形態—統語論の側面

バンツー諸語の形態変化のカテゴリーは、ポルトガル語のそれに対応していない：

a) それらの言語の最も明白な特色のひとつは、接頭辞の存在であり、ポルトガル語の語尾の変化で数を示すのとは逆に、それらの単語の数を、そこで表すのである。他方、バンツー諸語の接頭辞は、単語の品詞を表わしたりもする別の形態変化の側面も持っている。

接頭辞は、従って、数や品詞を示し、これらの品詞に従って、その名目上の接頭辞が変わる。名詞は、単数、複数で変化しない語根の前に、変化する接頭辞をつけることによってつくられる。接頭辞によって単数か複数かを知らる訳である。

例

Kikoongo語

単数—salu	(仕事)
複数—bisalu	(複数の仕事)
単数—mwana	(子供)
複数—bana又はyana	(子供達)

Umbundu語

単数—uti	(樹木)
複数—oviti	(木々)

単数—utwe	(頭)
複数—ovotew	(頭の複数)

Kimbundu語

単数—nguma	(敵)
複数—junguma	(複数の敵)
単数—mutu	(人)
複数—atu	(人々)

これで、ポルトガル語が少ししか話せないアンゴラの話者が、どうして次のような類の“誤り”をおかすかが判る、

os pai [翻訳者註：osはポ語男性定冠詞複数、os pais =その両親の意、となるべきところ]、as casa [as casas 家々、となるべきところ、as はポ語女性定冠詞複数]、os pioneiro [os pioneiros パイオニア達]、as camarada [as camaradas 女性の同志達] 等々。

話者は、母語の論理の中で考えるので、ポルトガル語の冠詞を接頭辞と混同し、母語における接頭辞の機能を持たせることになる。

同じ理由で、名詞の後に複数の印をつけて一致させるという必要性は感じない訳である。

b) バンツー諸語では、所有格は、実際には性による語尾変化を持たない。従って名詞の性は、その所有格の形に影響しない。

例

Kikoongo語

same	(私の父)
ngwame	(私の母)

Umbundu語

papa yange	(私の父)
mama yange	(私の母)

Kimbundu語

tota iami	(私の父)
-----------	-------

mama iami (私の母)

meu mãe [minha mãeとなるべき、私の母]、minha pai [meu pai、私の父] 等々の“誤り”は非常に頻般であるが、これは、生徒の母語に於ては、實際上殆んど所有格の性を区別しないからである。

c) ポルトガル語を母語としていないアンゴラの話者が極めて頻般におかす間違いは、次のようなものである。eu brincas na rua [主語と動詞の変化が一致しない eu brinco …となるべき=私は道で遊ぶ]、elas come banana [elas comem…=彼女達はバナナを食べる]、você vais na escola [você vai …=君は学校へ行く] 等。

このような現象は、各自の母語に動詞の語尾変化がないことが原因になっているという説明も可能であろう。そこで、ポルトガル語の最も頻般に使われる〔動詞の変化の〕形が、限定されて真似られ、代名詞の主格と動詞の形を一致させることに困難を感じることになる。バンツー諸語では、人称代名詞接頭辞が、主語を決め、動詞と結びつく。主語を一致させる接頭辞である。

例

Kikoongo語

mono ngiele (私は行く)

ngeye wele

yandi wele

betu twele

benu lwele

bau bele

〔原文に解説がないが、多分二人称単数、三人称単数、一人称複数、二人称複数、三人称複数の順であろう。〕

Umbundu 語

ame ndipoia (私は話す)

ove opopia

eye opopia

etu tupopia

ene upopia

ovo vapopia

Kimbundu語

eme ngizwela (私は話す)

eye uzwele

mwene uzwela

etu tuzwela

enu muzwele

ene azwela

d) …の場所において、という状況補語と、…の場所に向って、という状況補語は、バンツー諸語の大部分においては、位置詞による区別をつけずに表現され、これらの言語は位置詞と呼ばれる特別な語形変化を用いる。この位置詞は、…の場所において、…の場所に向っての双方に使える。ポルトガル語に於ては、…の場所において、には前置詞のemを使い、…の場所に向って、には前置詞のa又はparaが相当する。

例

Kikoongo語

ngiele *ku* nzo (私は家にpara行く)

ngina *ku* nzo (私は家にem居る)

Umbundu語

eye wenda *konjo* (彼等は家にpara行く)

eye okasi *konjo* (彼等は家にem居る)

Kimbundu語

mwene wamuia *ku* bata (彼は家にpara行く)

mwene wala *ku* bata (彼は家にem居る)

註記：位置詞の接頭辞 *ku* が *em* (ポ語の前置詞…の中に、場所を表わす状況補語) を意味するとしても、動作を表わす動詞に使われると、また、

para…に向っての意味も持つ(…の場所に向って、という状況補語)。

従って、アンゴラの話者の中に、無意識の内に、…の中に、又は (and/or) …に向かって、という場所の状況補語を、ポルトガル語の中で使い、次のような例が見られるのは良くあることである。

—ele está na cidade. [彼は町に居る]

—ele vai na cidade. (=à cidade) [彼は町に行く]

—ele está na escola. [彼は学校に居る]

—ele vai na escola. (=para a escola 彼は学校に行く]

但し、アンゴラに於ては、この現象は言語干渉で説明できるとしても、この現象は他の国々でも起るので、更に研究が必要である。

e) 人称代名詞の直接又は間接補語

例

Kikoongo語

—yandi (彼に、彼女に、彼を、彼女を、彼・彼女へ)

—bau (彼等に、彼女等に、彼等を、彼女等を、彼等・彼女等へ)

Umbundu語

—u (彼に、彼女に、彼を、彼女を、彼・彼女へ)

—va (彼等に、彼女等に、彼等を、彼女等を、彼等・彼女等へ)

Kimbundu語

—mu (彼に、彼女に、彼を、彼女を、彼・彼女へ)

—a (彼等に、彼女等に、彼等を、彼女等を、彼等・彼女等へ)

これらの人称代名詞の補語(三人称単数及び複数)を観察すると、彼を、彼女を、にもまた、彼に、彼女に、にも同じ形が使われていることが判る、というのも変化しない形だからである。

そこで、アンゴラの人達は、頻般に、次のような構文をつくる：

eu chamo-o [私は君を呼ぶ] 又は vou chamá-lo [私は君を呼びに行く]

の代りに、eu chamo-lhe [私は君に呼ぶ] 又は vou-lhe chamar [私は君に呼びに行く]。

こういう構文が、アンゴラ全土に、既に広く一般化しているので、これがアンゴラのポルトガル語の特色といえまいか？

更に次の点に注目してみよう：kikoongo語、umbundu語、kimbundu語における直接又は間接補語人称代名詞は、ポルトガル語において、それが占めているのと同じ位置を占めてはいない、というのは、前者の諸言語では、ポルトガル語のように代名詞が動詞の後に置かれるのとは反対に、代名詞は動詞の前に置かれるのである。

従って、eu digo-lhe. [私は彼にいう] の代りに eu lhe digo というのを聞く方が多い。この構文が、アンゴラ全土に広く一般化しているので、これもアンゴラのポルトガル語の特色と考えられないであろうか？

例.

Kikoongo語

- Kwa *bau* lun'disi mbongo zame (eu *lhes* dei o meu dinheiro a guardar) [私は彼等に、私のお金をしまって置くように渡した。]

Umbundu語

- olusolo *lwa* kuvalula (a bale *te feriu*) [弾丸が、おまえを傷つけた。]

kimbundu語

- mwene wa *mu* bana.(ele *lhe* deu) [彼は彼女にあげた]

この三人称に関して起きることは、他のすべての人称で見られる。前記の a) と e) のケースは、アンゴラでは極めて頻般に見られるが、しかし、アンゴラだけの現象ではない。

アンゴラの場合、国語による干渉とするのは、とりあえずのひとつの仮説である。

ただ、このような現象が、他の国々でも頻般に見られるので、より厳密に研究することが必要である。

以上指摘したケースと例は、アンゴラのポルトガル語に非常に頻般に見ら

れる現象を、とりあえず取り上げてみたもので、実際の教育現場の経験から選んでみた。勿論、これらの例は、本稿に於ては、単に一覧表のひとつの例として出したもので、ポルトガル語学習のより適切で効率的なメソッドを選ぶことを可能にするためには、研究と記述、より深い分析が必要とされている。

〔有水博 訳〕

モサンビックにおけるポルトガル語の現状

ペルペトゥア・ゴンサルヴェス

モサンビックにおけるポルトガル語—公用語で、国家統一の言語—は、党及び政府が使っているコミュニケーションのための言語であり、更に成人の識字教育、学校教育及び文書による情報伝達に使われている唯一の言語である。

ポルトガル語に与えられたこのステータスは、独立解放のための武装闘争の時代からのものである。この点については、我が国の大学の学長フェルナンド・ガニャオン先生が、1979年10月に行なわれた『ポルトガル語教育に関する第1回全国セミナー』で行なった演説の一部を引用することとしたい。

「ポルトガル語を、団結のための要素として採用した歴史は、それ自体我々の中に差異があることを示すものであるが、1962年のFRELIMO〔モサンビック解放戦線〕創設と共に始まる。(…)〔当初〕三つの解放運動が統合されて、モサンビック解放戦線が創られたが、これらの運動の構成員であった男達の過半数は、コミュニケーションの手段としてポルトガル語を駆使してはいなかったし、使ってさえいなかった(…)過半数の者は、政治教育及び職業教育を受けた時使われていた英語とスワヒリ語を使っていた。モサンビック解放戦線の最初の数年間の間に、これらの言語は解放戦線内部のコミュニケーションにおいて、段々使われなくなっていく。第一回党大会(1962年開催)においては、言語についてのなんらの決議も行なわれなかったが、この党大会の記録をポルトガル語で記すことについては暗黙の合意があった、というのは、言語の相異がある中で、ポルトガル語が、皆の者に共通の分母とみなされたからである。

皆が同意した作戦用の言葉として使われ始め、そのため達成された統一を

危険にさらすような言語上の決定をすることが避けられたほか、敵をより良く知ることを可能にする道具となった(…)

すべての政治責任者やすべての活動家が、ポルトガル語で話し、表現するための努力を直ちに始めたが、これは英語しか使わない教育を受けたモンドラーネ大統領からしてそうであった。⁽¹⁾

この理由に加えて、ポルトガル語が『科学的知識の伝般』⁽²⁾により適した言語とみなされたというもうひとつの理由がある、というのは、モサンビクの諸言語が、技術・科学用語の面で持っている遅れ⁽³⁾の影響をこれ以上受けることなく、『すべての人民がその科学水準を高めることを確保する目的』があったからである。

1975年6月のモサンビク独立当時の植民地体制を少しでも知れば、住民のわずか少数の者だけが、ポルトガル語を自在に話せたという結論が引き出せよう。この少数の者のうち、極めて限られた数の人達だけが、これを母語としていたのである。

この当時の統計を我々は持っていないが、識字率に関するデーターだけはあり、そこから間接的に、モサンビクにおけるポルトガル語を話す人の数についての結論を引き出すことができよう。1977年の公式統計⁽⁴⁾によれば、モサンビクには約90%の文盲がいた。

ポルトガル語への主たるアクセスの手段は学校であったことを考えると、独立当時、ポルトガル語へのアクセスの手段を持っていた者の数は、10%を超えなかったであろう。

独立後8年経過した今日、1980年に行なわれた住民一般国勢調査のデーターは未だすべては公表されていないとはいえ、この状況は少ししか変わっていないといえよう。既に公表された幾つかのデーターからすれば、住民の少なくとも26.5%が、ポルトガル語へのアクセスを持っていたと推定された、というのは、このパーセンテージが、学校へのアクセスを持った住民の割合だからである。この数字は、文盲—都市部において—が、正規ではない状況の下でポルトガル語を習い、話せる者がいることを認めると、多分もう少し高くな

ろう。学校教育を受けた者（約262万人）のうち、181万529人が小学校も終えず、48万839人が初等教育修了、12万9482人が技術又は中等・高等教育を修了している。しかしながら、これらのポルトガル語を話す可能性のある者の言語能力の段階に関するデータが存在しないので、あくまで仮定の段階ではあるが、四学年修了（ポルトガル語修得の最低必要基準を満たす水準）以上のすべての者を、ポルトガル語の話者と認めることができるであろう。先に示した数字に当てはめれば、モサンビックには、少なくとも61万321人のポルトガル語を話す住民がいることになる。

これらの者の過半数にとっては、ポルトガル語は第二の言語であり、殆んど全員が、母語としては、バンツ系言語をもっている。

以上述べたことから、モサンビックでポルトガル語を話すということは、二言語使用の問題を引き起し、第二の言語を習得するという問題を投げかけることを意味することが、容易に判るであろう。

この観点からすれば、モサンビックにおけるポルトガル語の状況について組織的な分析が初めて行なわれ、またこれが唯一のものであるが、それは前述の1979年に行なわれた『ポルトガル語教育第一回全国セミナー』であった。この時は、そのタイトル自体が示すように、言語学的な分析ではなく、ポルトガル語に関連した国民の生活の様々な部門、即ち識字、教育及び情報を中心とした現状評価についてのものであった。

要約した形ではあるが、こゝでポルトガル語をコミュニケーションのための唯一の言語として選んだことが、最も問題となっている部門、即ち成人の識字教育と初等教育部門に関連した幾つかの側面を明らかにして置くことゝしたい。容易に推定されるように、これらの二つの部門は、ポルトガル語を知らないか、良くは知らない住民がその過半数を占めている部門である。

識字教育のレベルでは、教材そのもの（ポルトガル語の教育／習得のためというより、むしろ識字教育を受ける者の政治教育と、書くための記号を教えることを目的としていた）から生ずる問題であれ、また識字教育を行なう者自体のポルトガル語力の問題（『その言語上の問題は、識字教育を受け

る多くの人達の問題とそれ程距ってはいなかった』⁽⁵⁾）であれ、そこから生ずる幾つかの問題点が、当時指摘されていた。1979年に報告された状況は、1983年まで続いた、というのは、この年になって初めて、新しい教材と、識字教育のコースの新しい組織化が実施に移されたが、こゝでは、母語による識字化の前段階の最初の実験が行なわれることになった点を強調すべきである。

初等教育については、ポルトガル語教育の目的とプログラムが（これは82年の末まで引き続き実施された）分析の対象となったが、前者は、モサンビックの言語上の問題と切り離されて扱われ、後者は『ポルトガル語についての研究で、その実践についてのものではない話し言葉及び書き言葉の教授法の概念』として考察された。⁽⁶⁾

初等教育のレヴェルの教師については、国の必要性に応じた大きな努力が払われ、75年から79年にかけて、2千人以上の教師が養成された。しかしながら、これらの教師のレヴェルは比較的低く、また1980年の統計によれば、その70%が6学年に満たない学校教育を受け、いかなる職業訓練も受けていない。

これらの要因—現存の教材及び教師養成のレヴェル—が結び付いて、ポルトガル語教育に関しては、初等教育が終った段階でも、基本的には、低い言語運用能力がその特色となっている状況をつくり出している。

しかしながら、今年是新教育制度が実施されることに伴い、今まで指摘した問題のうちの幾つかが、より適切な回答を見出すであろうことを信じさせるに足るものがある。初等教育の最初の数年間におけるポルトガル語教育のレヴェルについては、事前の言語学的（又は社会言語学的）調査が行なわれていないとはいえ、第二言語の教授法の観点から、口頭による表現により多くの時間を割く配慮が見られる。同様に、経験に基づくものとはいえ、言語的に最大限暫進的に進度を高める定形をつくらうとする意図が見られる。

モサンビックにおけるポルトガル語の状況についての厳密に言語学的観点からの研究は、未だ始まったばかりの段階にある。

モサンビックにおける言語学的分析は、無数の調査の可能性を示しているが、我々が利用できる技術的・人的資源を欠くため、これを実現できる状況にない。この面でのイニシャチブは、まだ数少く、調整されておらず、殆んど奨励されてさえいない。この状況は終りに近づいているという印象は持っている。多くの要因が、この方向に寄与している。ポルトガル語が唯一の習得言語となっている教育の大衆化は、初等教育の多くの教師の側のポルトガル語の弱い運用力から、初等教育（その後の学年でも）を受けている子供によるポルトガル語で行うコミュニケーションが稀れである一農村地帯又は郊外においては実際学校又は教室内だけに限られる一状況まで様々な問題をつくり出している。

言語上の問題の研究は、従って単なる知的訓練の問題として対処されなくなりつつあり、生徒がポルトガル語でコミュニケーションをすることが、多くの場合非常に難しいという学校教育の不成功に、あらかじめできる限り対処できるようにする必要性に関するものとなっている。

我々の努力が、調査の実施よりも、教育の課題に優先的に集中されていた過去数年から、今我々はシステム化されたデーターや、既に調査され、知られている言語地域について、より疑問点や欠かんを報告すべき段階にある。

その重要性や必要性を意識しているとはいえ、我々は未だモサンビックのポルトガル語の口頭表現データー収集を行っていない。

かつて調査計画があり、最初の数歩が踏み出されさえしたが、1978年に一連の要因により、調査が放棄された、その要因の中では、どういうタイプの調査結果を得ようとしているのかの基本指針がなかったこと、この計画に専念する人員がいなかったことが大きい。

同様に、既に述べた二言語使用の問題があるにもかかわらず、ポルトガル語と少なくともバンツ系の一言語とのシステムティックな対照言語学的調査を行う条件もなかった。この調査は、（もし実施されれば）母語のポルトガル語表現への言語干渉を特定し、それに対応した教育上の対処法を確実に容易にしたであろう。

これらのものや、その他のこの種のデーター・ベースは、教育者や教育プログラムの計画者の仕事を大いに助けるであろうし、ポルトガル語修得のプロセスについて、より現実的で、ダイナミックな視野を持つことを可能にするであろう。

幾つかのシステム化と分析の研究に供された既存の少ない情報は、殆んどポルトガル語の文法構造に関するデーターしかもたらしていない。

1977年に、ツォンガ (Tsonga、ロンガとシャンガナの方言) を母語とするマプトのある学校の四年生40人の作文120コーパス (合計約1万2千語に相当) が集められた。モサンビクのポルトガル語の基範となるべきものについてひとつの基準がなかったため、ポルトガルの公式基範に照らして、その誤りが特定された。

このようなコーパスは、『モサンビクに於けるポルトガル語修得のプロセスでおかされる誤りの一覧表』を我々に示したことにはならないであろう。この調査は実験的、例示的な性格を持っている。⁽⁷⁾ しかしながら、その言語的予見からしても、また教育実践上からも、そこに集められたデーターの多くは、モサンビクに於けるポルトガル語の変容の傾向のひとつのサンプルとして見なすことができる。

第二の言語を習得する過程の中で、人々が規範的なものからはずれることは、極めて自然なことであることを我々は知っている。モサンビクのポルトガル語の状況を個別的に特色付けているものは、特定の現像の多さである (...) そして、それが社会制度としてのポルトガル語に影響を及ぼし得る。ある個人が、第二の言語を習得する過程の中で、通常形成される移行期を『暫定的言語』又は『中間言語』と呼ぶが、モサンビクに於ては、これがそのまま安定化し、集団の新しい規範となり得る。⁽⁸⁾

実際、ポルトガルの定形的規範からはずれたものが、その大衆的性格と、比較的安定化することにより、ポルトガル語教授上、訂正、克服すべき単なる『誤り』としてではなく、モサンビクのポルトガル語の変種として、既に扱うことができるかも知れない。

現時点では、モザンビークのポルトガル語を区別するすべての特色を、正確に特定することはまだできないとはいえ、文法構造のレベルでは、変化があった分野を探知することができる。この変化があった分野とは、基本的には、前置詞及び人称代名詞の使い方、補語及び関係詞節の作り方、並びに性、数及び人称の一致に関する部分である。

前置詞については、a、em 及び de が最も変化を受けていることが判る。分析されたコーパスの打ち、この使用法の誤りが、全体の誤りの83%を占めた。前置詞のa はその中でも、最も変化を受け（全体の43%）、前置詞のem と取り替えられたり（特に場所の表現で "fui na escola" [翻訳者注：ポルトガル語の前置詞の a は英語の前置詞の to、又は at に相当、他方 em は in, on に相当。fui na escola の na は em+定冠詞 a の短縮形=I went in the school ; to the school という代りに] "cheguei em casa [I arrived in home]、特に "estar a" タイプの^{ラテン}迂言法においては、これが脱落する。前置詞のemは、他の前置詞(a,de,para,com)と重複して用いられたり、特に関係詞節"no dia que"のように脱落する傾向がある〔no dia em que = in the day in which の emの脱落〕。前置詞の de [of, from に相当] は、脱落したり、ある時は前置詞 em にとって替わられ、また "mudaram daquela professora [=mudaram aquela professora 彼等はあの先生を交代させた] のように余分に使われる。

人称代名詞に関しては、最も特長的な点は、その脱落であり（誤りの55%）、三人称の直接目的格又は再帰代名詞の役割をはたす時、最も頻般に起る。人称代名詞が置かれる位置についての変容は、このデータでは予期されていたより、はるかに頻度は少なかった。しかし、全般的に、動詞の前に置かれる傾向がある（ブラジルのポルトガル語で起きるように）。

従属節の導き方については、使われた発生率の64%が "O ladrão disse que desculpa" [ドロボウは許して下さいといった *desculpasse* 接続法過去となるべきもの]、"Chegou a dizer que não tens vergonha" [恥知らずとまでいった você não tinha となるべき] 式の構文で、従属節を導く que

があるにもかかわらず、それが〔従属節の〕直接話法の構造を変えていない。

一致については、数についての一致を欠く場合が目立ち、間違いの79%が、複数の代わりに単数を用いるきわ立った特色があることを指摘することが重要である。この現象は名詞句 "Os caderno [ノートの複数 cadernos になるべき]" でも起きるが、大部分(40%)は動詞に関するものである("Os granizos começou [雹が…し始めた。começaram になるべき]"、"populações que costuma […するのに慣れている住民、costumam になるべき])。

動作を起す人との一致では、最も安定した特色(75%)として、一人称の代わりに三人称を用いるものがある("eu esperou" [私は待った esperei であるべき])。

ポルトガル語の言語システムの文法構造のレベルにおける別の分野も、同様に影響を受けた。例えば、冠詞の脱落("tinha cortado cabelos [髪を切っていた tinha cortado os cabelos であるべき])、不正確な強調構文("é pela primeira vez nós a roubar [我々から盗むのは初めて?])、等。

以上が、このコーパスからだけではなく、先に述べたようにモサンビクのポルトガル語の特色とみなすことができる結論の幾つかである。しかし、これらの様相について、未だどういう態度をとるか決定されていないので、これらのすべては引き続き誤りと見なされており、変種とは考えられていない。

このデータのほかに、誤りの分析という視点の下で、1982年、農村部一ヶ所と都市部一ヶ所を含む社会言語学調査(口頭による)が行われたことを、こゝで言及すべきである。このコーパスは、4年及び5年の学歴を持つ小学校の教師及び識字教育家に対して行なわれた187件のインタビューの集積で構成されている。この調査の幾つかの結果は、1977年のデータ収集のものと一致している(人称代名詞及び前置詞のレベルで)。

こゝでは、以前の調査で扱われなかった分野、即ち、敬称の言語システムにおける動詞の二人称、三人称の用法についての結論に焦点を絞ることにす

る。

『得られた結果は、一般に、二人称より三人称がより使われる傾向があることを示している。二人称は、目下の者と目上の者、子孫と尊族、若い者と年長者の関係を表すようなコミュニケーションの場面において、最も高い頻度で使われる。他方、三人称は、二人称の使用が多くを占めても良いような状況、即ち親族関係（兄弟、息子）又は雇用関係（同僚、使用人）を表わす状況に於ても、同様に使われている。

(…) 調査の結果によれば、二人称が客観的には排除される特定の状況（住居区の長、又は書記に対する服従の関係）下に於ても使われるという事実により、コミュニケーションのレベルでは二人称を三人称から区別する基準が相当あいまいになっていることが示されている。これらの状況下では上・下関係は、敬称の代名詞（Senhor あなた）、呼格（Sr.Diretor）または、呼称（o Senhor Diretor）で区別される傾向がある。二人称と三人称の間の対立があいまいになる傾向により、社会的関係は、動詞のレベルで表現されるよりも、代名詞の敬称や呼格、呼称で表現されることがより好まれる傾向にある。こゝから、規範によってあらかじめ定められた呼格と動詞の間の形式的連帯性（マルティネによれば、余剰性又は非連続シニフィアン）が省かれる傾向が生ずる。即ち呼格の Senhor が、例えば二人称の動詞を必要とする場合など。⁽⁹⁾

本稿で既に言及する機会があったが、音韻論及び語彙・意味論のレベルからの組織だった研究は未だ無く、たゞ散発的なデーターが存在するのみである。この最後にあげた分野に関しては、単なる一例として、こゝに幾つかのケースを紹介したい。

既に植民地時代から、入植者自身の日常的言語の中で用いられていたモサンビックのバンツ系、又はその他の起源から生じた一連の言葉があった。例えば、『machamba』（耕やされた土地）、『matabicho』（朝食）、『capulana』（伝統的な衣装で用いられる布）等である。

しかし、J. Piel がブラジルのポルトガル語に対してつけた用語が便利

ので、これを適用して『形の上でのモサンビック語法 (moçambicanismo de forma)』と、『内在的なモサンビック語法』と呼べるようなものに、焦点を当てゝみたい。前者の例は、動詞の派生語のレヴェルで豊富に現われる。例えば『bichar』(fazer bicha 行列する)、『barulhar』(fazer barulho うるさくする)、『desconseguir』(não conseguir 獲得できない)。この最後の例の『des-』という接頭辞は、他の動詞にもつけられる傾向がみられる。『内在的なモサンビック語法』は、モサンビックの新しい社会組織に関係しているように見える。例えば『criança 子供』のことを『continuador 後継者』と呼ぶ(革命を継続するのは子供だから)、また、組織の上位のポストを占める誰れかを指す時『estrutura 機構』を使う。

この報告を終えるに当たり、今迄述べてきた中で、ひとつの側面が明白になってきたことを期待するものであるが、それは、モサンビックに於けるポルトガル語が持ちつつある根本的にダイナミックな性格についてのものである。わが国の歴史的-社会的プロセスと、その中でポルトガル語が与えられているステータスは、一つの“状況”として叙述することを実際上は不可能にしている。学校教育を受けた人口の急増(1973/74年の小学校の生徒数66万6,500から、1982年の133万3050人へ)、ポルトガル語に対する言語としての態度の変化(入植者の言語から、人民レヴェルでの、コミュニケーションに必要で、社会的プレスティジとみなされる言語への変化)、これらのことが、その他の要因の中で特に、本報告の題名を『モサンビックにおけるポルトガル語の現在の動向』とした方が多分良かったような変化をポルトガル語にもたらす要因となっている。

(註)

- (1) "O Papel da Língua Portuguesa em Moçambique".

出典「モサンビックにおけるポルトガル語の役割」

- (2) "Comunicação Final" in. "I Seminário Nacional sobre o Ensino da Língua Portuguesa".

「ポルトガル語教育第1回全国セミナー」中の「最終報告」

(3) Idem.

(4) "I Seminário Nacional de Informação".

「第1回情報についての全国セミナー」

(5) "Papel da Língua Portuguesa na Alfabetização" in. "I Seminário Nacional sobre o Ensino da Língua Portuguesa".

「ポルトガル語教育第1回全国セミナー」の中の「識字運動におけるポルトガル語の役割」

(6) "O Ensino da Língua Portuguesa-Programas e Metodos". in. "I Seminário Nacional sobre o Ensino da Língua Portuguesa".

「ポルトガル語教育第1回全国セミナー」の中の「ポルトガル語教育—計画と方法」

(7) A Língua Portuguesa em Moçambique-Elementos para uma análise de erros(no prelo).

モザンビークにおけるポルトガル語—間違いの分析のための要素 (印刷中)

(8) Idem.

(9) Pesquisa sociolinguística do Português falado em Moçambique (não editado).

モザンビークで話されているポルトガル語の社会言語学的研究 (未刊行)。

[有水 博訳]

ギニア・ビサウにおける ポルトガル語の現状と展望

マリア・アウグスタ・エンリケス

私は社会事業の協力者です。しかし、私がここに来ているのは、社会事業の協力者としてではなく、すでに8年半成人の教育に取り組んでおり、そしてそれ故に、むこうで私達が抱えているこの問題と強く結びついているひとりとしてであります。発表を続ける前に、私はこの学会に参加するというこの機会が与えられたことに感謝したいと思います。というのは、私たちが考えるところ、ある意味で相補的な多くのさまざまな貢献となる発表によって、私達がポルトガル語教育においてかなり前に直面し、そして真剣に関わっている問題に対する新しい解決案を求める大きな助けになるであろうからです。

他方でもまた、ここに私達が参加することは、ある意味で、私達がある限られた現実の中に潜んでいるとき、その現実から離れることがいささか困難であるという事実から、どれが私達の問題であるかについて、力いっぱいので声で再考する助けとなります。それから、パウロ・フレイレ (Paulo Freire) 教授が述べていたように、私達が現実を記号化し、そして解読をするとき、私達が有しているとは考えていなかった新しい次元に再び出くわします。

ここでギニア・ビサウを代表すべきだった人は、私ではありませんでした。その代表すべきだった人は、ヴァスコ・カブラル (Vasco Cabral) 氏でした。彼は今までにこちらに何度か滞在しました。ただ、彼が私達の国において従事する仕事のため、いくつかの会合の準備をする必要がありますので、戻らねばなりませんでした。従いまして、私が自分の国を代表することは、大変な名誉です。私は、みなさんにもし私の発言があまり学問的なものでないとするればお許し願いたいと思います。私が体験から得た知識はまったく平俗なものであり、そのため私の言葉はその知識と同様のものです。私にここ

で話す勇気を与えるのは、私がギニア・ビサウはアフリカにおけるポルトガル語教育の状況、問題に関して述べるべき言葉を有していると思うということです。私達は、豊富な、かつ、同じ地域で働いている他の同僚と共有すると考える体験を有します。そしてまた、私達は他の人々の体験でもって学ぶことができます。私はただそのことのみによってここで話す勇気を得ます。なぜなら、どうやらかなりあがってさえいますので。私はこの種の会合で話すことに慣れていないのです。

初めに、私は私達の国における言語上の総体的問題について話します。多かれ少なかれ、ギニア・ビサウをいくらかでも（行ったことがあって）知っている人は、その国が非常に大きな言語的多様性によって特徴付けられるという知識を持ちます。私達の国においてポルトガル語が公用語です。クレオールも用いられ、これは媒介言語の役割を果たします。（このクレオールは、カーボ・ヴェルデにおいて話されているクレオールととてもよく似ています）。ここで私が言いたいことは、クレオールは、ある決まった歴史的時期に、より密接に私達の国民を統一するために役立った要素の一つであり、そして、私達がお互いにとてもよく理解し合っているということです。そして、多数のアフリカ諸語が存在します。例えばマンディンガ語（mandinga）とジャカンカ語（jacanca）のようなマンデ族（mandé）の言語がその一例としてあり、そして、例えばフラ語（fula）、バランタ語（balanta）、マンジャカ語（manjaca）、マンカニャ語（mancanha）など他多数の西部一大西洋沿岸の言語があります。

1979年に私達の国においてなされた人口と住所の一般国勢調査によると、以下が私達の国における言語リストです。言語の話者について、11.1%の人がポルトガル語を話します。そして、ポルトガル語を話す人々のうち、0.15%の人々だけがポルトガル語しか話さない人々です。人口の44%がクレオールを話し、そして、クレオールを話すこれらの人々のうち、4.57%の人々はクレオールしか話さない人々です。また、バランタ語については、私達の人口の24.5%がバランタ語を話し、そして、14.94%がバランタ語しか話さな

い人です。フラ語については、20.3%がフラ語を話し、そして、人口の17.6%が私達の国においてフラ語のみを話します。それから、他の率があります。例えば、マンディンガ語は10.1%、マンジャカ語は8.1%、ペペル語 (pepel) は7.2%の話者を有します。これが、いわば、私達の国における主要言語とみなされるグループです。

それから、私達には2言語併用の状態が存在します。つまり、ギニア・ビサウは2言語併用がかなり日常的で、それには例えばポルトガル語とクレオール組があり、人口の2.29%を数えます。

ギニア・ビサウにおけるポルトガル語事情のもう少し先のおおよその見通しを示してみます。さて、ポルトガル語は、あちらで基本的に文書——本、雑誌、さまざまな公的な伝達、つまり政党によって、政府によって書かれたものを通して——において、そして、教育において用いられています。しかし、もし私達が私達の国、従いましてギニア・ビサウはまだ基本的に口頭の音声によって活動している国であることを考慮するなら、いかにポルトガル語が大部分の人口にほとんど浸透していないかということが理解されるでしょう。私達の国はいまだ基本的には口頭の言い伝えによって記憶を行う国なのです。それ故、ポルトガル語が文書において用いられるとき、私達の国民の基礎的教育によってのみ、私達にとって重要なそのポルトガル語を実際に広めることができるのです。教育においては、ポルトガル語は、現在、例えば教師の養成、書記局、行政要領で用いられているのと同様に、初等教育、中等教育、職業・技術教育における学科として、そして、知識の伝達手段として用いられています。もっとも、初等教育、そしてさらにそれを補う上級の教育の場合でも、いつもは話さないため、たびたび、わかりにくいある概念を生徒がたやすく理解することができるようにクレオールに換えますが。そうすることは、ポルトガル語があまり普及していないという理由によるだけでなく、仮に言語は国民が考え、感じ、生きるある決まった様式を伝える記号であると考えたと、私達の国のアフリカの人々が世界を見るその見方は、ここでの見方と少し違っていると考えるという理由にもよります。それ故、

異った様式で思考を体系化するので、この言語に合てはめると、自分の思考を表わしにくいのです。

教育面において私達はポルトガル語に関する最大の問題があることを感じ取っています。すなわち、実際に言語のリストからわかるように、ポルトガル語も人口の圧倒的多数にとって外国語であるという事実を考えるなら、ポルトガル語を外国の言語（もっともこれは本当のことではありますが）、そして公式の言語（それ故、公用語という重要性を持ちます）として教えるという問題です。初等教育と読み書きの教育におけるポルトガル語教育は、重大な問題を引き起こしています。というのは、ポルトガル語が母語であるかのように教えられているからです。私達は第2言語、すなわち、外国語を教える方法、技術をまだ利用していません。他方、初等教育とそれを補う上級の教育の教師でさえ、この言語に十分には精通していません。それ故、生徒があることやあるいはまた別のことを理解し、または、吸収するのが難しいとき、言葉が思いのままにならないという理由によっても緊張し堅くなります。そのことは、ポルトガル語教育にとって、とてもとても大きい障害です。その点について努力が大いになされています。独立後、私達は教師の養成に非常に大きな投資を行ってきました。しかし、他のいくつかの障害があります。つまり、その一つは、すぐ後でも述べますが、ポルトガル語がギニア・ビサウにおいて非常にわずかしかな用いられていないということです。私は中学校にいた何人かの先生とすでにここで会う機会に恵まれました。その方々は、私のために証言することができるでしょう。

実際、私達の国において、うちとけた場合で、友達と、公の場でクレオールが話され、家庭で、そして、友達と母語が話されます。私達には、例えば、読み書き教育の実情が存在します。私達は、そのことを確認するいくつかの調査をしました。実際、読み書きのできない人は、だれもポルトガル語を話しません。読み書きのできる人々の間でさえ、文学的環境や学問的環境においてのみ話されます。それでは、どういうことが起こるのでしょうか。ある言語を学ぶことは、ある意味において、私達の国民が未だ基本的に口頭の音

声による文化の下で生活しているために必要なことではありません（そのことは、私達がポルトガル語を未だ事実そうである外国語として教えていないという事実と関連しています）。私達は、移民たちに関し、その人々が外国語の読み書きができるということを知っています。しかし、そのことは、彼らがその外国語での一連の情報に満たされており、そして、それ故に学ぶ動機を持つという環境において起こるのです。しかし、人々が文書以外で実際にはその言葉を利用しない環境において、その学ぶ動機は非常に希薄になります。さらにその上、能力の水準が極めて低い教師の下で学ぶのです。

そのことは問題をだいたいにおいて悪循環させます。解決することは困難です。私がこちらでのこの会議において言うことは、閣僚が審議する会合においてでもほぼ基本的にはクレオールか話されるということです。これはむなしいことではなく、戦いの遺産です。こちらでの本学会において私達が開いたこうした会合の一つで、もし私の誤りでなければひとりのモサンビークの同志が、別のタイプの植民地化が実際にはあって、そのことがいわば植民地化をする言語に異なる影響を与えたということを話していました。ギニア・ビサウは、人々がきっと思い起こすように、例えばアンゴラやモサンビークとは非常に異なる植民地化を経験しました。あちらに行って、そして何世代にも渡って住み続けるようなポルトガル人はいませんでした。そのようなポルトガル人は存在しませんでした。あちらに立ち寄ったポルトガル人たちは、一般に商人で、いくらかの期間滞在し、そしてその後帰りました。そして、それ故に人々は親しくならなかったということが起きます。他方、クレオールが現れたという事実もあります。（クレオールがいつ出現したのか私は知りません。そのことについては、クレオールがカーボ・ヴェルデ、サン・トメ、ギニア・ビサウにおいて現れ、そして、例えばアンゴラとモサンビークにおいて現れなかったということによって、多くの論争があります。そのこともまた私は答えることができません。知りたいと思います。しかし、本当のところは、事情が実際にとっても異なり、理由を見出すのは困難です。例えば、カーボ・ヴェルデにおいてクレオールとポルトガル語の2言語併用の

状況がすでに完全に存在します。サン・トメにおいても存在し、私はそのことを知っています。しかし、ギニア・ビサウにおいて、クレオールは普及はある意味でポルトガル語が普及することを難しくしています。私は理由をとても知りたいと思います。しかし、これもまた私は知りません。多くのことを私は知りません。

今の問題に戻って、ポルトガル語教育はその言葉を利用することがとても少ないという事実によってこのようにとても難しくなっています。国家解放の戦いは、クレオールを一致団結における私達の言語として大いに普及させました。クレオールは、以前は商業において利用されていた言語でしたが、次第に広い範囲で利用されるようになりました。

ギニア・ビサウにおけるポルトガル語の現状について私が知っていることについての非常に簡単な記述をいくらか行いました。そして、続いて私が一つの学会発表をするのではないということを述べたいと思います。つまり、私にはいくつかの議論の材料があり、それを通してギニア・ビサウにおけるポルトガル語に関して私達が有する問題、すなわち、ギニア・ビサウにおけるポルトガル語の総体的問題が何かについての一つの全体像を示そうと努めています。そして、私は、どのようにしてその問題が生じたのか知らないためではなく、私達がここで学会発表をしなければならないことを知らされていなかったために、学会発表をいたしません。それで、2日前に私はギニア・ビサウにおけるポルトガル語の現状について話す必要があると言われ、私の持つ経験と同志であるヴァスコ・カブラル氏の協力で、ここで述べると興味をひくと考えた点をだいたい述べようと努めました。従って、私はお許しいただきたいのですが、これは、ただ私が考えている簡単なメモ程度にすぎません。

論点に戻って、ギニア・ビサウでの見通しについて述べますと、私達の国においてポルトガル語の拡張とともに生じた困難に打ち勝つために私達が必要と考えることは、初めに外国語としてポルトガル語を教育する技術と方法の導入を通してポルトガル語教育を改善すること、そして、アフリカの言語

の研究を促進すること（もっとも、それには少し驚くでしょう。なぜなら、アフリカの言語の教育について話されるのを聞くと、人々はポルトガル語にとっての死であろうと考えるように思われますから）です。私が自分の個人的な経験において思うことは、アフリカの言語の教育がギニア・ビサウの場合にポルトガル語にとって死に代わるものであるということです。まさに、言語は国民が世界に対して自分を位置づけ、あることとあることが関係づけられる方法が異なることを映しだすため、私達は、私達の言語ではない言語に近づくために、私達の言語から、私達自身の言語を意識することから、出発しなければなりません。そして、私達自身の言語を意識することは、私達自身の言語を書くことから、私達自身の言語を読み、書くことから、私達自身の言語を記号化し、読み解くことから始まります。それ故、私達がポルトガル語教育を改善するために私が考えるところは、ギニア・ビサウにおいて私達の大多数の人たちの言語の研究を促進し、文字と科学的に詳しく記述された文法と辞書をその言語に与え、そしてその言語の教育から出発することが基本であるということです。その言語から出発するとき、ポルトガル語との出会いに向かいつつあります。

さて、ポルトガル語は公用語としてみなされ、科学的知識を伝達する言語としてみなされ、国際的な意思を伝える言語としてみなされています。カーボ・ヴェルデの同志がここで述べたように、私達がポルトガル語に深い関心を持っているのは、私達が有するポルトガルとの歴史的関係によるのみではなく、私達が有するポルトガルとの特別な関係によるのみではなく、私達が有するアンゴラ、モザンビーク、カーボ・ヴェルデ、サン・トメ・エ・プリンシペとの特別な関係によっても、そしてまた、実際にポルトガル語が世界で最もよく話される言語の一つであるという理由にもよります。ユネスコ（UNESCO）によると、ポルトガル語は世界で6番目に話者の多い言語です。従って、もし私達が歴史的なきずなによってポルトガル語と接触しているならば、やはりポルトガル語は現実には私達にとって科学的知識に接近するために重要です。今、問題は、私達のような社会においてポルトガル語をどのよ

うに教え、そしてどのように普及するのかということであり、そしてそれは重大なことです。

その点は私が話しましたが、しかし、常には話されておらず、私の最も具体的な経験である読み書き教育の領域においてよく話される他の点があります。それは、私達が呼ぶところの（ただしこの呼称が最も適切であるかどうか私はわかりませんが）教養的環境の創造です。ポルトガル語は基本的に文書において（それがたとえ文盲撲滅に取り組むためにでも）利用される言語なので、私達が考えるところは、もし書物に近づくような、ポルトガル語に近づくようなポルトガル語を学ぶ人々が、ポルトガル語を学んだということによって利益を得ることを示すような具体的な事が実際に存在しないならば、方法は存在せず、技術は存在せず、私達に価値のあるような教師養成は存在しないということです。ここで、仮に、子供が学校へ行き、どれほど先生が良くても、どれほど学習計画が良くても、どれほど本、そしてその他すべてのものが良くても（たとえ私達がポルトガル語教育の最も程度の高い技術を持っていたと仮定しても）、その子供は家に帰り、自分の言語を話し、クレオールを話し、全く何の役にも立たないのです。そこで私達は2言語併用の教養的環境を創ることが基本であると考えます。なぜ2言語併用なのでしょう。それは、ポルトガル語である事柄を理解することが難しいときはいつでも、もしその人の言語でそのことが書かれていれば、その人は理解するであろうからです。従って、その人は自分の言語で書かれているものを読み、ポルトガル語で書かれているものを読み、そして、そこから、その人はポルトガル語を日ごとに学ぶようになるのです。そして、その教養的環境の創造は、移動図書館、農業の刊行物、壁新聞、読み書きができるようになったばかりの人たち向けの文芸作品を創ることによって実現します。また、私が少し前に述べたように、私達の考えるところでは、ポルトガル語の普及にとって、教育は私達にポルトガル語のより速くて効率的な普及を実際に可能にするものです。そして、そのことは、民主化することとつながっていなければならないでしょう。そしてその民主化というのは、私達の党の、私達の政府の、

私達の教育の選択、すなわち、それらがマスコミを通して影響を与えることです。

ここで、これらの新しい傾向の中で存在し、かつ、私達が1980年から有するようになった読み書き教育の経験であるところの出来事について、私は簡単に述べたいと思います。1980年において（ただし私は要約して話しますが）、私達が読み書き教育の運動を試み、それが技術的観点から失敗したということはみなさんが御存知の通りです。そして、その失敗の根本的原因是、ポルトガル語（つまりそれは私達の国の読み書きのできない人々が知らない言語です）で読み書き教育を行おうとした事実でありました。そしてその後、私達はさまざまな方法で試みましたが（なぜなら、私達はポルトガル語に関心を持っていますし、ポルトガル語は私達が利用すべき言語であると考えていますので）、外国語としての教育方法を導入するために外国語としての教育経験を有するさまざまな人々とさまざまな方法で接触しようとしていました（すべてをひっくるめて、私達はここで文学部と接触しました）、そしてパウロ・フレイレ教授が創造した私達の教育方法を外国語として教育する技術の導入によって質的に向上させようとしていました。ホテル業の場合のように、ポルトガル語を学ぶために理論上動機があるにちがいないであろう例外的状況においてでさえ、私達は大人が多くの困難、まさに多くの困難を持ち、そして成果がとても少ないということを確証したことがたまたまあります。

その後、私達は自らの計画を実行しました。それは、私達が呼ぶところの《母語における読み書きを教育する実験計画》です。その計画は、初めにクレオールにおける読み書きを教育することから着手し、そしてその後でポルトガル語における読み書き教育を行うことを見越しています。私は後にどのようにそれが進行しうるのかを明確に述べることができます。そしてまた、最初の成果を得るとすぐに他の能力を開発します。皆さんが確認できるように、クレオールでない他の言語を一つしか話さない人がとても多くいます。そうした環境において、ポルトガル語における後の読み書き教育とともに他のそうした言語における読み書き教育を試みます。

私達のそうした計画はどのように進行しうのでしょうか。私達は、基本的に、だいたい2学年に対応する読み書き教育の4つのレベルを考えています。第1段階では、母語の音節文字表が与えられます。第2段階では、その音節文字表の学習を強化し、ポルトガル語会話への導入もします。遊びがあり、模倣があり、短い表現があり、その中でその人の言語から出発して、その後、先生がポルトガル語でそれらの同じゲームがどのようになされるのかを教えるためにまずオリエンテーションを受けます。それから、文法構造と基本の最小限の語彙を定着させる練習があります。第3段階はさらにクレオール、あるいは他の母語とポルトガル語の表記の違いを十分に示しながらポルトガル語の音節文字表への導入と、会話の継続です。そしてそのようにして第4段階に進みます。私達は、第4段階において、人々が新聞に書かれていることを理解し、ポルトガル語で手紙を書くことができるであろうと考えています。私達はまだ実験の第3段階におり、その結果は私達にとって極めて興味深いものであり、私達は真剣にこれがポルトガル語教育の代案であると確信しています。それで、私達の言語から出発し、そして漸次ポルトガル語へ進みます。最初、会話に入ります。なぜなら、私達がしようとしていたことは、教育学的観点からは私は不合理であると思うある言語の会話から外国語の書記への跳び越しで、それは、そのある言語の書記からその外国語の会話へ渡り、それら2つの段階を焼き落としていたものでした。そして、実際に私達は、行った実験によって、そのことが私達の環境において適切ではないことを実証しました。そこで、私達が今行おうとしていることは、母語の書記、外国語の会話、そしてその後外国語の書記を導入することです。そして、現在まで私達が得た成果にとっても元気づけられています。

さらにまた、その私達の計画全体が農業の出版物を創ることと結びついていることを再び思い出してほしいのです。それ故、その農業の出版物（あるいは農業のものではないこともありえます。例えば、ある工場の場合にはその工場のものであることが考えられます）は、学ぶ人々が覚えた技術を利用する場を持てるよう、定期的に出版されるべきでしょう。ここでのこのこと

は、私が話したことですが、単に技術的観点からの一つの代案ではなく、一つの政治的選択でもあります。教育政策の選択であり、文化的な政策の選択です。それが私の言いたいことであり、みなさんの御静聴に感謝いたします。

[坂東照啓訳]

ポルトガル語ーギニア・ビサウのクレオール 文法構造におけるその存在

ベンジャミン・ピントーブル

《18世紀におけるフランス語、そして19世紀における英語の前に、ポルトガル語が、混成語 (lingua Franca)、ピジン、そして最終的にクレオールという形で最初の世界語であった、とマリウス・F. ヴァルコフ (Marius F. Valkoff) 教授が的確に述べている。》

今、我々はここでクレオールという語の起源やさまざまな意味について調査し、議論することが目的ではない（なお、こうしたことは、今年末までに出版される別の仕事において我々は詳しく行っている）。我々の目的は、そうではなく、アフリカ大陸西海岸のアフリカ言語に固有で、奥深い、そして本質的な特徴を保持しているギニア・ビサウのクレ奥ールの文字体系、音韻体系、アクセント法、形態法、統語法におけるポルトガル語の存在を明示し、かつ同時に例示することである。

1. クレ奥ールの文字体系と我々の慣習

ギニア・ビサウのクレオールにおいては、ポルトガル語と同じ音価を保存したアルファベットの文字が存在し、従ってその読みには何ら問題を引き起こさない。以下がその文字である：

子音字 : b, d, f, l, m, n, p, r, t, v, z.

母音字 : i, a, u.

子音字 g, k, s と母音字 e, o については、これらはギニア・ビサウのクレオールにおいて古ラテン語においてそれらの文字が持っていた音価を保

存した。

しかしながら、読みの問題を起こしうる文字が存在する。その原因は、そうした文字がポルトガル語において同じ文字が持つ音価と異なる音価を持つからである。我々の慣習（ただし、これは独断的な性格を何ら有していないものである）に従うと、無声硬口蓋閉鎖音を示すために *c* という文字を利用している。それで、次のように綴る。

cabi (*chave* 鍵) ; *ceru* (*cheiro* かおり) ; *cifri* (*chifre* つの) ; *cora*, 動詞 (*chorar* 泣く) ; *cur* (*choro*, 泣くこと 名詞。戦争、故人のためになされる儀式、という意味もある)。

j という文字は、我々に対し有声硬口蓋閉鎖音を示す。例：

jafal (ギニア・ビサウの魚の一種 ; エトマロサ・ドルサリス (*Ethmalosa dorsalis*)) ; *jemiu* (*gêmeo* 双生児の一人) ; *jiru* (*giro* (美しい) から、ただし、利口な、の意味を持つ) ; *jorsô* (*geração* 世代) ; *juju* (*joelho* ひざ)。

我々は、ポルトガル語の硬口蓋閉鎖鼻音 *nh* を表わすために *ñ* という文字を利用する。それ故、次のように綴る。

ñara (*senhora* (婦人) から) ; *ñeme*, 動詞 (かむ) ; *ñiñi*, 動詞 (笑う、歯を見せる) ; *ñopoti*, 動詞 (つねる) ; *ñu* (*senhor* (主人) から)。

nb, *nd*, *ng*, 等々の表記は軟口蓋閉鎖鼻音を表わす。次のような例がある。

nbarka, 動詞 (*embarcar* 船に乗せる) ; *ndianta*, 動詞 (*andar com* とともに歩く) ; *ngana*, 動詞 (*enganar* 誤らせる)、等々。

鼻母音については、ポルトガル語と同様に対応する口母音の文字の上に置かれるティル（〜）の記号で表わされる。

2. ギニア・ビサウのクレオール音韻体系

ギニア・ビサウのクレオール音韻体系にポルトガル語の存在が認められる。

2. 1. 子音において

閉鎖音：

	両唇	歯	硬口蓋	軟口蓋
無声音	p	t	c	k
有声音	b	d	j	g
鼻音	m	n	ñ	nd, nb, ng, 等々

狭窄音：

- a) 摩擦音：
- | | | |
|-----|----|---------|
| | 両唇 | 歯 |
| 無声音 | | f s |
| 有声音 | | (v) (z) |
- b) 舌尖顫動音： r
- c) 側音： l

すでにある種の文化を持つギニアのクレオールの話者においては、現代ポルトガル語から最近獲得した音素 *ʋ* と *z* が生じている。例：meza (mesa (テーブル) と並んで) ; kaza (kasa (家) と並んで) ; しかしながら、社会一般の発音は、kasa, mesa であり続けている。それでも、そのような音素—— *ʋ* と *z* ——は、数の体系で、すべての話者において実現されている。

duzi (doze 12) ; kinzi (quinze 15) ; vinti (vinte 20).

2. 2. 母音において

a) 強勢のある口母音：

i e o u
a

ボルトガル語が存在しているいくつかの例：pitu (peito 胸) ; mesa ;
matu ; puti (pote つぼ).

b) 強勢のない口母音：

1) 強勢のある音節の前の位置：強勢のある口母音と同じ枠組。例を示すと次のものがある。síkídu (起立して、《ser quedo (静止している)》から) ; metadi ; sabaku (sofádo わきのした) ; korsô (coração 心) ; kujer (colher, 名詞 スプーン) ;

2) 強勢のある音節の後の位置：(一般的には最終音節)、わずかに 3 母音：

i u
a

次のような場合である——puti, boka, pitu (apito, 名詞 警笛).

c) 鼻母音：この場合、5つの母音がある：

[illegible]

例：fĩ (fim 終わり)；tẽ (ter 持つ)；amañã, ermõ；ũtu (または untu).

書記の観点からは、鼻母音の場合に次のような表わし方が区別なく起こりうる：v + n,あるいはv + ティル (ゐ).

3. アクセントの置き方

ギニア・ビサウのクレオールにおいては、ポルトガル語とまったく同様に、強勢は音節を《目立たせる》ために非常に重要な役割を有している。注意すべき2つの場合がある：

A—実詞

a) 一般的規則として、ポルトガル語と実際のところ同様に、いかなる単音節の実詞も強勢を有する。以下が多くの中からの例である——po (pau 棒)；mõ (mão 手)；mis (mês 月).

b) 2音節の実詞の場合、一つの音節が閉音節 (CVC) であれば、最後の音節に強勢がある——korsõ；lugar (場所、ただし、耕地という意味もある)；naris.

c) 2音節の実詞の2番目の音節が開音節 (CV) であれば、最初の音節に強勢がある——barba, boka, kara, pitu。さらに、これらの実詞では、最初の音節もまた開音節であれば、アクセントに関与する《延長》が、母音に生じる——'pi:tu; 'bo:ka。そのような《延長》は最初の音節が閉音節であれば生じない——kosta, kurpu.

この《延長》は、特に西アフリカの言語において非常に重要な機能を有する修辭的、あるいは感情的アクセントと呼ばれるものと同一視できる。ギニア・ビサウのクレオールの場合、通常の強勢よりもっと上の高さ、振幅、強さがある。もし、クレオールの話者または演説者が意義素の意味を強調したければ、さらにもっとこの《延長》を強調し、その延長は、我々の見解では、

通常のアクセントを受ける音節にしか生じえない：

i 'pre:tu (é muito, muito preto とても、とても黒い(です))；

i 'be:ju (é muito, muito velho とても、とても古い(です)).

最もよく起こる例は、《強調の》アクセントをそこで有し、そして意義素の繰り返しの間には含まれる小辞oの例である：

bu pudi beju-o-beju (por mais velho que sejas 君がどんなに年老いていても).

d) ギニア・ビサウのクレオール の3音節から成る実詞において見られるのは、同じ《延長》の規則である。つまり、最後の音節は開音節であるけれども、強勢があるのは最後から2番目の音節である：sabaku, pontada, klarensa (luz, claridade 光、明るさ)。最後の音節が閉音節である場合、2つの強勢がある。つまり、最後の音節に第1アクセントがあり、語を《放つ》ために役立つ音節に第2アクセントがあり、これはいわば一種の《ランポリン》である：

'pekadur (pecador 罪深い人、しかしまた、そして特に、人、人々という意味)；'montiadur (狩人)；'kalerõ (caldeirão 大きなべ)。

ここでまた修辭的アクセントもあてはまる—— i garan:di (é muito, muito grande とても、とても大きい(です))。

B-動詞

クレオールでは、ポルトガル語とまったく同様に、動詞の不定形は常に最後の音節に強勢がある：buska, 動詞., kanta, 動詞。

次の図表は、ギニア・ビサウのクレオールのアクセントの全体系を示している：

1) CV(C) : *po, mǎ, mis*

2) CV-CVC : *naris*

CV-CV(C) : *limǎ*

CV-CV-CVC : *pekadur*

3) CV-CV : *matu*

CV:CV : *sa:bi* (とても、とてもよい)

CCV:CV : *pre:tu* (*muito, muito preto* とても、とても黒い)

CVC-CV : *kosta*

CV-CV-CV : *sabaku*

CV-CVC-CV : *balansu*

CV-CVC:CV : *garan : di* (*muito, muito grande* とても、とても大きい)

CVC-CV-CV : *karneru* (*carneiro* 羊)

CCV-CVC-CV : *klarensa*

4. 形態論 (いくつかの特徴)

4.1. 名詞類と名詞に付く修飾語

4.1.1. 実詞

クレオールの実詞は次のように形成される：

－ 1つの語根からか : *omi, minjer*;

－あるいは1つの語根+1つの派生 : *pekadur*.

ポルトガル語と異なり、ギニア・ビサウのクレオールは定冠詞を持たない。しかしながらこのことは、ほとんどすべてのアフリカの言語において確認される。例 : omi, minjer.

しかしながら、不定冠詞は、ポルトガル語に由来するものが存在する。しかし、それはただ1つの形式のみである :

ũ omi, ũ minjer;

ũ libru, ũ mesa.

クレオールに文法性は存在しない。しかしながら、意味論的観点からは、動物を示す名詞は男性に対する語根と女性に対する語根を持っている。以下が例である :

omi — minjer

rapas — bajuda

galu — galiña

一般的な規則では、クレオールの実詞は複数の標識をとらない。しかしながら、ときどき母音 *a*, *i*, *u* の後で複数の *-s* という語尾が見られる :

kasas, omis, fijos.

-r で終わる語は、複数の意味成分を強調するために *us*, あるいは *is* で複数をしばしば形成する。それで、次の例がある :

pekadur — pekadurus

minjer — minjeris

基数形容詞に先行される場合、クレオールの名詞は、教育のある話者においてでさえ決して複数の語尾 *-s-* をとらない。

4.1.2. 性質形容詞

ポルトガル語と同様に、ギニア・ビサウのクレオールには形容詞の級がある：

劣等比較級（劣っていることを示す形容詞に *ma* あるいは *mas* が先行する）：*ma pikininu* (*mais pequeno* より小さい)；

同等比較級 (*justa ku* —— 《*justo* (公平な)》に由来、同じ——；
または *suma*)：*Juse justa ku Pedru* (ジョゼはペドロと同程度の大きさである)；

優等比較級 (*ma, mas* —— この後者の形式は母音の前で好んで用いられる：*Jokĩ ma Juse garandi*；*Juse mas el*)。

4.1.3. 再帰代名詞、及び相互性

ギニア・ビサウのクレオールにおいては、動詞の行為が実行者に再び戻ることを示すために2つの形式がある。すなわち、*kabesa* あるいは *sintidu* (意味、想像) という語が使用される：

N fala na ña sintidu (私はまさにひとりごとを言った)；

I na ngana si kabesa (まさに彼自身が間違えている)。

同様に、ギニア・ビサウのクレオールは相互性を表わすために2つの方法

を持っている : *ũ-utru* (um outro ある別の), そして *kunpañeru* (companheiro 仲間) :

E na ngana *ũ-utru* (お互いだましている) ;

Bo na jusia ku *kunpañeru* (ある人々と別の人々とが議論し合っている).

4.2. クレオール動詞

4.2.1. クレオールの不定形

a) 一般的な規則として、クレオールの不定形は、ポルトガル語の不定形の語末音素 *-r-* の単純な消失によって得られる :

kanta < cantar 歌う

b) 語末の *-r-* の消失に加え、語中の 1 つあるいはさまざまな音素を削除することによって :

lanta < levantar 起こす

c) 語末の *-r-* の消失に加え、語中の 1 音素をただ換えることによって :

biska < buscar 探す
(buska と並んで)

d) 語末の *-r-* の消失に加え、語中の音素を換えることによって :

labanta < levantar 起こす ; tisi < tecer 織る.

e) 語末の -r- の消失に加え、語中のある音素を換え、そしてまた他の音素を削除することによって :

tisi < trazer 持ってくる

f) ポルトガル語の動詞の 3 人称単数形から、音素の偶発的な交替を伴って :

bai < vai 行く ; sai < sai 出発する ; bĩ < vem 来る.

g) 最後に、ギニア・ビサウのクレオールにはアフリカの言語に由来する不定形が存在する :

lanbu (つかむ) ; penbi (大切に扱う) ; banbu (背負って運ぶ).

この例証で、我々はクレオールの動詞を、3つの活用に代わって、5つの活用に分けることができる。

第1活用 : -a を語尾に持つ不定形 : kanta, jukta (跳ぶ)

第2活用 : -e を語尾に持つ不定形 : kume, ñeme (かむ)

第3活用 : -i を語尾に持つ不定形 : jubi (見る) ; fasi (する)

第4活用 : -u を語尾に持つ不定形 : kunpu (構成する) ; lambu (つかむ)

第5活用 : 子音を語尾に持つ単音節動詞の不定形 : tē (存在する) ; bĩ (来る)

4.2.2. 法

ギニア・ビサウのクレオールはポルトガル語と同じ法を持つ。しかしながら、《偶発法》が加えられうる：

No iar papia (たぶん我々は話すでしょう) ;

Bu iar kume-ba (たぶん食べてしまっているでしょう).

5. 統語論 (いくつかの特徴)

5.1. 主語の位置

ポルトガル語では主語が動詞の前、あるいは後に置かれうるが、ギニア・ビサウのクレオールでは、主語の位置はそれが代名詞であっても名詞であっても常に動詞の前である：

I bĩ (彼は来た) ; Juse na kume (ジョゼは来る).

5.2. 動詞

動詞にさまざまな意味的な側面を付与する別個の要素の位置を明示することが有益である：

a) 否定小辞 *ka* は常に動詞の前に置かれる：

N ka misti (私は望まない) ;

b) *na* と *ta* という要素は主語と動詞の間に置かれる：

I na bai (彼は行く、あるいは、行くだろう)

Juse ta bĩ tudu dia (ジョゼは毎日来る).

c) 2つの小辞がある場合、主語 + *ka* + *na*、あるいは、*ta* + 動詞、となる。

N ka na bai (私は行かない); i ka ta kume (彼は来ない).

d) 作為を示す *-nta* は真の接尾辞のように動詞に付加される:

Juse na coranta mininu (ジョゼは子供を泣かした);

e) 小辞 *-ba* は、動詞の直後に置かれる:

Juse bai-ba Lisboa あるいは Juse baiba Lisboa

f) 小辞 *-du* は、中間受動態の意を示し、動詞の後の位置を占める:

galiña dadu miju (めんどりにとうもろこしが与えられる).

5.3. 文 (一般的な規則)

a) 名詞文: 代名詞 + 形容詞 (肯定形):

i bunitu (彼は立派だ);

代名詞 + *ka* + 形容詞 (否定形):

i ka bunitu (彼は立派でない) ;

b) 動詞文 :

——主語+動詞 : i bĩ (彼は来た) ;

——主語+動詞+補語 :

直接補語は、もし他の補語がなければ動詞の後に置かれる。

i kunpra kasa (家を買った) ;

N tene fomi (私は空腹である).

代名詞の場合、この補語は前接語の形式をとる : i kunpra1 (それを買った)。

間接補語の位置は動詞の直後であり、前置詞 *a* を伴わず (これはクレオールに存在しない)、かつ、直接目的語の前である :

I da Jokĩ (間接補語) libru (直接補語) : (ジョアキンに本を与えた).

I da1 (間接補語) libru (直接補語) : (彼に本を与えた).

前置詞 *ku* (と共に), *pa* (の方に) は、当然のことのようだが、間接補語に先行する :

I na kanta ku Juse (彼はジョゼと歌う).

ギニア・ビサウのクレオールには、時間の状況補語が存在しない :

I na bai sigunda fera (彼は月曜日に行く).

「位置」については、ギニア・ビサウのクレオールにおいて2つの場合がある：

——「…へ」という運動があると、前置詞を採らない：

i bai kasa (家に行った)；

——「…へ」という運動がないと、前置詞 *na* (*em* + *o* の縮約) *na* というひとつの形式) をこのクレオールは要求する：

bu sta na kasa (君は家にいる).

ギニア・ビサウのクレオールには、さらに、命令文、接続文、「望む」、あるいは、「欲する」を表わす動詞を伴う文、疑問文、関係文、そして条件文といったポルトガル語と同じ文に相当する文が存在する…

我々の結論に到達する。言語の類縁関係、そしてギニア・ビサウのクレオールにポルトガル語が存在することを考えると、2つの言語は、一国、すなわち、独立し、主権を有するが、あらゆる文化、特にポルトガルの言語と文化に対して受容性があり、解放されているギニア・ビサウの中で、対等に、おそらくさらに非常に長い期間に渡って共存しうる。

我々がこの発表の最初のページで述べた仕事において（なお、その仕事は、『ギニアのクレオール：原理と知識』（*O Crioulo da Guiné : Filosofia e Sabedoria*）という題が付され、今年末までに発刊される予定である）、一方では2つの言語、すなわちポルトガル語とクレオールの間に共通する多くの特徴と、そしてまた他方ではアフリカ大陸西海岸のアフリカの言語にギニア・ビサウのクレオールが起源を持つことと、そしてその文化的財産の豊か

さすべてに強調を置こうとしている。

[坂東照啓訳]

カーボ・ヴェルデにおけるポルトガル語の現状

ベルミーロ・ラーモス

どうぞ、私達から体系付けられた、深く、科学的な研究を期待しないで下さい。発表者には、教養、調査、この大会の水準に十分値し、要求される資質が欠けています。

さらに時間と自由の不足が付け加わっています。我々は、一週の間、延ばすことができない学校の多くの仕事と個人生活の要請の中で、この発表を準備しました。

それで、私達は、カーボ・ヴェルデに気品高くなされた依頼に応えたいという気持ち以外に、他に求めることを持って来ていません。この非常に厳粛なる大会に、受動的ではありますが参加することは、ポルトガル語に対する私達の評価を再確認し、私達の感謝と受けた恩恵を認める一つの形です。

出席者の最上の好意だけが、私達に発表を続け、そして、主題に入る勇気を与えます。

《言語は社会的現実であり、それ故、言語はそれが挿入されている社会・地理的背景を反映し、まさにその背景の変化に従って変化する。それぞれの国民は、自分の方法で、さまざまな条件に従って言語的手段を形作る》。

その論理において、カーボ・ヴェルデ諸島の歴史—地理的概略をここにさっと描くことは妥当である。

カーボ・ヴェルデは、ごく小さい国土で、散らばった10島に分かれており、相対的にアフリカ西海岸に近く、大西洋によって結ばれる大陸を渡る海路に位置する。乾燥気候の広大な地域——サヘル（砂漠周縁部の草原地帯）を取り込んでいる。

気候は、砂漠の非常に熱い場所から、熱く乾いた煙のように移動する北東風によって条件付けられている。国土の地理的位置によって、その国土であ

る島々は、多かれ少なかれ長引く、ひどい乾燥を免れない。

経済は、農水産業を基礎とするタイプである。このことは、一見、環境的に矛盾するようである。その説明となる理由は、次の事実である。すなわち、土壌がやせていれば、底土はさらにやせており、それが産業、輸出の発展を不利にしているからである。他の原因と合わせ、この前置きの言葉において焦点をあてられた状況によって、結局、カーボ・ヴェルデは移民の土地になっている。外国におけるカーボ・ヴェルデ人の数（300,000）は、本国である群島に住むカーボ・ヴェルデ人の数（275,613）より多い。

その土地には、占領の頭初から、2つの非常に異なる文化の型が存在した。そのことについて、同志である共和国大統領アリスティーデス・ペレイラ（Aristides Pereira）が、1979年にポルトガルを訪れたとき、次のように述べている。《…ポルトガルとカーボ・ヴェルデの間には、重要な客観性を持つ歴史的なかけ橋がある。つまり、私が言及したいことは、ポルトガル人とカーボ・ヴェルデ人の何世紀にも渡る接触と密接な関係である。というのは、それが、物質的、精神的、道徳的価値の絶え間ないやりとりを可能にしたからである。

カーボ・ヴェルデの入植と植民地化が、民族・文化的に異なる2つの要素を接触させたことは、一般に知られている。すなわち、アフリカの要素とヨーロッパの要素である。存在するある要素ともう一つの要素が、持続的に影響を相互におよぼし合う中で融合し、そのことは、継続的な人種混交の過程で、社会的、文化的に独自のアイデンティティーを持つ一つの人間の型が生ずる契機を与えた。その人種混交は、生物学的現実として、文化的、心理的、感情的な力として、我々の間に課され、それらに対して、内部の意図における他の要素が打ち勝つことはできなかった》。

自然に恵まれていないことに対する戦いは、人々を結びつけ、ただ一つの人間的、文化的現実——オ・カーボ・ヴェルディアーノ（O Cabo-Verdiano カーボ・ヴェルデ人）に融合させた。

この歴史的記述を締めくくるにあたって、カーボ・ヴェルデを愛する文筆

家マヌエル・フェレイラ (Manuel Ferreira) の言葉、すなわち、彼の著書《アヴェントゥーラ・クリオーラ (Aventura Crioula)》の《すばらしい結び》に勝るものはない。《…人口の中心では、アフリカの血をより多く受け継いできているが、そのことによって、気高い個性化の途上にある混血の民族集団が、その巨大な試験場から生じることは妨たげられなかった。

結局のところ、アフリカなのか？ヨーロッパなのか？それよりもっと重要なこと、すなわち、カーボ・ヴェルデ》。我々はこの社会・地理的背景に注目し、「カーボ・ヴェルデにおけるポルトガル語の状況」を次の3つの点について観察しよう。すなわち、カーボ・ヴェルデの言語共同体における2言語併用、クレオール の地位、そしてポルトガル語の地位である。

1 — 2 言語併用

カーボ・ヴェルデは、2つの民族、つまり、ポルトガル民族とアフリカ民族が集まり、現実 に生活する場所である。それぞれの民族が、自分の文化と言語を持って来た。我々は、一種の言語の混乱と意志疎通の痛烈な必要性を想像することができる。そして、人々の共存を可能にし、政治的、経済的、宗教的目標の達成を保証するために実用的で、役に立つ、緊急の記号を作り始めた。

何時、どのように、その有用な、必要不可欠な伝達道具が生まれ、発展し、確立したのか。その答は、専門家に委ねられる。

疑いのないことは、今日、群島において明白に区別される2つの言語が共存しているということである。すなわち、ポルトガル語とカーボ・ヴェルデ語である。ただし、後者は、表面上、まだいくらかのポルトガル語の外面的特徴を有している。

カーボ・ヴェルデにおいて最初から存在する伝達手段は、母語である。しかしながら、指導あるいは教育をより受けた階層では、ポルトガル語が第2言語として、現代ポルトガル語の枠を越えるレベルにおいてではあるが、クレオールと同様に用いられる。以下のようにポルトガル語が存在している。

——人口のうち、(教養のある)限られた階層によって話され書かれる自国のポルトガル語。しばしばポルトガルにおけるポルトガル語より洗練されている。書記資料、すなわち、文学作品、雑誌、論説などをはじめとし、練られた、文語的ポルトガル語である。

——正しい地域的なポルトガル語。ただし、国語的言い回し、すなわち《地方色》を伴う地域的特性を有している。

——非常に未熟なポルトガル語。限られた場合に、特に儀式的なときに大衆層で話される。

会話の場面において、最低限のみの教育を受けたカーボ・ヴェルデ人は、送信者と同じ記号体系を維持する傾向がある。街路上の人は、尋ねられると、それと同じように返答し、門番、事務員、警察、店員も同様に返答する。教室においては、生徒は、少なくともシクロ (Ciclo) からクルソ・コンプレメンタル (Curso Complementar) まで、先生には常にポルトガル語で話しかけ、目の前の仲間にはクレオールで話しかける。役所においては、下位の職員は、上位の職員に対して、そして一般の人々に対して、こうした記号体系に従って返答する。サッカーの好きな人はだれでも、試合についてクレオールで議論し、批評する。しかし、成績報告は、《報告者》が全くの文盲であっても、常にポルトガル語でなされる。大部分の人々は、特に若年層において、ベンフィッカ (Benfica)、スポルティング (Sporting)、ポルト (Porto)、セレサウン・デ・ポルトガル (Seleção de Portugal)、ブラジル (Brasil) が関わる試合の報道を唯の一つも逃さない。

スポーツ番組の聴者へのラジオの影響は明らかである。

しかしながら、カーボ・ヴェルデにおいて二言語併用の現象が存在することは明らかである。このことは、歴史上のある限定された時期から2言語は対立、あるいは緊張状態にあることをやめたという主張を支持する根拠を与えうるにすぎない。ポルトガル語は、我が国カーボ・ヴェルデにおいて、おそらく外国語ではあるが、しかし、違和感のあるものではない。

2 — 《クレオール》の地位

クレオールは、カーボ・ヴェルデの社会の中心において恵まれた地位にある。

我々の言葉の価値は、1979年において当時教育文化大臣であった同志のカルロス・レイス (Carlos Reis) の言葉において、そして、彼の後を引き継いだ同志のジョゼ・アラウージョ (José Araújo) の言葉において、十分明らかである。

まず、カルロス・レイスは、カーボ・ヴェルデのクレオールについて、第1回言語学セミナーの開会の席で次のように述べている。

《時の経過とともに文化の解釈によって生じた言語は、市民権を得はじめ、文化的かつ国家的同一性の要素となり、カーボ・ヴェルデの国民が、P. A. I. G. C. の指導の下、植民地時代の圧制に抵抗する拠りどころとして確信されはじめた。

群島の国民は、自らが創造した言語と強く結びついたが、歴史的・文化的展開が、その強固な結びつきを生ぜしめたのであろう。実際に、カーボ・ヴェルデ人が、自分の最も深い苦しみ、喜び、悲しみ、つまり、すべての細かな生活体験を完璧に表現できるのは、我々の生活構造に確実に組み込まれたその言葉によってである。まったくカーボ・ヴェルデらしい大衆の小話、ことわざ、なぞなぞ、奇談は、クレオールで話されたときにのみ本当の意味を持つ》。

次に、同志であるジョゼ・アラウージョは、文化活性化の刺激と推進セミナーの開会の場において、次のように主張している。

《言語に関して、我々は、カーボ・ヴェルデ語をはずしては、国家の組織的、安定的発展が不可能であると考え。我々の国民の国家語かつ母語として、カーボ・ヴェルデ語は、単に文化を表わすだけではなく、個性と文化を

持つ我々の国民がすべての生活体験を表わす主要な伝達手段でもある。この意味において、我々は、カーボ・ヴェルデの言語が、我々の国民の社会・文化的、社会・経済的生活のあらゆる階層に組み込まれる形で、体系化され、文法の研究、辞書、つづり字練習帳でもって道具になると宣言する》。

このことから、クレオールは次のような役割を果たしているということが推論される。すなわち、我々の文化の主要な伝達手段、国民の母語——最初の言葉を発するゆりかごの言葉、仲間であると感じる交流をする言葉、死ぬときに最後の秘密を明かす言葉である。

3 — ポルトガル語の地位

カーボ・ヴェルデの独立は、国民に、そして、彼らの文化的価値に解放をもたらした。さて、ポルトガル語は、これもまた、どの程度までカーボ・ヴェルデの国民に及ぶ一つの文化的価値を持たないのだろうか。

もし廃墟が、もし歴史的記念物が、もし他の過去の遺産が我々のものであるならば、なぜポルトガル語はそうではないのか。クレオールを解放した我々の戦いは、ポルトガル語を同様にして解放しなかったのだろうか。

そして、もしそうであれば、ポルトガル語を保護する義務がある。

解放の前と後で、ポルトガル語の役割はどうであろうか。

我々の言語学者ドゥルセ・ドゥアルテ (Dulce Duarte) は、この点に関する答を簡略にまとめている。

《ポルトガル語は、抑圧の道具として入植者によって用いられ、そうして、教育におけるポルトガル語の使用は、カーボ・ヴェルデの植民地支配の政治的、経済的、社会的、文化的問題の中で理解されるべきである。その問題とは、すなわち、よりよく支配するために非人格化し、疎外することである》。

これは植民地主義に対する非難であり、人間が活動する道具であるポルトガル語に対する非難ではない。

同じくドゥルセ・ドゥアルテは次のようにはっきり述べている。

《あらゆることが言われているにもかかわらず、我々は、できるかぎりの訂正を加えてポルトガル語を学ぶ努力を続けねばならないであろうということを実感している。たとえば、クレオールを学び、新しい言語的地位をこのクレオールに与えようとしても、もし、国際的に広く普及している言語としてポルトガル語を必要とするなら、二言語併用者であることが必要であるという見方を失うことはできない》。

我々の教育文化大臣は次のように述べている。《強要される文化的活動の領域では、国家語の使用を奨励するだけではなく、ポルトガル語での発言に新たな勇気を与えるのも好ましいことである》。

第1回言語学セミナーの出した文書から理解されるところで、参加者の一致した意見は以下のことである。

- ・カーボ・ヴェルデの子どもと大人は、母語で読み書きが教えられるべきである。
- ・カーボ・ヴェルデは他の国民と伝達を行う第2言語を必要とする。
- ・その第2言語は、利点を有するポルトガル語であろう。その利点とは、以下のことである。

——カーボ・ヴェルデ語により近い言語である。

——一定の社会、すなわちポルトガル語を用いる国家の大部分の人口が話している。

——多くの国に散らばっている多数の移民が話している。

——さらに、多くの人口によって話される言語であるスペイン語と姉妹関係にある。

——そして最後に、カーボ・ヴェルデとポルトガル語が用いられる他の国

との間に商業的、感情的な強い結びつきが存在するということである。

ポルトガル語は、さらに国家の公用語であり、教育上の言語である。少なくとも、クレオールが十分には通用しない間は、生徒を技術的、科学的、革新的分野に近づけうるのはポルトガル語である。我々は、これが確かな道における我々の歩みすべての中で光を放つ太陽のごとき偉大なるアミルカル・カブラル (Amílcar Cabral) の言葉の真意であると思う。

《言語は、人間が仕事を通じて、他の人と意志の疎通を計るための戦いを通して創った道具である。そして、言語は人間に新たな力を与えた。なぜなら、もうだれも自分だけで黙っていることがなくなったからである。すなわち、人と人が、社会と社会が、国民と国民が、国と国が、大陸と大陸がお互いに意志を通じ合うようになった。(…) 我々の言語で言えない多くのことがあるが、我々はアフリカ人であり、よそ者の言語を好まないためポルトガル語を拒みたい人がいる。外国人が望むことは知力の向上であり、向上させたいのはその国民ではないのである。我々の党は、もう書くため、科学を進歩させるため、さらに長期間我々の国民を前進させたいならば、我々の言語はポルトガル語でなければならない。そして、それは一つの名誉である》。

クレオールはまだ口頭の言語である。それ故、ポルトガル語が書記領域すべて、すなわち、教育、大衆流布の手段、行政、文学、典礼文に入り込んでいる。

読み書きの指導と初等教育におけるポルトガル語の使用は、多くの人々が、家では母語を話し、そして、学校に入ると授業の間使用を義務づけられる新しい言語が供される子どもに対し、暴力であると見なしている。

カーボ・ヴェルデの子どもは、後になって第2言語を必要とする。しかし、子どもの年齢が低ければ低いほど容易に外国語を習得する。

どのような方法論を用いるのか。我々は、幼稚園の現在の広まりが我々に

喜ばしい驚きをもたらすであろうと考える。6月1日に、我々は子ども国際日の記念祭の催しに出席した。我が国の子どもが親交する祭りというだけではなく、2つの言語、つまり歌、物語、戯曲化されたものが交流する祭であった。遊びは子どもの最良の教師であり、かつ最良の学校である。子どもは自分のまわりのものを吸収する。その吸収能力は高い。

ポルトガル語は、教育だけでなく、行政とマス・メディア、クレオール、口頭の文芸を独占している。

典礼の分野において——ちなみに、カーボ・ヴェルデの国民はほとんどすべてカトリックであると言われるが——クレオールはすでに広範囲に使用されている。すなわち、教義口授、説教、読唱、賛美歌、祈とう、すべてポルトガル語とクレオールが交互に用いられる。

文学の分野において、クレオールはカーボ・ヴェルデの民衆的歌謡(morna)において、そしてぴったりした風刺において大いに際立っている。そして、ポルトガル語は、カーボ・ヴェルデの民衆的歌謡の字句にうまく調和しないわけではないが、《思想の文献》、長編小説、短編小説、物語、評論、モノグラフ、記事…といったものの言語という特権を貪欲に保持している。

昨年、ある展示会、つまりは本の販売会が催された。

文化総局長は、プライア(Praia)の市場がすべての在庫をさばきつくすには不十分であると見越し、残るであろうような一部をサン・ヴィセンテ(S.Vicente)に送ろうとしていた。

日暮れに販売会が開かれた。翌日、書棚の金属の骨組だけが残っていた。多くの人々と一冊も本を買うことができなかった先生たちに幻滅感が広がった。

カーボ・ヴェルデ人は文化を渴望している。そして、ポルトガル語のみがこの国民にその水を与えることができる。

今我々が述べたことすべてから、結びとしてカーボ・ヴェルデは何世紀にも渡る2言語併用の土地であり、そして、ポルトガル語が、他の世界とカー

ボ・ヴェルデが全体的に抱き合うように結びつくための腕であると言うことができ、この結びつくことがすでに今大会において象徴されている。

私達は、カモンイス（Camões）と、今大会において私達を結びつけている言語を高めることを知っていた人々の歴史に残る功績に、敬意を払いたい。

〔坂東照啓訳〕

サン・トメ・エ・プリンシペの 島々におけるポルトガル語の現状

カルロス・エスピリト・サント

革命は、一つの祭りである。だが、言語がさまざまな国、人種、思想、宗教的信条の人々の間を結合する要素であるとき、言語が一つの祭りであると主張することは根拠のないことではない。

サン・トメ・エ・プリンシペの島々は、ギニア湾の、全くの赤道地帯に位置し、おおよそ96,000人が住んでおり、その住民は伝達手段として、アンゴラール語 (angolar)、フォーロ語 (forro)、モンコ語 (moncó)、サン・トメ式のポルトガル語、そして標準ポルトガル語を利用している。

ウンブンド語 (Umbundo) の方言で、アンゴラ内陸の住民のアフリカの言語であるアンゴラール語は、サン・トメの東・西部において話されており、特に語彙のレベルでポルトガル語からかなりの借用を含んでいる。

15世紀のポルトガル語に起源を持つクレオール語のフォーロ語とモンコ語は、今日でも基層として語彙の約93%を構成しており、わずかに7%を担うアフリカの言語であると確認される語彙とは対立的である。

実例として、我々は、フォーロ語の数について、次にその短い抜粋が示されるが、これがポルトガル語との音声的なつながりの例であると言うことができる。——*ũ* (um 1)、*dòssu* (dois 2)、*tlèxi* (três 3)、*quatlu* (quatro 4)、*xincu* (cinco 5)、*sèxi* (seis 6)、*sété* (sete 7)、*ôtô* (oito 8)、*nové* (nove 9)、*déxi* (dez 10)、等々。

島々における教育の普及のおかげで、いくつかの語彙については、そのときまでアフリカ起源であったものが、ポルトガル語起源の単語にとって代わられる傾向がある。次の例は、ルイス・フェラース (Luiz Ferraz) の作品「サン・トメのクレオール」(*The Creole of S. Tomé*) から書き与したも

ので、我々の主張が正しいことを裏づけている。——*mutú* → *bulolu* (ptg. bolor かび)、*ngungun* → *lismungá* (ptg. resmungar ぶつぶつ言う)、*go* → *quexá* (ptg. queixar-se 不平を言う)、*ubuê* → *clôpô* (ptg. corpo 身体)、*goló* → *bucá* (ptg. buscar さがす)、*clocó* → *laspá* (ptg. raspar 削る)、*cutú* → *nglossá* (ptg. engrossar 太らせる)、*tumbú* → *puela* (ptg. poeira ほこり)⁽¹⁾。

フォーロ語のいくつかの迂言的構造もまたポルトガル語と相対的に近づけられている。——*dôtôlô dentxi* (doutor de dente 歯の医者) → *dentista* (dentista 歯科医)、*panu malá cabeça* (pano para cabeça 頭部用の布)、*lençu* (lenço ハンカチ)、*claçon cu gibón* (calça e casaco ズボンと上着) → *fátu* (fato スーツ)⁽²⁾、等々。

統語法に関しては、ポルトガル語の体系を思い起こさせる形跡はわずかである。むしろ逆にアフリカの言語の文法が優勢である。

フォーロ語に関して述べられたことは、プリシンペ島がサン・トメに従属した歴史に沿って発展したため、わずかな違いはあるがモンコ語にもあてはまる。

ある政治・社会的結合体によって他の政治・社会結合体に対してなされる支配が、結果として言語的層を成すことは知られている。

シェク・オタ・ディオップ (Cheik Auta Diop) のいうところによれば、植民地化は、方言を表層に導き、言語のモザイク化を促した。フランスにおいてそのような変化の成り行きが観察されるであろう。フランスでは、数世紀のドイツによる占領が、すでに国家語であったフランス語に損傷を与えて、パトワ (patois) の発達を促進したのである⁽³⁾。

国家を解放する戦いの局面では、兵士によって利用される言語は地方の言語である。国家主権回復を求める戦いは、そのように言語的解放の戦いであり、独自の国家のアイデンティティーを見い出すことであり、自分自身への回帰である。ルイ・ジャン・カルヴェ (Louis Jean-Calvet) が述べたことを参照してみよう。《国民の言語を選択することは、文化的自己同一性を基

礎においた、排他的な言語を前にしてその言語を過去に話した、あるいは現在話す国民の存在に対する権利を取り戻す戦いを選択することである》⁽⁴⁾。

国家の独立を回復した後、植民地経営者の言語は昔の圧制的な主権国の国家を思い出させ、そして、その理由によってその言語は拒否されるということが何度か起こる。合衆国の独立戦争中、例えば、州が連合するときに英語の使用を妨げ、ヘブライ語を採用しようとした幾人かの議会の構成員が存在し、その一方でまた他の幾人かはギリシア語をより好んでいた。しかし、大多数は英語を選んだ。

もし、解放されたばかりの国の国民が植民地経営者の言語を保持することを決めたら、その言語の名称の問題が、その特殊性を考慮して、ときおり起こる。

我々は、言語の本質が、その名称が表向きには変わるからといって、変化しないと思う。愛国心は、他の国民によって利用されている言語を我々が話すという理由だけでは衰えない。言語は、自我 (ego) が外部の力、すなわちさまざまな様式において所有と契約の行為が具体化される現実にゆだねてきたものではない。言語は、勢力範囲をその言語から拡大しうるある限定された話者の集団のみの所有物ではなく、それを十分に使用する権利を持つ自然に生じた話者すべての所有物でもある。

言語は、譲渡できず、時効の制約を受けず、対象物、協約、担保、違法行為、保証書、賃借契約書、譲渡契約書、等々の実際の価値に対する調査が発生することを巻き込んだ契約関係によって破壊されえない、放棄されえない、あるいは伝えられえないようなタイプの財産である。

セルソ・クーニャ (Celso Cunha) 教授は、以前、言語はより多く伝達され、かつ伝達力があるほど格が上であると書いていた。言語の混乱はだれにとっても都合がよくない⁽⁵⁾。それは本当のことである。なぜなら、言語は解放と自由な存在を教育する象徴だからである。自由から離されて、言語は不条理、すなわち《頹落》(もっとも、私にハイデッガーの思想において現われるこの概念を利用することを許していただければと思うのだが) を生み

出す。

アマード・アロンソ (Amado Alonso) 先生は言語利用自由の原則をみごとに説明している——《財産記録における注目に値する財産は、他の人たちが効力を有するものでなければ、ひとりに属するものである》——家、畑、そしてまたこの時計にこのステッキ。それらが私の所有物になりうるために、他の人の所有物ではありえない。しかし、言語はその類の財産ではない。反対に、言語は、ルネッサンス期の人々が言っていたように、伝達がなされればなされるほどより大きいものである。言語は、子供が両親から学び、同国人が関係する生活において使用し、そして詩人や散文作家が高度な文化を創造することにおいて美的に練り、みがくときに、一国の独自のものである。もしそうであれば、一国の言語は、たとえ他の国において子供がそれと同じ言葉で話すことを学び、大人がその言語で理解し合い、作家が文化的創造に従事していても、固有の財産であり、絶対にその国の財産である⁽⁶⁾。

植民地時代の言語が利用されるという事実は、解放されたばかりの国が新たな植民地であるようなことを意味しない。歴史的・言語的变化の力は、伝達手段の、あるいは公用の言語として統治者によって定められる植民地の言語を維持することだけではなく、地方の、あるいは国民の言語を維持することも可能にする。

上で述べた共存は、アフリカの言語を損うことなしにヨーロッパの言語は教えられないというさまざまな理論によって擁護されている不合理を弱いものにしてきている。他方では、また、ヨーロッパの言語を放棄することは不便であるという考えを強める。というのは、ヨーロッパの言語は、アフリカのさまざまな国の間で、そしてさまざまな大陸の他の国民との関係において常に必要だからである。

ヨーロッパの言語を排除することは、国際的な孤立、国そのものの閉鎖、そして他の国際社会からの隔絶を意味するであろう。ジョルジェ・モライス・バルボーザ (Jorge Morais Barbosa) がどこかでうまく指摘したように、諸問題の国際化によって特徴づけられるこの時代において、アフリカは内に

向かうことに利点を有しない。むしろアフリカにとって国際的な活動に加わることが重要である。

ただそのようにしてのみ、大多数のアフリカの国において、ガーナ・ナイジェリア、セネガル、等々で見られるようにとりわけ大学向けに国民の言語の教育を残しておきつつ、指導者たちが中等、大学教育にさまざまなヨーロッパの言語の研究を採用したことが理解される。

サン・トメ・エ・プリンシペの群島において採られている言語政策は、公用語（ポルトガル語）とクレオール（フォーロ語とモンコ語）及び唯一の方言（モンゴラル語）の共存を發展させること、学校、文学、芸術、社会的伝達手段、等々における言語の2体系の発達を助けること、そして最終的に双方の間に存在する不均衡を縮小することを目的としている。

モリス・ウイ（Maurice Houis）は、彼の《ブラックアフリカの言語人類学（Anthropologie linguistique de L'Afrique noire）》において、アフリカの言語における教育は、学校と学校外の間に生じるこの重大な決裂を消滅させることを可能にする変項であると言った⁽⁷⁾。

フォーロ語のクレオールは、サントメの数人の文筆家によってすでに採用された。限られた人数によって話されるクレオールの実習は、国を孤立に導くため、失敗するであろうという主張、そして、文学に関して文学作品が外国の人々にほとんど普及しないであろうという主張が言語批評のある種の分野で当然のこととされているが、彼らは、こうした主張の誤りを証明しようとしている。

ダヴィッド・ディオップ（David Diop）が、《国民詩に関する論考（Contribution au débat sur la poésie nationale）》と言う題を付した論文において、自分の言語を使用する自由を奪われ、自国の人民から離れたアフリカの創作者が、もし外的な作用によって生じた他発的な国の文学的潮流の単なる代表者にすぎないならば、自らを危険にさらしていると主張するのももっともである⁽⁸⁾。

ポルトガル語は、構造化された言語であり、すでに文法書と辞書を有する

という利点があり、このことはサントメのクレオールや方言には見られないのだが、それ故に、サントメ国民の必要性が大きく結集されたものに応える。

サン・トメ・エ・プリンシペの指導者たちは、この事実に気づいており、国民に話すとき、下位の者に関する問題を解決するとき、あるいは他の国とさまざまなレベルで関係を成立させるときにポルトガル語を利用する。

大部分の文化的、教育的活動（すなわち、シンポジウム、研究会、セミナー、会議、等々）は、ポルトガル語で行われてきた。

教育のレベルでは、初等、中等教育の数万の児童や若者が、単に必修科目であるのみならず、学校教育で唯一使用される言語でもあるポルトガル語を学んでいるということを私達は確言できる。

この80年代の新しい作家たち（なお、彼らを国家独立後に現われた者と考えてほしいのだが）は、伝達手段として、あの永遠不滅の詩人カモンエス（Camões）が大作《ルシタニアの人々（Os Lusíadas）》においてとてもみごとに高めた言語を利用してきた。

言語は、多様な（対立的）立場の統合（事実上それは失行症すなわち擬似凝結全体が現れる過程における客観的で、独立した理由として示されるエンテレケイアに等しいが）が現実化される特権的な空間であるということが再度証明される。

若手の女流詩人アナ・マリア・リマ（Ana Maria Lima）（彼女は他にも存在する中の一人にすぎないのだが）は、ポルトガル語を使用して《勝利（Triunfo）》を書いている。その詩では、次のようなきっぱりとした決心を感情をあふれさせて称賛している。

断固 決意し

私達は建設するために戦うであろう

よりよい、そしてより正しい世界を

共に続けるであろう

再建のこの行進を⁽⁹⁾

最も多様な機会と特別な状況で、ポルトガル語はサン・トメ社会を再建する仕事において貴重な、かつ不可欠な助力を与えてきた。何がその広い普及の基底に存在する原因であろうか。他にも要因はあるが、次の要因が目立った役割を果たしている——文化的、政治的、行政的、経済的、社会学的、そして宗教的要因。

実際、読み書き教育、文学、芸術、映画、ラジオ、新聞、国に関する事柄、商業に関する事柄、工業に関する事柄、社会的な交渉や機関、福音伝道、等々は、ポルトガル語で表現されている。

しかしながら、仮に植民地であった期間中、リスボンから言語的規範が発されていたとしても、今日では、ホモ・サントメンシス (Homo santomensis) のヴェルタンズィヒト (Weltansicht) の構造に従い、まさにその群島で別の正当な規則が創られているので、リスボンからの規範はそのような規則に従っていないということを我々は強調すべきである。

そのことは普通で、かつ正しい。ところで、エウジェニオ・コセリウ (Eugénio Coseriu) は、国の言語的に同じ共同体内で、そして同じ機能体系の中で、音声形式や合成形式にはむろん注目しつつ、とりわけ語彙に関することで、さまざまな異なる規範 (親密な言語体、一般的な言語体、文語体、教養的な言語体、平俗な言語体、等々) が存在しうると書いている⁽¹⁰⁾。

ポルトガル語は、サン・トメの国民の最も高度な関心に適合しつつ、彼ら国民に役立っている。新しい現実と概念に接し、新しいさまざまな語彙が用意されるが、同時に文法レベルで被る大きい変化が目立ち、そのことは、言語的行為が印象と体験に直接結びついているので、創造の行為であることを意味している。

サン・トメ式のポルトガル語が特徴づけられる点は、統語的变化 (《eu estou a pensar você muito 私はあなたのことを大いに考えている》)、冠詞の省略 (《eu já fiz jantar 私はもう夕食をとりました》)、未来形が存在しないこと (《se não chover amanhã eu vou para tua casa もし明日雨が降らなければ、私は君の家に行くであろう》)、音声的变化 (《caru

mata gente en》)、*lhe*「あなたに(与格)」に代わって *você*「あなたは(主格)」を用いること(《*eu pedi você* 私はあなたに頼んだ》)、形態的变化(《*eu não está a falar de você não* 私はあなたのことを話していない》)、語彙的变化(《*tomar tempero p'ra vir preparar carne* 肉を調理するために調味料を使うこと》)、直接話法と間接話法の混合(《*o que eu tenho a dizer você é faz favor andar. Andore* 私があなたに言いたいことはどうか歩いてくれることである。アンドーレ》)、クレオール借用(《*toda hora você quer afabal*》)、動詞の屈折の単純化(《*admirei de carne não presta*》)、冠詞なしで所有詞を使うこと(《*então minha vizinha não entregou vosê nada ?* それでは私の隣人はあなたに何も渡さなかったのか》)、待遇形式の変化(代名詞 *tu*「君は」は *você*「あなたは」に替えられ、そしてこの *você* は *sinhor*「あなたは(男性形)」と *senhora*「あなたは(女性形)」に替えられる)である。

指摘した変化は、ポルトガル語との完全な決裂を意味するものではない。なぜなら、再度コセリウの言葉を思い起こすと、言語行為は、再生成の行為と考えられる一方で、話者個人の完全に恣意的な干渉ではなく、新しい行為が含有し、かつ同時に打ち破る先行する型の上に構造化されるからである⁽¹¹⁾。

ポルトガル語がサン・トメ・エ・プリンシペの群島において深いレベルの変化を被っていることを強調する必要がある。このようにしてポルトガル語はより豊かになり、そして現在の歴史的・政治的必要性に適合している、すなわち、現実の形になっていると我々は確信する。

ハンス・ガダマー(Hans Gadamer)(シュライエルマッハー(Schleiermacher)の聖書解釈学に関する偉大な研究者)、ディルタイ(Dilthey)、そしてドロイセン(Droysen)は、有限の方法を無限に使うことが、自分自身を認識する力の本質であることを訂正を加えて断言している⁽¹²⁾。

《サン・トメ語》、あるいは《サン・トメ式のポルトガル語》を創造する

ことを我々が話しているのではないことに注目されたい。我々は新しい言語を創ろうとしているのではない。私達の望みは、ただポルトガル語のより大きい寛容性と開放性を持たせることのみ、つまり、我々の国民の経験から生まれた語彙を正当に認めること、制約を受けない文法を、我々のアフリカの伝統性と普遍性を映し出すような音声を創造することなのである。

19世紀非常に流行した現象である言語変化と生物学の間の類推を何ら引き合いに出すことなく、歴史全体の中で全く同じであり続ける言語は存在しないということを我々は断言できる。言語は構成素となる理性であり、一時性はその基礎となる定義づけである。というのは、真実であるその基層は変化を間断なく続けることだからである。

我々は、一方で群島の言語政策が国民の熱望と現実に合わせてることを避けてきて、他方で規範の固定によって多様性が縮小させられ、合流、すなわちポルトガル語のより上位のまとまりを求めてきたことを強調することなしに、この短い簡単な報告を終えたくない。

ポルトガル語のまとまり（つまり、そのまとまりが、たとえ地球の最も離れた地域で生活していても、すべてのその言語話者を相互理解させるのだが）を保つために不可欠な軸のベクトルが、それらである。

そのまとまりを考慮すると、さまざまな地域においてポルトガル語が呈する異なる諸局面を分析する目的を持つような《ポルトガル語研究国際センター》を創設することは、ポルトガル語が話されるすべての国にとって十分に利点があると我々は考える。

もし社会の現実を知りえることが社会・文化の記号が構造化される言語体系を通してであるということを私達が考慮すると、そのようなセンターを創造する利点は予想し難い。ソシュール (Saussure) とサピア (Sapir) は、言語の象徴的意義が社会組織を理解しやすくなる力 (dynamis) であることを示した。しかし、我々はラボフ (Labov) に発言権を認める。彼は次のように述べている——《言語は社会的ふるまいの形式であると真に考えられるので、言語変化のメカニズムの分析における理論的進展すべてが社会の発展

を一般的に知るために直接寄与することは明らかである》⁽¹³⁾。

もし真の勇気に他ならない我々の提案がこの聴衆席で反響に出会うなら、我々にはとてもうれしいことである。そのようにしてのみ我々は確信を持ち、相対主義の中立性、かつ／または、外在的な合理性は、現在に身を置く決意、時間、存在に満足する決意によって取り戻されるであろう。

合理性と明確化は我々の世紀を特徴づけている。ますます断定的行為から相関的、段階的解決に移行し、そのことは現存する主観性との決別を意味する。《国民はお互いの間で産物だけでなくその名称もやりとりする》⁽¹⁴⁾——著名なカロリーナ・ミカエリス・デ・ヴァスコンセロス (Carolina Michaëlis de Vasconcelos) の別の言葉より。

言語の多次元的習わしについて考えることは、存在の確実性の拡張に好意を示すことである。

真の人間のやりとりを具体化するという意味において行動することは、存続の選択、自由——全世界に及ぶ広がる生活——を実現することである。

注

(1) Luis Ferraz, *The Creole of São Tomé*, Johannesburg, Witwatersrand University Press, pp. 104-105.

(2) *Ibidem*, p. 103.

(3) Cheik Auta Diop, *Nations nègres et cultures*, Paris, Présence Africaine, p. 360.

(4) Louis Jean Calvet, *Linguistique et colonialisme*, Paris, Payot, 1914, p. 155.

(5) Celso Cunha, *Língua portuguesa e realidade brasileira*, Rio de Janeiro, Tempo Brasileiro, 1972, p.74.

(6) Amado Alonso, *Castellano, español, idioma nacional*, Buenos Aires, Editorial Losada, 1953, pp. 155-156.

(7) Maurice Houis, *Anthropologie Linguistique de l'Afrique noire*,

Paris, Presses Universitaires de France, 1971, pp. 6-7.

- (8) David Diop, 《Contribution au débat sur la poésie nationale》, in *Présence Africaine* Paris, Fevereiro-Março de 1956, p.114.
- (9) Antologia Poética de S. Tomé e Príncipe, S. Tomé, Arquivo Histórico de S. Tomé, 1978, p.138.
- (10) Eugenio Coseriu, *Teoría del Lenguaje y lingüística general*, Madrid, Editorial Gredos, 1969, p. 94.
- (11) *Ibidem*, p. 98.
- (12) Hans Gadamer, *Verdad y método*, Salamanca, Ediciones Sígueme, 1977, p. 528.
- (13) William Labov, *Sociolinguistique*, Paris, Éditions de Minuit, 1976, p. 187.
- (14) Carolina Michaëlis de Vasconcelos, *Lições de filologia portuguesa* Lisboa, Dinalivro, p. 234.

[坂東照啓訳]

Ⅲ アジアにおけるポルトガル語

東アジアにおけるポルトガル語及び ポルトガル語起源のクレオール現状と見通し

グラシェッタ・バターリャ

I マカオ

今日、マカオを訪れる人は、そこでパトアー (patoá) と呼ばれ、前世紀の半ば迄すべてのマカオ人の日常語であり、今日でも多分、土地の日常語であろうと考えているかも知れない古いクレオール方言が話されているのを聞こうと期待すべきではない。また、ポルトガル語が大いに話されているのを聞こうと期待すべきでもない。何日も街を歩きまわっても、ポルトガル語の単語を聞かないということさえあり得る。

このことは、最近やってきた人達を驚かせるし、失望もさせる、しかし40万人の人口のうち、わずか3%が最近にせよ、遠い祖先にせよポルトガル起源を持っている住民だということを考えれば、この事態は理解できるし、受け入れるべきであろう。また、更に、この少ないパーセンテージの人達の多くが、ポルトガル語を話し、理解できるとしても、ポルトガル語を自分から話したがる、30才以下のマカオ人の世代の眞の母語となっている中国語を使う方へ常に逃げて行く。

ここで、私が既に論文で主張したひとつの定義を繰り返すことになるだろうが、このことは、マカオに住んだことのない人には、あまり明瞭ではないであろう。

マカオ人とは、何であろうか？

たとえば、ポルトガル式の名前やパスポートを見せたとしてもマカオ生れの人すべてを指す訳ではない。マカオ人とは、マカオに於ては、この土地生れであることは勿論だが、何回も混血していたとしても、ポルトガル人の祖先を持っている人達だけをいう。従って、マカオのポルトガル系・ヨーロッパ

アジア人のことである。

マカオで生れ育った中国人は、常に、また今でも中国人とみなされ、マカオ人ではない、但しポルトガル語とポルトガル文化を取り入れた場合を除く。この場合、カトリックとして洗礼を受け、マカオのポルトガル語の小学校、中学校に通い、多くの場合ポルトガルで高等教育を終える。これらのポルトガル文化を持つ中国人は、マカオ人の社会に完全に統合されて生活し、そこで殆ど常に目立った役割をはたしているが、数は少ない、他方、中国人は、一般に知られているように、その祖先の文化に非常に忠実である。ポルトガルは、この忠実さを妨げたり、他のものを押し付ける政策を取ったことは、決してなかった。

このようにして、マカオの街に群がっている住民の97%は、ここで生れ、生活し、ポルトガル語の単語の半ダースしか話さずに死んで行く。これは商売を除いては、ポルトガル人とのすべての接触を必要としないためか、あるいは、マカオ人達がバイリンガルなので、この人達とは中国語で意志の疎通をするためである。

最後に、「ポルトガルのポルトガル人」がいるが、これは、ここ3～4年相当増えたとはいえ、常に非常に小さい少数派である。

中国人自身が、人種の異なるこれらの三つの社会を、非常に明瞭に区分し、(広東語で) Chông Kwók Iân (中国人)、Ou Mun Iân (マカオ人)、Pou kwok Iân (ポルトガル人) とそれぞれ呼んでいる。この区別は、マカオ人が、数世紀も前から、自分達自身に付けた呼び方にも、常に暗黙のうちに存在していた、即ち殆んど消えてしまったクレオール表現 Macau filo 又は filo Macau [マカオの息子]、現在の口語では、filho de Macau, filho da terra [土地の子] 又は nossa gente [我々の者] である。macaense (マカオの、マカオ人) という表現は、より教養のある話し言葉で使われ、macaista という表現は「典型的なマカオの物事」即ち、古い言葉、人々、昔の習慣という意味が強い。

現代の話し言葉 (falar actual) という呼び方で一筆者は Paiva Boleó

教授のかって弟子であり、今もそうなので、その呼び方に従うと一、この方言が、最近100年間に発展した形を指すとする、眞のクレオールは誰れももはや話しておらず、それを理解する者も少い。これに非常に近い方言を、その構造や語いが既に変化しているとはいえ、未だ使っている人達は、昔上海に住んでいた。何世代にもわたって同地に定住していたマカオ人の家族で、1949年以後、上海が中華人民共和国の新しい体制に支配された時、マカオに引き揚げて来た人達である。マカオに引き揚げ、そこから五つの大陸に散っていったが、一部の人達が、この古い祖国を彼等の最終の地としたのである。

これらの人達は、上海で、英語と並んで、その言葉を保持した人達であるが、ポルトガルの学校もなければ、マカオとの接触もなかったので、マカオで見られた発展について行くことは、明らかにできなかった。香港のポルトガル人社会にも、同様の話し言葉が見られ、これも移民社会であるが、この点については、少し先で述べることにしたい。なお、マカオの住民でも、その祖父母達と50年以上前から同居していて、方言が当時話されていた通りに再現できる者もいるが、これは彼等の日常的な表現形式ではない。

クレオールは、マカオに於ては、ポルトガルとの接触が密接になり、以前の世紀には極めて少かった小学校や中学校が創立され、ポルトガル語による学校教育の機会が増えて行くにつれて、教育のない人々の言語 chacha シャシャ又は uhonhas ウホニャスとして、最近100年間は軽視され始めた。

しかし、半世紀前からこのかた、ポルトガル語を教える学校や教員が常が増え続けることによって、標準のポルトガル語に向って決定的に進むことが期待できると思われた時に、社会的性質の要因によって、この言語の進展のコースが変えられることになった。

この時期に、異人種間の結婚が急に増える現象が起きたので、マカオの子供達の多数が、揺りかごにいる時から母語や国語の構造を吸収するようになった。というのは、ポルトガル人と結婚した中国人の妻達は、子供や夫とポルトガル語で話すことは稀れで、夫達が、上手であれ、下手であれ、彼女達と中国語で一又は英語、この場合より教育がある者の手段として、一で話して

いる。マカオ人の妻達自身でさえ、子供達と、少くとも学令期に達するまでは、中国語で話している。

更に、中国人社会の経済・社会的権威が高まって行く中で、マカオ人の日常語として中国語を使うことが、完全に受け入れられるものとなったが、このようなことは50年前にはなく、当時は、例えば、ポルトガル語教育の学校で生徒同志が中国語で話すと、他の者から、変な目で見られたのである。

今日、このような偏見は完全に姿を消した。私が30年前にマカオに着いた時、既に存在していなかった。若いマカオ人は、街路でも、遊び・パーティーの中でも、学校の廊下や中庭でも、また先生が常に注意しない限り教室の中でも、お互いに中国語で話していた。この習慣はあまりにも広がったので、ポルトガル人の母親達は、彼女達が両親とはポルトガル語で話すのに、遊びに夢中になると、お互い同志中国語で話すと、私に知っている。

結果としては、中国語の領域が増える（平面的領域である、というのは話し言葉だけの中国語で、非常に庶民的レベルだからである）のと反比例して、マカオにおけるポルトガル語の領域は減少してきた。

この事実、発音には反映されておらず、発音はクレオール発音より、標準のものに近い、しかし語いと、混乱した文法構造には反映され、動詞の変化（中国語では、ずっと単純である）、時と法の用語、主語と述語・名詞と形容詞の一致、冠詞・接続詞・前置詞の用法、等に著しい困難を引き起こしている。

この極めて懸念すべき状況を更に深刻にしているものは、多数のマカオ人の子供とヨーロッパ系の子供さえ、我々のポルトガル語教育の学校から遠ざかっていくことである。

子供の将来の安全に対する親の理解できる希望から、マカオでもポルトガルでもこの将来の安全は保証できないので、マカオにある英語教育の私立学校の学費を負担できる親の多くは、幼児教育の時から子供に英語を習わせることを選び、その後外国の学校に進ませるか、少くとも、英語国で就職し易くすることを目指す。

その数字は印象的である。1982年6月に公表された統計表によると、1972年から1981年迄の即ち約10年間に、ポルトガル語教育の6つの学校から減った生徒数は160人であった。この数字は、5万人以上の中国人学令期人口の中で見れば、なんでもないであろう、しかし、約2千人のポルトガル人学令期人口の中では驚嘆すべきものである。

これとは対照的に、今筆者が描いた落胆させるような構図を、若干元気付けるものとして、この2～3年間、マカオの中国人の間にポルトガル語が目ざましく普及してきていることを述べるべきであろう。

ポルトガルの統治で得られた利得に関して、更に魅力的な条件は、中国の資本とそれに伴う人員をポルトガル又はポルトガル語圏の諸国に配置する見通しがあること、ポルトガルの企業がマカオに開設され、ポルトガル語ができる職員を必要とすること、これらのことがポルトガル語学習に対する関心の動機となっている。この関心とマカオ政府側のこれに応える大きな能力が合まって、来学期から多くのポルトガル語コースが開設される原因となった。

このため、今終る学期には、無料のポルトガル・中国公立小学校、この無料であるということが魅力となっているが、その三つの小学校通学者（全員中国人）の数は、1,139名であった。8つのポルトガル語公立及び公認学校の中国人学生数は、合計約2,800人中1,108名である。私立の中国語・英語学校のうち、選択科目としてポルトガル語がある学校は16校あり、その登録者数は、2,921名であった。13ある成人向の課外コースのうち、11の政府教育・文化局及び私立のコースにポルトガル語があり、中国人の学習者は2,328人であった。ポルトガル語学習の中国系登録者数は、合計で7,496人となる。この数字は、マカオの中国系住民数に比較すると、まだ少ない、またいつも見られる途中でやめてしまう数も考慮しなければならないが、この数字は以前の年には一度も達したことの無いものである。また、公立のコースでは施設が不足しているため、申し込みを断ったことさえある。

しかしながら、数それ自体だけではあまり意味がない。行政府は、ポルトガル語－中国語教育の効率を良くするよう努力してきており、このため最近

活性化されたマカオ小学校教員養成校で、常に教員及びモニターの不足と戦ってきた。この外、外国人向にポルトガル語を教える専門の教員をポルトガル国内で十分な数を集めるのは不可能な間は、というのは、そもそも十分な数はいないと思われるので、少なくとも小学校教員の免状をもっている者を最大限集めるよう努力が払われている、これらの人達は、昔から臨時の特任教員として入られてきた全く資格のない人達が提供できるものより、確実により効果的な寄与ができるであろう。

従って、中国系住民のポルトガル語習得に対する需要が増えて行くのにこたえて、ポルトガル行政側が益々適切な対応が期待されている。この対応としては、既にあるコースを益々拡大することと、新しい別のコースを開設することであり、これと平行して、ポルトガル語教育の効率をより高めることである。

この効率を高めるという希求は、ポルトガル—中国語の教育だけに限定されるべきではなく、マカオの子供や青年が、言語の分野で持つ困難な点に対して、より現実的な配慮が最終的に払われるべきことも期待されている。

この分野で、私には極めて有意義と思われる二つの実験が、今年行なわれた。ひとつは、マカオ中等教育校（リセウ）に付属した予備校の補習コース（成人向）に大学入学のための一年間のコースができ、もうひとつは、ペドロ・ノラスコ商業学校のポルトガル語の授業時間が相当増えたことである。これは、中国人生徒であれ、マカオ人の生徒であれ、大学入学予備正規コースについて行くのに十分な言語習得ができていない生徒に対し、週8時間から10時間の集中教育を行うものである。

この種の実験は、私が考えるところでは、一私だけではないが、大いに拡大されるべきである。この拡大に、マカオでは今始まったばかりではあるが、ポルトガル語を第二の言語として教える教員を大巾に養成することが組み合されると、マカオのポルトガル人自身のポルトガル語能力の向上のために今日迄得られた結果より、更に目に見える結果を確実にもたらすことに寄与するであろう。

註

- (1) マカオの学校制度について短かい註を付ける必要が多分あるであろう。中国語 and/or 英語の大学1校、ポルトガル語－中国語公立小学校3校、ポルトガル語の公立又は公認学校8校を含め、合計で67の私立の学校がある。

[有水 博訳]

ゴア, ダマン, ディウにおける ポルトガル語の衰退 〔その普及のためのいくつかの提案〕

カルロス・シャヴィエル

ポルトガル語は、インドへの領土統合まで、ゴア、ダマン、ディウの公用語であったが、1961年、急速にその地位を英語へと譲っていった。それは、わずかのうちに、インドにおける旧ポルトガル王国の全行政機関が、英語しか理解しないインド行政府の役人たちによって運営されるようになったからである。

学校教材においては、1961-62年度末まで変更はなかった。

1962年の6月、高レベルの委員会がゴアへやって来た。委員会は、ニューデリー企画委員会のメンバーでもあるB.N.ジャー氏、ダルバルのカルナタカ大学英語学部長アルマンド・メネゼス教授、ニューデリーの教育省の相談役補佐ビジャム・ムライ氏によって構成されていた。この委員会は、インドの他の地域で実施されていた制度に沿って教育制度を再編成する目的で来たものであり、新制度は1962-63年度の始めに実効になるべきものであった。

委員会は、かなりの数にのぼる人々にインタビューしたり、現行の教育法を校正したと、念入りの調査の結果、政府から承認され、1962-63年度、直ちに施行されることになった“新教育基本法”を設定した。

それにより、以下の規則が導入された：教育現場における使用語は母語、または憲法追記八番目のリストにある中の言語で行なわれるものとする；この言語の選択は、両親、または教育担当者の任意によるものとする；開校、または特定の言語での授業の開設は、最少20人の生徒がいることを条件とする。

授業科目に関してはほとんど変更がなかったが、ポルトガルの歴史と地理が廃止され、インド（ゴアを含む）の歴史と地理に代えられた。宗教教育も

廃止された。

すでにポルトガル語で初等教育の3年、または4年にいる学生の場合、授業と同様試験においても引き続きポルトガル語を通用語として使うことが許されたが、それは最初の2年間のみ（1962-63年度と1963-64年度）に限られた。

初等教育の5年目で、生徒はもう一か国語：英語、ポルトガル語、又はヒンズー語、を選ばねばならなかった。

その時には、生徒が教育現場での使用語を英語に代えられるよう、英語を重視することが勧められた。

しかし、選択の時が来ると、特にコンカン語、又はマラタ語を支持するグループの中で強い感情の葛藤が起きた。コンカン語を愛する者はコンカン語を、マラタ語を愛する者はマラタ語を両親が母語として選ぶことを願った。コンカン語支持者は、コンカン語が憲法追記第八表に含まれていず、またマラタ語支持者にコンカン語はマラタ語の一方言であるにすぎないと言われているのにもかかわらず、コンカン語を独立した一つの言語であると、強く主張していた。

マラタ語の私立校は全て公立校となり、ポルトガル語-マラタ語の公立校は全て、マラタ語の公立校となった。ノーヴェス・コンキスタス（“新植民地”）におけるポルトガル語の公立校は、大部分がマラタ語あるいは英語の公立校となった。ヴェーリャス・コンキスタス（“旧植民地”）にあったポルトガル語の公立校は、全て英語、あるいはコンカン語の学校、又は課業へと変わったが、わずかの学校がポルトガル語の学校、又は課業として続けた。ポルトガル語-ウルドゥ語の公立初等学校は、ウルドゥ語の公立校へと変わり、北部地区のポルトガル語-グゼラテ語の公立初等学校は、ポルトガル語の課業をわずかに二つ残すのみで、グゼラテ語の公立校へと変わった。

親の側としては、当惑した。ポルトガル語がもはや、子供達が官公庁や会社で仕事を得るための手段として、役に立たなくなったのである。英語は、全インドで通用する言葉であった。従って、ポルトガル語を自分の子供の母

語として宣言したがる親はいなかった（いたとしても、ほんのわずかであった）。ポルトガル語はこうして、急速に教育の現場から消えていった。（わずかの例外を除く）

インド独立後すでに、ポルトガル語の公立校の学生数は減る傾向にあった。1942-43年度、インドにおけるポルトガル国立の学校には、10,546人の学生がいた。この数は、1947-48年度に8,585人になるまで漸次減少していった。そのすぐ翌年からは増加し、1950-51年度には、10,741人という数に達した。ポルトガル統治末期には、初等学校を新設したり、教育現場直結のニードに対応するための指導者団体を創設したり、ポルトガル語を教える学校への補助金を設置したり、ノーヴァス・コンキスタスの僻地にすら近代様式の新校舎を建築したり、初の学齢期の子供の人数調査を体系化したり、教育を義務化したり—これは、最後の提督ヴァッサロ・イ・シルバによって採り入れられた政策である—などの努力によって、状況は少し好転した。これら全てをもって、公立初等学校に在籍する学生数は、18,971人に達した。

ここで、1961-62年度にポルトガル語、ポルトガル語-マラタ語、ポルトガル語-グゼラテ語、ポルトガル語-ウルドゥ語の公立初等学校と、ポルトガル語の授業が行なわれていた私立校の状況がどうであったか、統計を見よう。

使用語	公立校		私立校	
	学校数	学生数	学校数	学生数
ポルトガル語	151	17,028	104	9,289
ポルトガル語-マラタ語	4	125	—	—
ポルトガル語-グゼラテ語	11	1,101	—	—
ポルトガル語-ウルドゥ語	10	717	—	—
英語（1）	—	—	17	7,313
合計	176	18,971	121	16,602
全校数：297	全学生数：		35,573	

（1）英語学校では、初等教育3年生程度のポルトガル語能力を持たぬ学生に対して、ポルトガル語教室と呼ばれるクラスでポルトガル語が教えられていた。

次に、1960-61年度以来、ポルトガル語が初歩的に教えられるにしかすぎ

なくなった他の言語の私立校の状況を見てみよう。

使用語	学校数	学生数
マラタ語	167	16,220
ウルドゥ語	8	482
グゼラテ語	4	1,323
合計……………	179	18,025

ポルトガル語の公立初等学校の急速な消滅によって困難な状況を呈したのは、教師達の吸収問題であった。しかしこの問題は、ポルトガル語－マラタ語、ポルトガル語－グゼラテ語、ポルトガル語－ウルドゥ語の公立初等学校においては影響を及ぼさなかった。なぜならば、そこでは教師達は二か国語（ポルトガル語とマラタ語、又はグゼラテ語、又はウルドゥ語）を教えていたからだ。

この移行においては、コンカン語がわかる教師はコンカン語のクラスへ、英語がわかる教師は英語のクラスへ、というようにして調整が行なわれた。わずかの教師がポルトガル語のクラスに残ったが、クラスは少なかったし、サルセテ郡クルトリンにおける最後のクラスが教師の退職をもって閉鎖された時点で、ポルトガル語の初等教育はもはやゴア、ダマン、ディウに存在しなくなった。

約4世紀半にわたり（アルブケルキがすでにコチンで初の学校を設立していた）、初等教育を通じてインドにおけるポルトガル語の普及のために費やした努力がせいぜい三年前後で水泡に帰してしまったのは、実に残念なことであった。

ポルトガル語は、17、18世紀にアジアでの通商のための通用語であったが、インド亜大陸においてポルトガル語普及のための十分な基盤を持っていなかった。一方、英語は自国語をインドに根ざすことに成功、英語は今日までインドの公用語である。そして、南部の住民がヒンズー語を受け入れないため、英語からヒンズー語への交代は難しいであろう。

ポルトガル語での初等教育が絶えてしまってから、中等教育に起きたことにも差はなかった。ほとんどの学校は英語へと、その他の学校はマラタ語や

グゼラテ語へと使用語を代えた。中等学校においても、この移行は急速に進んだ。

1961-62年度、ゴア、ダマン、ディウにおける初等学校と技術学校の状況は次のようであった。

使用語	公立校		私立校	
	学校数	学生数	学校数	学生数
ポルトガル語：				
リセウ	1	921	13	1,700
技術学校	4	993	—	—
合計……………	5	1,914	13	1,700
その他の言語：				
英語学校	—	—	53	4,997
マラタ語学校	—	—	19	1,287
グゼラテ語学校	—	—	6	283
合計……………	—	—	78	6,567
使用語	学校		学生	
ポルトガル語	18		3,634	
その他の言語	78		6,567	
合計……………	96		10,201	

続く1962-63年度のこれらの学校の状況は次の様なものであった：英語学校へ入学するために必要だったポルトガル語3年生程度の能力が求められなくなり、また、それらの学校の低学年におけるポルトガル語の授業も行われなくなった。

公立校で使用する言語は英語へとかわった。マラタ語とグゼラテ語の学校も開校された。

全ての中等学校がプーナ（マハラストラ）中等教育協会に加入し続けたのに対し、リセウは上級中等学校となり、ニューデリー中等教育協会に加入し、少数の学生に第三国語としてポルトガル語を教え続けた。

ダマンとディウの中等学校はグゼラテ中等教育協会に加わった。

1975年に、ゴア上級中等教育協会が創立され、リセウを除く全ての中等学校がそれに加入した。プーナの協会はこうしてゴアの学校に対する管轄を失っ

た。同じ年、初めて10+2+3方式による中等教育が実験的に導入されたが、これは、10年間の中等教育（4年間の初等教育を含む）、2年間の上級中等教育、3年間の大学教育からなるものであった。

大体この時点で、8年生、9年生、10年生の授業で第3国語としてポルトガル語をおしえていた学校は3校のみ—政府上級中等学校（旧リセウ）の他に、クリトリンの聖シャヴィエル大学と聖女メアリー女子高等学校、人民高等学校、後者二校はパンジンにある—であった。

1980—81年度に、中等学校の数250であったが、第3国語としてポルトガル語を教えていたのはわずか3校であった（上記にのべたもの）。

残念なことに、それぞれの学校でポルトガル語を学んでいた学生数を知ることができるような第3国語の統計資料は集められなかった。しかし、1982—83年に、第3国語としてポルトガル語の授業を始めた学校はほとんどなかったようである。

存在する六つの文学部のうち、二つはポルトガル語学部を有し、パンジンのボンバイン大学の大学院センターでも先月4月にポルトガル語の客員教授の任命が発表されたばかりである。

この他、ポルトガル言語文化アカデミアと歴史研究のためのシャヴィエルセンターと印ボ文化センターで短期コースが行なわれている。

しかし、ポルトガル語教育の発展のためにどのような努力がなされようとも、ポルトガル語の大規模な普及は、中等学校において、しかも第3国語としてのみしか可能ではなかろう。

そこで、私は以下のことを提案する。

1. 各クラスで最も優秀な三人の生徒に本の賞品を与えるなどして奨励したり、各学校設置の巡回図書をつくったり、学校の行事でポルトガル語の本をもっと購入したりして中等教育におけるポルトガル語普及をはかる。
2. 短期コースへ援助をあたえる。
3. 今でもインドにおいてポルトガル語を話している住民の居住区を位置

づけ、その独特な話し方や民間伝承を集める。

4. 来年、インド全土におけるポルトガル語普及の可能性を研究するための全インドセミナーを開催する。
5. ポルトガル語の修得を希望する中等学校の学生、あるいはその他の人々のために、休み中の短期講座を開設する。
6. ポルトガルでポルトガル語やポルトガル文学の短期講座に通うことを希望する学生に奨学金を与える。

[平田恵津子訳]

訳者紹介

- 河野 彰 上智大学外国語学部、同大学院修士課程修了
大阪外国語大学地域文化学科中南米地域文化専攻助教授
専攻：ポルトガル語学
- 有水 博 東京外国語大学卒業
大阪外国語大学地域文化学科南欧地域文化専攻教授
専攻：ポルトガル、ブラジル、ポルトガル語圏アフリカ地域研究
- 東 明彦 大阪外国語大学、同大学院修士課程修了
大阪外国語大学地域文化学科中南米地域文化専攻助教授
専攻：ブラジル史
- 坂東 照啓 大阪外国語大学卒業 広島大学大学院博士課程中退
大阪外国語大学地域文化学科南欧地域文化専攻講師
専攻：ポルトガル語学
- 平田 恵津子 大阪外国語大学卒業、UCLA（カリフォルニア大学ロサンジェルス校）大学院博士課程在学中
専攻：ブラジル文学

大阪外国語大学学術研究双書 9 世界の中のポルトガル語

1993年11月30日発行

監 訳 河野 彰

発行者 〒562 箕面市栗生間谷東8丁目1番1号

大阪外国語大学学術出版委員会

印刷所 〒531 大阪市北区中津6丁目13番20号

(株)アイジイ

ISBN 4-900588-09-1

無断転載を禁ずる。

大阪外国語大学学術研究双書 既刊

- | | |
|--|----------------------------------|
| 1. レフ・トルストイと革命運動 (1990) | エルヴィン・オーバーレンダー著
法 橋 和 彦 監訳・解説 |
| 2. ロシア語アクセント研究 (1990) | 神 山 孝 夫 著 |
| 3. 社会言語学 (1991) | フリチョフ・ハーガー 等著
乙 政 潤 訳 |
| 4. Dwelling Space in Eastern Asia (1991) | Richard ZGUSTA 著 |
| 5. ラ・アラウカーナ (第一部)(1992) | 吉 田 秀太郎 訳 |
| 6. 私の精神鑑定集 (1992) | 志 水 彰 著 |
| 7. モンタペルティ・ベネヴェント仮説 | 米 山 喜 晟 著 |
| 8. 古代ブルガリア語文法 | イヴァン・ドブレフ 著
石 田 修 一 訳 |

